す、正因果の道に達するものは因緣に委任して敢て意を動せざるなり、此を眞の道人と云ふ、其實に於ける如幻如夢の境界にして、無常不堅の果報なるを以てなり、金剛經曰一切有爲法如夢幻泡影如露亦如電應作如是觀と說き玉ふ是也、唯正見を尊ふ邪徑に入ると勿れとは、正見は邪に對す邪見とは五惡見中(身見、邊見、取見、戒禁取見、邪見)の一種にして、唯識論に因果を撥無するを邪見と說けり、撥無因果とは善因に善果なく惡因に惡果なしと決擇するなり、法事讚の上懺悔段曰、樂行邪見乃至謂修善無福造惡無殃外道闡提業不行正見禁行出世往生淨土障との玉へるとこれなり、されば深く因果を信じて善惡必ず報果あるとを忘れざる人を正見と名く、善導の戲笑作罪多劫受業酬分明不可欺との玉へる善く此の正見を敎へ玉へる文なり、觀經五逆破戒の往生を許すは慚愧懺悔して正見に皈すればなり、邪見闡提の往生せざるものは此正見を失すればなり、大悲の光明普く十方を照すも、唯邪見の稠林をてらすあたはず、小消息に罪人は往生すれども、罪業は往生の障りなりとの玉へるは此に由てなり、れそるべくしてつゝしむべきは此邪見なり、故に云ふと爾り、佛恩を報ずとは大悲傳普化眞成報佛恩と示すの意を出す、國恩を報ずとは心地觀經報恩品の中四恩を說き玉へり、一父母恩、二衆生恩、

三國王恩、四三寶恩、此中國王は正法をもて化し能く衆生をして安樂ならしむ此恩廣大以て報せずんばあるべからず、我黨正見正法を護持すれば即國王の正法を資助するなり、報恩こゝにあり佛子しらずんばあるべからず、我本宗の解と行と此中を出でず、上來は多く僧者の心地を堅固にせんが爲に云云す、其在家信男信女もよく此旨趣を體達せしむへし、昔しは頻婆沙羅王日々五百乘の車を運て、如來及阿羅漢衆僧を供養し、須達長者祇園精舍を建築し、摩訶波闍波提(佛之祖母此曰大愛道)獻佛十萬兩金、袈裟等、其餘支那に本朝に代々の國王大臣長者居士起立塔像、飯食沙門其例あぐるに暇あらず、皆是眞の佛法を信歸する人なり、末代と雖も亦其志を發さしむる特に僧者の自行化他に屬す、幸に正法を說き正理を示して居家の人を勸導すべきなり。

明治十三年四月大會議の日、琇宏敎正の請に應して綠山法語を書し、且其說の由る所を記す、

傳語

緒言

吾傳宗傳戒の法義近世に至り附會の妄說錯雜して將に二祖三代の正傳を失はんとす先哲嘗て之を憂ひて終に矯正の時機を得す故行誠老敎師亦深く之を憂ひて挽回を希圖せられしや倘し適ま本宗一大變革の運に際し其機會の稍熟せるを察し一編の草案を出して之を一宗敎師に稟議せらる諸敎師僉な隨喜し與に證誠を爲せり因茲管長は公式に由て之を裁可し以て傳法更正の事を確定す眞に是れ千載の奇遇法門の至幸と謂つ可し且此傳語註釋を請ふに方り老敎師の疾已に輕からす而れとも法の爲に痛苦を顧みす强て之を撰述しまさに其稿を脫せんとするに臨み懇ろに告て言庶幾くは之を印刷に附して謄寫の勞を省き以て速に諸敎師に頒てと實に明治廿一年四月十五日にして其鶴林に先つこと僅に一旬なり今や印刷既に成る依て聊か其顚末を記して以て後の敎師たらん者に告く

明治廿一年七月廿五日

淨土宗務所

傳語

觀經四帖の疏は善導大師の傳法なり元祖大師これを傳へて選擇集を述し鎭西國師これを傳へて授手印を叙し記主禪師これを傳へて選擇決疑抄等を述作す日月の天に在て萬人これを仰くか如し餘宗の秘傳密授機を撰てこれを傳ふるか如き法門にはあらさるなり我宗傳法分て二とす一に戒脈なり二に宗脈なり戒脈は佛家の通規なり宗脈は本宗の別規なり此條目の中又二種とす一に學匠相承なり二に結緣相承なり先に學匠相承を述す

戒脈の說は十二門戒儀を細釋す（未た稿を脫せす不日に此を披露すへし）

宗脈の說は省略して大途を示す委說は他日を待て製述あらんとす

今按す學匠相承は二七日の加行と定む此中初の七日を以て一日毎に十二門の一科を講す第七日に當て唯授戒の揭磨のみを行ふ第二の七日を以て一日毎に五重を一重つゝ說示す此を自行決定門とす第六日を以て化他を說示す化他門に三種あり一に說法開導條二に檀越葬祭條三に破邪顯正條なり第七日に至て傳法要偈式を以て日課の作法を行し此を結願とす昔は大五重の式あり加行中三卷七軸の講談を務む中古に至て此を廢す能化の怠慢なり第七日にして九箇

條を云云す所化に於て淦受することあたはす今古傳に復する此に意あるなり

圖を以示すへし

學匠相承

- 両脈
  - 戒脈
    - 第一日—第一第二門講
    - 第二日—第三第四門講
    - 第三日—第五第六門講
    - 第四日—第七第八門講
    - 第五日—第九第十門講
    - 第六日—第十一第十二門講
    - 第七日—正授戒式
  - 自行
    - 第一日—選擇集（第一第二第三章の大意を演ふ）
    - 第二日—授手印

- 宗脈
  - 化他
    - 第三日—領解抄
    - 第四日—疑問抄
    - 第五日—論註（總別相十念傳）
    - 第六日—三條
      - 說法開導條
      - 極越葬祭條
      - 破邪顯正條
    - 第七日—要偈式

右五重の典籍は本宗傳法の腑臓なり寛急相應し脈胳貫通すゆゑに此をなつけて宗脈と號す（昔日五重と宗脈とを別傳するいはれなきことなり況や化他門の名葬祭の儀にかきるものはなんそや本宗衰敗の端緒を聞くこれによるものなり）

○第一日選擇の傳とは（昔日往生得不の記文を以て初重とす而して此の書未た作者なつまひらかにせす古寫本源空上人作と記す決して上人の語氣にあらす四休庵の曰く其邇僧都なるへしと誠按すすこふる往生決心記の語氣に似たり然れとも必す其邇にあらさるへし授機抄撰者の評なし遊あるに似たりやゑに今古傳に復して撰擇を以てす）

我大師廓然として善導の元意を大悟して初めて聖道門を捨て淨土門に歸入するときはこれ高倉院即位七年(乙未)承安五年(今年安元と改元す)の春生年四十三にてそましましける(元亨釋書に承安四年といへるは誤なり)右敕修御傳第六初丁巳下に註する所による

此の後大師六十六建久九年正月月輪殿下の請によつて選擇集十六章段を記錄す承安五年より今年建久九年にいたるまて大凡廿四年をへたてたり此集述作あるに及て初めて安樂集の捨聖歸淨の一章を以て淨土門開宗の證文となす蓋し敎相段は各宗すへて廢立をもとゝするを例とすれはなり曇鸞善導各敎相あれとも廢立の意うとし獨安樂集の捨聖歸淨の一段の敎相を用ふるこの例なり私釋段の終りに至て淨土開宗の說をあけて云云するものはそもそも亦これか爲めなり大師一切經披讀五返各宗の傳法れきろをきはめさることなし然り而して述作篇書のすくなき各宗祖師に似さるものまた類あることなしこれ本宗は口稱三昧の行法を以て常業とし解學述作以てこゝろとせす多生の迷倒を今日に盡し當來の解脫を順次に期す人間匆々として非務を營む時にあらさるを以てなり大師日課七萬遍の後は御說法もこれなきよし申傳へたるも此趣なるへし竊に按す題下三重の口傳意此にあることを

第二章捨雜歸正散善義を引て曰く五種の正行五種の雜行これを大師楷定古今の說となす曇鸞道綽未たいはさる所なり私釋段に至て此れについて二行の得失を明し五番相對を建立し廢立助正傍正の三義を立て以初爲正を決擇とすこれを本章の口傳とす傳語に曰く二祖國師善導和讃に曰く釋迦の淨敎弘通する論師人師は多けれと正雜二行の分別は京師大師にはしまれりと此を本章の傳語とす

第三本願章大經及ひ往生禮讃を引く私釋段懇懃にこれを註し且勝劣難易の二義を設けて善導獨り佛意の本願唯念佛にあることを證すこれ又曇鸞道綽共こゝろなきにあらすといへとも未た其義を說くに及ばず又これ楷定古今の妙義なり傳語に曰く一心專念彌陀名號乃至是名正定之業といへるこれなり善導元祖共に一世の法語本願の二言を以て口實とするもの深く意を用ひて味ふへし口傳傳語學るに遑あらす第四章段已下各各口傳傳語あり學匠研究すへし今これを略す

○第二日授手印口傳本書の緣起は第四日疑問抄に至て此を辨すへし此中今の本文六件あり

一に五種正行
二に三心

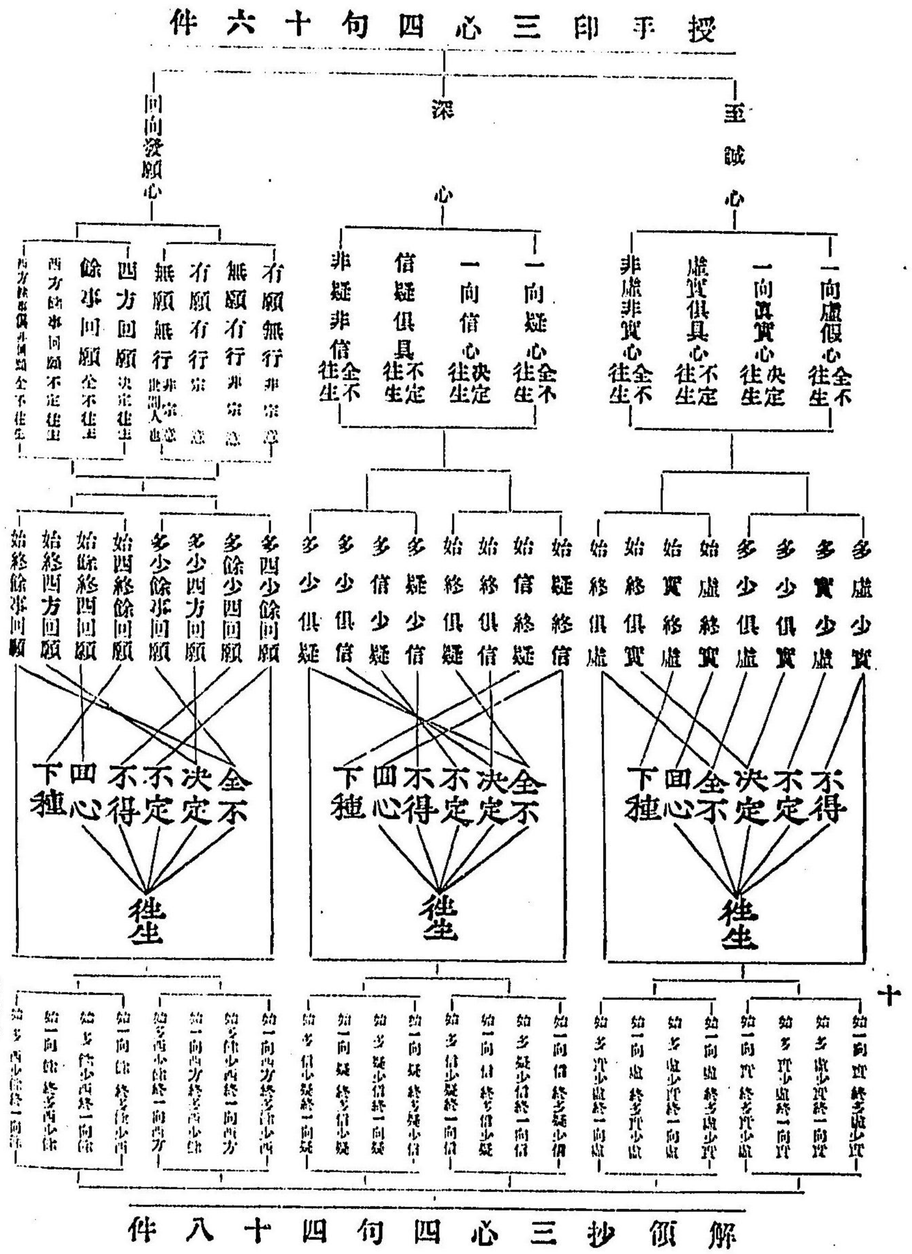
三に五念門
四に四修
五に三種行儀
六に奥圖の傳

これなり此の中五種正行の中選擇に散善義を引くか如し五念門は論註の傳なり五種正行の本説とす論註についてこれを示すへし今は略す四修は選擇集第九章に委説す今は略す三種行儀はもと往生要集に根據し敕修御傳中所所勸贊す尋ぬへし奥圖の傳に至ては大師平日の常語なり頗はしきを以て今は出處を略す此の中第二件三心の傳に至ては獨二祖國師の所傳にあらすんは二祖三代の正統の口傳をしることあたはす今略して其の義を示す左の如し

授手印第二章三心の傳選擇集十六章ありと雖とも獨三心を以て安心の章と定め四修を以て起行と定む餘の十四章は大途信法に屬す古に曰く安心僻越すれは萬行いたつらに屬すと本宗の三心にれける口傳精密慇懃丁寧吾が正流の傳法をえさるものに於ては坐視傍觀すへてしること能はさるものなり凡そ大師一代の相傳三心を説き玉ふこと十にして四五に屬す今ところみに此を引かん○御傳翼贊

十八ノ二同九ノ二十ノ二同八ノ同十ノ廿一ノ三同五ノ同十四ノ廿二ノ三同六ノ同九ノ同十二ノ廿四ノ九四十五ノ三同十五ノ四十六ノ十三又和語燈錄十一ノ三十四ノ十二ノ十一同十三ノ二十三ノ同三十四ノ同四十七ノ十三ノ二十三ノ同四十ノ十四ノ十五三十四ノ同三十九ノ同四十七ノ拾遺和語燈錄中ノ四十六ノ同下ノ十ノ同十八

右大凡三十一箇所一字片言歧をあやまたすあたかも一條の生鐵を伸るか如し其の餘散善義三心要集決疑抄傳通記西宗要東宗要すへて常説の如し就中四句分別の傳に至て散善義外賢內懷の四字に出私釋段餘外畜內已下の文より出和語燈錄卷十一ノ三十八ノ同四十ノ拾遺和語燈錄卷下ノ二十九ノ等分明に四句を出せり授手印の相傳全く此等にもとつくこれに依て鎮西國師十六箇の四句分別を出す記主これを傳へて領解抄の中四十八箇の四句分別を製造す緻密精按餘の傳法中に對するに比類あること となし異流此の三心を解する原素顛倒此の四句分別等に於て一句の關係なきゆゑんなり



右本末合成六十四轉の四句分別あり

三心四句分別の再註決答疑問抄下卷初丁已下三十九丁に至る懇懇鄭重能く其旨を說示し玉へり淨土宗の解行の人尋ねもとめ研究せさるへからさるの文なり三心十六種の四句の文解しやすきを以て世人深く心を注めす深く心を注めさるを以て一向誑惑渡世の人となるもの多からんことを疑ふなりしはらく剃染の人につきて之を論せは其人大凡一毫未斷の凡夫位に屬す平日其衣食住にれける一日もこれなかるへからすそのこれを求むるに於て或は有德の相を現して以て四方の檀越を網羅す佛法もと無所得を希求す之に依て順次往生の直道にれける秦人の楚人の肥瘠をみるか如くするに至る今年是の如く明年亦斯の如く淫苒日月を消すれはこれを一向虛假心と名く若し在家ならは豪富に執著し妻子に愛戀す昔天竺に阿耆達大王と云ふ人あり夫妻甚たむつましく大王死に臨て深く后妃に著す后妃後にある阿羅漢を請し王の追善を修す當坐后妃の鼻の中より一匹の虫を出す后妃はちて殺さんと欲す阿羅漢の曰く殺すことなかれ王の臨終執著を汝の鼻中に止むと云云善巧の敎誨と云へし一向虛假心の句を以て其人全く不得往生なりと註せらるいはゆる轅を北にして越に往く人と云ふへきのみ豈恐れさらん

や次の一向眞實心とは之に醍醐す思ふて知るへし已下の四句の文之に準して解了すへし

○第三日領解抄傳法畧註此中授手印中五種正行及ひ餘門の註釋解しやすし委說に及はす只三心十六種の四句分別を解するにつきて微微細細ついに四十八件の四句分別を作る本末合して六十四轉となる慇懃鄭重往生の得不を定む眞實順次解脫を願ふ行人にれける須臾も容易に看過すへからさる所なり三祖禪師の解學卓拔にして佛祖の古傳法をしること鄭重ここに至る其の道心のあつき其學才のひろき實に比類なきものと云ふへし若三祖禪師我家になかりせは二祖三代の古傳今日に傳ふることあたはさるへし二祖國師の然阿は辨阿かわかくなれるなりとの玉ひしは實に弟子をみること師にしかさるの格言なり領解抄の本文混濫みにくきを以て今初學の爲めに圖示を以てこれを了せしむ此の中虛實始終等の種種の衆機類を出す本宗の行者自ら回顧返照して我れは何れの機に屬するそと云ふことを念知すへし此を第一とす若多虛少實なれは往生をねさるの人とす速に回心して多實の人となるへし本宗は順次解脫の一法を願ふの古傳なり三生果遂もと願ひにあらす況や多生の流轉をやあるか疑て曰く末代の凡夫識猿猴よりは

（頁九十三）

けし前念後念只妄念これれこるいかんそ始終俱實なることをえんやこれをして不得往生の人たらしめは誰をさして往生の人と定めんや四句撿査嚴なるにすきたるに似たりと答へて曰く汝念時日の三等の古傳あるをしらすや上等の人は念念眞實なり中等の人は時時眞實なり下等の人は日日眞實なり以て往生の人となるこれを三相續とも名け又三懺悔ともなつく其未た下等に及はさる人をさして不得往生の機となつく又不定往生の人ともなつく自ら量て不得不定の隊に入ることをねされ領解抄の終り異本若能欲知必須口授不得題之筆點の十四字あるものは後人の增加なり今これを用ひす已上領解抄略註畢ぬ

○第四日決答疑問抄の傳法略註古に曰く九十六種の外道は三世諸佛の遺法を解し誤れるものなりと誠にしかるへきなり附法藏經に第二祖阿難水老鶴の語をきて入滅の緣とすることみねたり佛世をさる未た百年にみたさるすてにこの謬說をなす我宗の如きは大師三位基親卿に答ふる金剛寶戒章の一條御傳廿九ノ二漢語燈錄十七ノ三十越後國光明房に答ふる一條和語燈錄第十四等在世すてに此邪義を出す二祖國師の時に當て授手印の製作に及ふ全く當世邪義誹謗の說多きを以てなり三心要集をよみてしるへし三祖記主禪師の時に及ては大師の在世をさること

（頁九十四）

やや四十六年をへたり妄傳邪解一にしてたらす東宗要傳通記等所所これを出すか如し今三祖の疑問抄の製作あるは又當時の異義重重增加することをかなしみて周東の在阿授手印を取て三祖の決擇を請へるなり三祖の傳語に曰去る正月十七日在阿草庵に尋ねきたり手に手印の疑問をささけきたりて口に口傳の決答をこふ然阿齒ひ六句にせまり目くらく手ふるふ然りといへとも來問の志を感し利生の多からんことを思ふて餘寒の風をしのき頽齡の筆をはしらす先聞の趣きを述て後輩の疑問を答へ畢ぬ云云

後輩の疑問とは序文の中に問答あり五種正行の中十一問答あり助正分別の中二問答あり奥圖の下一問答あり善導御意の下一問答あり三種行儀の下二問答あり奥圖の下一問答あり善導寺上人御房の下一問答あり合して一部二卷大凡六十五問答を以て全篇を製作す

五種正行の中讀誦の下大師は三部經の中小部の彌陀經を讀誦し玉ふ學者思擇すへし三音格別の讀法に至ては大師の諳記にまかせたるなるへし三音の說は韻學家の關係する所なり近くは國學者流にも說あり本居の漢語三音考及ひ今の世これか誤をたたす種類とも多し今は傳法にあつからされはすへてこれを略す學匠

は平日に在て研究すへし

禮拜は恭敬修の最上なり三千佛名禮經これを證とす此の中宇治の里の下品の禮めつらし

讀嘆門の中稱名をかぬる文は多含に屬す義は善導の意を迎へて解すへし

觀察門の中論主は觀察を以て五念門の中の正行とし善導大師は五種正行の中稱名正行を以て正中の正とすこれを相傳の違ひとすしるへし其餘數十番の問答は講說の日にあらされは委細することあたはす今すへてこれを略す疑問抄の傳法大凡如斯

○第五日論註口授心傳の傳語

昔佛滅後第九百年に當て世親菩薩降誕す附法藏第二十の祖師なり世に千部の論主と號す幸にして我か無量壽經の註文を傳ふ（藏中天親傳あり附法藏經は文甚た省略す古人同名異體とするものは誤れり記主の註記天親傳について註せらるる四域記又しかなり）鎮西宗要四卷（二十七ノ）天竺念佛祖師の條に曰く我法天竺大菩薩弘給祖師言爲天親菩薩往生論造うれしきそとありし也法然房は阿彌陀經を三部經に入給たると天親龍樹の祖師たるを御喜給天竺の英才に御故也誠按近年の學者附法藏のことを評するものまれなりさすかに七百年前の古學者を以て龍樹天親をうれしきこ

とに評し玉ふいと殊勝の御ことなり誠又れもへらく菩薩の往生論に鸞鸞の註釋を加へ玉へるかたのれは世にうれしきことに覺ふるなり道綽禪師は鸞公の碑をみて發心せし人なり智德われにまさること千里といひき昔大集經を註せられしかとも今は逸して存せす今にして鸞公の師を以てひとり往生論の註に存す實に製作卓犖後人の及はさる所なり

今論註一途十念の傳を傳へんと欲す註文もと令聲不絕具足十念の文を釋す此中十念に二種あり一に總相二に別相なり一に總相とは三十二相を想像するなり二に別相とはこれは一相一相別別に觀するなり其總別に隨て各各十念を成す文に若總相若別相隨所觀緣心無他想十念相續名爲十念と云へる傳語これなり註家大師十念の傳此文にてつくせりとす別に祕する所あることなし記主禪師一隅三端の神智此の文をよみて早くすでに十念の趣きを了し記の末に愚老粗推知すといへるこころこにあり秘法を傳へ密傳をうるといふにはあらさるなり此の註文しはらく觀緣に約す其の總別の觀緣なきものも又十念を具足するにたれりとす或は具足せさるもいたりとす文に不必須知頭數也といへるこれなり古來不得題之筆點の文を以て祕密の說とす今これをとらすこれ學匠分上に在て常に研究す

（四九十八）

（四九十九）

十念（面上）を傳へ次に總相の十念（全身）を傳ふ觀念法門の中には順逆の觀ありみあはすへし安樂集及ひ略論には著脫の十念あり其餘十念の說多し今盡すことあたはすこれを論註一途十念の傳と名く問公頌義の終り云云の說は別に議する所あり今は此を略す（成奥僧正十念辨一卷あり今は無用の辨に屬する者多かるへし）

○第六日化他門三條の傳

第一說法開導の條此は沙門化他の第一義に居す此こと法苑珠林三十二說聽篇及ひ法施議の中に就て辨すへし且不淨說法を誡しむる亦文の如し云云

第二檀越葬祭の條今の僧家に在ては葬祭の役を免れす此中誡しむへきことあり勸むへきことあり誡むへきは此法を貴賣として一活計にあつる無慚愧心なり深くれそるへし云云（律文父母師長の外葬法に關せさること行事抄送終篇にいつ）但し梵網經の一切男女我父母の說に準せは幸に葬祭の因緣を以て一解脫の門戸を啓らく進て從事することを厭ふことなかれ此中もと松明圓相亡者往來或は墓燒或は分產などの目を出す大凡俗情妄傳なり其中松明は大愛道送終の緣に出つ珠林一百十六中云云說を引くか如し圓相の傳は後人の說なり本據なし下炬の偈文各其信敬する文に付て唱ふへし或は一紙の告文を作てよむもえたり必す暗誦に局らす奠茶奠湯等の儀は後世の一外儀の

み識するに足らす亡者をして解脱せしめんと欲する一慈心を要とす予常に言ふ檀越の死者を引導する平日に在て其生者を引導せんには如かす生者の引導は前段の説法門にあり本師一代の教門は悉く生者の引導なり觀經の頻婆沙羅及韋提にたける鹿苑の五比丘にたけるみなしかり深くれもふへし

第三破邪顯正の條此は當世に在ては僧者の急務なり古に曰く能破に達せんと欲せは所破に達すへしと先つ須からく彼れの所説を知り以て此を破摧すへし近來往往破邪の書出つよくしる人について學ふへし予曾て破邪三説を述す今草稿を失す他日閑をゐて諸外道論を製せんとす腹稿既になる筆を弄するに暇あらさるを以て其志を達せす

右三條は僧家眼前の急務なり園碁茶花詩歌に耽て逸居することなかれ急急如律令

○第七日傳法要偈の式此式は殊勝の作法なれは舊式に由るへし二尊遣迎の説靈山會の説共に用ふへし列祖の軸物を列する亦ゐたり此中四句金光を放て虛空に星列するの一説は之を廢すへし日課の作法を以て結願の式とし念佛回向畢て遣迎二尊拜禮退散

行誡窃に按す各國本宗の有志僧衆各年一回つつも自他宗をえらはす有名の律師あらはついて菩薩戒をうくへし愚老昔無量山の大衆三十餘員を勸誘して上野淨名院の懇澄和上につきて授戒せしむ其餘道俗を勸誘すること凡四五百人此のついてを以て剃度の式あるひは五戒八齋戒を願ふものれはかりき本宗前來の授戒課役を贖ふ樣にれこなひて生涯戒法眞實の受持あることをしらさるもの多しついに一宗無戒の喚風眞宗に似たることあるに至るなけくへきことなり恐るへきことなり謹て餘言を附してれとろかしれくものなり

結緣五重開導略筌

結緣五重は全國一般なる式なれは廢すへからす更に思ふに前來塗香已下五六箇條を以て傳語となし來りしに遽かに異目不次第等に至らは父子夫妻の再傳なともわらんなれはあまりたんと替らさる傳語穩かなるへし但し五通五箇は省くへし況や第七目已下は在家に要なし得名も宜しからす云云化他の加行も し五日とせは一日毎に一條つゝを演說して外の說敎を須ひさるを得たりとす近來禮拜を省く流義あり僧家のれこたりなり能化も五百禮を行すへし老嫗なとの怯弱なるは坐拜を敎ふへし隨分別行らしく勸めさすへし佛前の莊嚴壯麗なるへし供養物ををしむことなかれ能化自ら深切なれは所化れのつから信心をすすむ心うへきことなり傳目は舊式を用ふ

此の中五條あり一に塗香二に座具三に順次往生門四に授手印五に十念傳

第一塗香の傳とは此の名もと香花燈明及ひ衣服飲食臥具湯藥等の供養中より出る即ち選擇第九章四修行法の中恭敬修より出る所なり此の中塗香あり燒香あり

觸香あり今の塗香は身にぬるなり云云例の如し

燒香とは香木をたくなり南天竺末利山赤栴檀多しとゝく香を以て佛を請すること

と大小の經律にみえたりゆゑに香を佛の使と云ふ委しくは法苑珠林卷四十九華香篇に出たり今は略す觸香とは今象香を備ふ下部に薰するなり云云此の下供花獻燈常例の如し粗略すへからす此餘衣服飲食臥具湯藥此れまた行者の常業供養の具とす西域記を按するに昔阿育王と稱する國王あり一閻浮提の主鐵輪王を成すかつて三寶の爲めに一閻浮提を供養すといへり和漢の國王山林宅地を以て三寶に供すこれにならへるなり本傳先哲厭離穢土の托事とすきこゝたることなり懇ろに解說すへし已上塗香の傳畢る

第二座具の傳とはこれ六物の一具律の制する所なり體色量の三相元照大師の六物圖の如し外國は石瓦をしく或は草座あり三衣けかれやすしこれを護せんか爲めにこれをしくなり近くは十八物圖一卷あり委細これを辨すこれは常途の座具につきて此を辨するなり今此の傳とするものは隨義轉用して念佛の衆生往生極樂の當座道場を表するか爲め一蓮託生の大道場を表示するなり一蓮とは阿彌陀經には大如車輪と說く其の莊嚴を說けるなり大經には五百由旬と說くこれは一蓮華藏界を略說するなりあるときはこの一蓮華上に阿彌陀佛觀音勢至文殊普賢地藏彌勒等の曼陀羅中臺の三十七尊降臨して百千の諸三昧を說かせ玉ふことあ

り多少の無生忍を證得す或は大乘宿習の妙因妙果をかたり未來證得不退の妙法門に悟入せんことを討論し或は過去已來生生世世の父母を來會し或は六親九族を集會し相互に速に解脫門に一蓮託生することを歡喜讃嘆す一蓮託生の傳豈尊きことにあらずや豈よろこばしきことにあらずやこのこと委細をしらんと欲せは父子相迎の下卷常樂我淨の文を說く其の辨深妙實に聖語の靈感とするに堪へたり前條に次て欣求淨土の托事に用ふへし傳語に曰く各留半座乘華臺待我閻浮同行人云云已上座具の傳畢る

第三順次往生門とはそれ人五十年百年の壽たもつを生と云ふ一息かへらす識神捨離するを死と云ふ此の死を說く論藏の中三種あり一に順次業となつけ二に順生業となつけ三に順後業となつく順次業とは今の生の次の死をさすなり順生業とは其の次の次の生をさすなり順後業とは又其の次已下多數の死をさすなり此の中三世諸佛一法に二種あり一に娑婆界に於て入聖得果するものを此土入聖と名け二に淨土に於て得道するものを淨土成佛の人と名く聲聞緣覺菩薩の三乘法を修行し劫數をふるを願ふものあらん機類あるか爲めなり又早作佛を好む菩薩ありこれか爲めに順次往生門を開くこれ又一種の異方便に屬す末代の凡夫穢方

流轉を出て速に解脫門に入此の淨土門を除て異方便あることなし我か大師一切經披覽五遍善導の疏釋八遍生年四十三初めて一心專念の文につきて廓然として善導の元意を證得し玉へり尙天台大師の一夕藥王品の是心精進の文に至て廓然として旋陀羅尼の法を證すると事甚た相似たりとこに於てはしめて聖道の諸行を捨以て順次往生の直路本願名號の一法を單修し玉ふいはゆる六萬七萬の念佛これなり大師の皇國に於て淨土の一宗を開くこころこにありこれ安樂集の文を待て初めて善導の元意を證得し玉ふにはあらさるなりこれより後二十四年をへて月輪殿下の請に應して選擇集を製し十六章となす第一章捨聖歸淨の文證なくんはあるへからさるゆゑんなりこれにいて本宗の信行すへて聖道門難解難入に似たるものなく易行易修を專とす其の安心は只三心を出し其の起行は專念名號の一法にあり人の上機と下機とをゐらはす機の善と惡とを論せす其の志順次往生を期し其の淨業多念口稱の人を待つのみ選擇題下三重念佛の口傳一枚起請正宗分の一語以てこれを證するにたれり異流の人多く天台の學道を習ふて云云するものは鼻祖の正傳をうることあたはさるを以てなり此の中三生果遂の願あれ共本宗の行者もとより願ふところにあらす故に順次往生を願ひ臨終の當念

來迎を待て以て安心落著の行者と名くこれを三代相承の正器と定むるなり敕傳二十一卷等の法語を諳誦して常に順次往生の道にれいて一歩も退轉せざることを要すへし此の下一枚起請を述してれか傳語となすへし第三順次往生門の傳をはる

第四授手印とは古き御經の中に齒印と云ふことあり日本三種の神器の中に璽の御たまのことあり支那には秦已後に玉璽の名ありいつれも古きことなれは其のことを詳かにすることあたはすいつれも物の證據のしるしに用ひられたるなるへし日本古き所にては手の形をれしたり高野山なそは嵯峨天皇の手形なりといへるあり後には天皇御璽の御印を用ひられたり元祖大師一枚起請御染筆の日は建暦二年正月廿三日にして御臨末一日半と一夕なり御筆の運動をみるにかたかな平かな相まじりて字體も甚た走卒なる御染筆なり勢觀房にあらされは願ふことあたはさるの御遺書なり兩手印を加へさせ玉ふは遠く末代の證文たらんことをれはしめされてなるへし二祖國師の授手印及ひ代代の授手印もここにもとつけるなり嘗て按す授手印は手形をつくるを以てなつくといへとも其證をなすの實に至ては手形をつくらさるも又ゐたりいはゆる本願の文自行にあらす是一六方證

誠自行にあらず是二釋迦の勸贊自行にあらす是三善導の釋文自行にあらす是四選擇一部自行にあらす是五一枚起請に至て初めて手印を作る自行の有無にかかわらすことことく順次往生の證文にして一點疑心をいるへきものなしゆゑに一枚起請に曰く唯往生極樂の爲めの南無阿彌陀佛と申て疑なく往生するそと申外に別の子細候はす又深信中信法の釋文以て本文の傳語となすへし已上授手印の傳畢

第五論註口授心傳の傳とは曇鸞大師は魏の人也流支三藏にあひたてまつりて觀無量壽經を傳ふ而しよりこのかた往生論を註釋す上卷の終に令聲不絶具足十念唱南無阿彌陀佛の文に至て總相別相及ひ單言口稱の三種を出す記主憲老相推すの四字を以てこれを註す此中今結緣五重の人に面上別相の十念を授く本宗此の傳の流布する記主禪師已後なるへし長短所を得授受時間をつひやさず老少男女授受を以て常例とす一剎那の佛事多種の類をきかす願くは後年に至るまて師檀相遇ふことに此の規則を廢せさらんことを希ふなり　已上畢て午後傳法要偈の席を設く此れを以て回向とす

右傳法畧註大凡如斯愚老去年中秋より痔疾病及頑癬を病む痛痒ひまなし此頃漸く褥床平臥僅の如しと雖ともいささか病間ありここにれいて二祖三代の古傳法

を纂集し聊か祖恩の萬一に報せんとす唯古傳の泯滅せさることを庶幾するのみ
時に明治廿一年四月上旬病床に在てこれを述す

二十六

浄土宗管長華頂山立譽行誠謹述

附記

血脈のことは學匠の必要にあらす用否師家の意にあり蓋し舊習俄にやむるを得さるものとし用ひんときは必す宗制に定むる所に依るへし漫りにすへからす但し兩脈の中傳戒の譜は從前の如し傳宗の譜は外題宗脈と書すへし内題初重は選擇血脈次第と更正すへし在家結緣のときは五通を授くへし

經書は古傳なり廢すへからす布薩は妄傳なりこれを廢すへし

上人自畫賛(一)

鬼の寒念佛はわれとも狼の衣はめつらし、此をしも、やかて菩提即煩惱とや申すべき、狼と名つけ鬼と指す何者をたくらふるならん、君はしらすや此二物吾黨の中に多くあり。

右俳家の詩を以て賛とす

行誠

日本淨土宗緣起（英譯草案）

西暦六十五年天竺の佛教始めて支那國に入る、則ち後漢の明帝永平八年乙丑の歳なり、此より後一百九十餘年を歴て、曹魏嘉平四年壬申の歳、天竺の三藏康僧鎧來て大無量壽經二卷を譯す、此經中に說けるは、阿彌陀如來の遠劫の昔時發心修行の始より、方今西方極樂世界に現在して、普く十方衆生を引接して、轉迷開悟の利益を施し玉ふ緣由を說けるなり（是一）、其後八十餘年を經て、姚秦の弘治年間、龜滋國の羅什三藏來て阿彌陀經一卷を譯す、此の經に阿彌陀佛の名號を執持して、若は一日乃至七日する者は其人臨終の時佛と菩薩と俱に來て、行者を迎へて西方淨土へ往生せしむ、此事十方諸佛も同じく証誠し玉ふ由を說けり（是二）、此の後二十年計りを過ぎて、劉宋の少帝元嘉年中、天竺より畺良耶舍三藏來て觀無量壽經一卷を譯す、此經に說くは摩訶陁國の頻婆沙羅王の皇后韋提希其太子阿闍世の惡逆を見て、始めて娑婆世界の厭離すべきことを悟る、釋迦佛之が爲めに西方極樂淨土に往生すべきの旨を示さる、且つ其往生すべき行因を示すに三福の行法を敎ふ、何をか三福と云ふ、一に世福と名く、即ち世間常例の善行なり、曰く孝悌忠信等の視て稱すべく、聞て讚

すべき善良の行業なり、二に戒福と名く、戒とは防非止惡の義にて、一切の勸善懲惡の規則に違背せざるの行業是なり、此戒善に出家在家各多少あり、今は略す、三に行福とは佛教中に說くところの四諦六度の行法、又下に出す讀誦大乘勸進行者、及十三定善等の一切の善行淨業皆此中に有て行ふべき行法なり、亦經の終に命聲不絕具足十念稱南无阿彌陀佛と說て、此の一行特に最勝上乘の修因資糧の法則とす(是三)、夫佛教は佛の正智正悟より正因正果を說示せる者なり、喩へば蕃椒の種子より は辛き花實を生じ、砂糖の種子より は甘き枝條を生するが如く、惡因より惡果を感じ、善因より善果を感ずるは理數の自ら然らしむるなり、人誰か之を疑はん、經文に三福の正因より九品淨土の正果を感ずることを說く、果して必ず然る者なることを悟るべし、上來の三部の經本もて証定規則として、昔時天竺に在りては佛滅後六百年にして世親大士出て、此淨土の法門を說示し、支那に在りては晉の慧遠、魏の曇鸞、唐の道綽、善導專ら此淨土の法を弘通す、此中善導特に觀無量壽經に於て、一生の力を盡くし、新に疏四卷を造り、深く佛意を探り、洞かに經旨を暢ぶ、文義抑揚實に古の淨影、天台、嘉祥の右に出づ、自ら楷定古今と稱せらるゝも決して誣慢に非るなり、法照禪師五臺山に文殊を拜して五會讃を造り、少康法師洛京白馬寺殿に昇て再び遺典の放光を見るが如き、總べて和尙の餘光遠く兒孫を照す者と云ふべし、和尙の在世の昔し勸導の盛なる、長安の肆肉賣れざるに至ると云ふ、支那後代淨土念佛を弘通するもの凡て和尙を以て宗師とする所以なり、

(二十三)

(二十四)

此より後、西曆一千一百三十三年にして、吾日本國崇德天皇長承二年癸丑の年、美作國漆氏の家に一男兒を產す、勢至丸と號す、九歲にして父の遺敎に就て發心し、十四にして比叡山に登り、十五にして剃髮受戒し、十八にして黑谷に隱居し、一代藏經五千卷、之を讀むと凡そ五回なり、是意偏に末代の凡愚、六根收め難く三學全からざる者たりとも、猶ほ出離解脫の道ありや否と云ふことを、此を尋求搜鑿するが爲めなり、此次序を以て善導の觀經の疏を講讀すること凡そ八遍なり、其第八遍に及ぶの日、散善義の一心專念彌陀名號等の一段の文を讀むに當て、始めて善導和尙の元意は、時の古今を論せず、機の上下を撰はず、唯念佛の一行因を以て、後生極樂往生の正果を成すべきに在りと云ふことを豁然として洞達悟入せられき、此に於て源空年來自行と定めて修し來れる顯密の諸の行法を斷然と廢止し、此に代るに一向專稱の稱名念佛六万遍を以て日課の行法とは定められき、時に源空の齒四十三、則ち高倉天皇承安五年乙未の年にして、西曆一千一百七十五年に當れり、吾日本始めて淨

土宗の宗名ある此年に起れり、其事勅修傳及び選擇集に出たり、以上は日本國淨土宗建立の緣起なり、以下は此宗の弘通するところの法門の旨趣、及飯嚮敬信すべき所由を述べし、唐の道綽安樂集兩卷を製す、其語に曰く、釋迦佛一代の說法大に分て二種とす、一に小乘、二に大乘なり、大乘の中に又二門を分つて、一に聖道門、二に淨土門也、其小乘の一種は佛在世の諸大弟子、及滅後五百年に涉て、總して現在世に於て戒定惠の三學を修し、四果の聖果を證得せしむるの敎法なり、其大乘の一種も亦現在世に於て三學を修行し法身般若解脫の三德を證悟せしむるの敎法なり、此等の人々は凡り宿善深厚の德ありて、生れて大機勝根を得て尋常一樣の凡類には非るなり、所謂內心の堅固なる磐石の摧くこと能はざる如く、外障を恐れざること猛士の敵を挫するが如し、此等の敎法を聖道門と名け、又は此土入聖の機類と名く、佛滅一千五百年內外の時に在て、是の如き機類在て、斯の如きの敎法を修する者數々出世して、佛敎の世に盛なる景況を示す、代々の高僧傳を讀で之を知るべし、近來時末代に屬し、人浮薄を好む、貪瞋日々に增上し、圓諍年々に勃興す、夫れ三學は解脫の正因にして、解脫は三學の正結果なり、苟くも舊曆を以て三學を視る者果して解脫何れの日ぞや、源空深く此に考ふるところありて遽に聖道門を閉て淨土の一門を開く、夫れ聖道門は三學を正因として一生の得道を期す、淨土門は口稱念佛の一行を正因として順次往生の大果を期す、且つ夫れ聖道の因果は是を成辨すること一生にして甚だ成就し難き法門なり、淨土の因果は因果ともに尤も順次の一生にして成し易き法門なり、曇鸞の水陸の譬說以て知るべきなり、聖淨二門共に是大乘一味の法水に浴して轉迷開悟の彼岸に赴く、其飯趣是一なれども、其時を殊にし其人を異にするに至ては、其摸を同ふし其揆を同ふすることを得ず、猶ほ陸には車を用ひ水には舟を須るが如し、釋迦佛一代の敎法凡八万四千種と說く、所謂一機の爲めには淨土の開悟を示す如き是なり、古哲の曰く子を代て敎ふと云へる其理尤も相似たり、源空の淨土門を開けるは所謂地を代て解脫を敎るの謂なるのみ、是源空の獨り此を示すに非ず、固より唐の善導の楷定古今の疏文に示すところなり、是善導獨り此を示すに非ず、大師釋迦牟尼の經旨に出るなり、善導和尙觀經の疏を造れりし日、私かに靈驗を乞に當て、每夜夢中に一僧來りて玄義の科文を指示せしと云へり、故に和尙所造の書は佛說に同す、一句も一字も加減すべからずと自ら之を誡められたり、源空選擇集全卷に在て三經と此疏文とを以て本文とせられたるは是故なり、源空在世盛德あり、高倉帝、後白河、後鳥羽帝の三帝

の戒師となる、源空の歿後、勅して遺傳を製す、則ち又三の宸翰を染めらる、伏見帝、後伏見帝、後二條帝是なり、勅修傳と稱す四十八卷あり、夫れ人若し淨土の法門を知らんと欲せは先づ佛說に於て敬信歸仰の志を發すべし、釋迦佛は三世を徹見せる聖者なり、三世とは過去世(猶昨日)現在世(猶今日)未來世(猶明日)なり、古來印度の諸外道の中未來を說く者あれども未だ明らかならず、又決して過去を說くことなし、現今の人は現在一世を說けども過去未來を知らず、唯佛一人能く三世を了達して毫釐も差はざるなり、今說く淨土とは西方阿彌陀佛所居の世界を云ふ、最淸淨無漏を以て土躰とする故に淨土と云ふ、願ふ者は往き願はざる者は往かず、此娑婆世界は一切衆生の共業感になれる者なれば、願はざる者も自ら生れ來るなり、此世界の土を苦道と號す、四苦八苦を以て莊嚴する國なればなり、此國は厭離して執着すべからすとす、此を厭ひ彼を欣ふ者にして當來の世西方の淨土に生るゝことを得るなり、此佛說を毫末も疑はざるを深心と名く、疑心の者は往生することを得ずと云へり、龍樹大士の曰く、佛法の大海には信を以て能入すと此謂なり、源空開宗以前、空也、永觀、慈心など云へる高僧あり、各念佛を行じ往生の道を弘通せしかども一時の勸進にして沒後之をつぐ者なし、源空の弟子數百員あり、鎭西の聖光、西山の善慧なと其

頭角なり、方今に至て各派寺院僧徒万を以て數ふるに至る盛なりと云ふべし、日本淨土宗の緣起大凡斯の如し

明治十九年八月廿六日

三緣老隱行誠八十一欽て誌す

貫練群籍問答

明治十一戊寅七月廿五日緣山論議開式

論頭　中敎正　傳通院行誠

問、貫練群籍者其義云何　答、說太子七歲、始學四章五明十八論等　○問、恭惟、太子悉多、三祇劫滿、位居一切智、況如梵網經說、娑婆往來八千度云、今而始學四章五明外道諸大論、夫何謂乎、　答、對機說法、應身益物、通規、是以非生現生、非滅顯滅、所以久遠成道之古佛、降誕伽毘衞國也、既有出胎之相、寧无始學之相、皆是无非益物、方便、故曰隨順群生示有塵垢、又曰示現算計文藝射御等、大乘學人以示現二字、須爲字眼、不足爲疑、　○問、梵土群籍、畧可得知其名數乎　答、滅後殆三千、未能詳之、而就經論所傳、且言之則四章陀也、五明也、十八大論也、是等可以梵土古學科也　○問、乞辨白四章五明十八論細目、

答、韋陀又、韋提、又、吠陀、又、毘陀、又皮陀、又薜陀、又鞞(此曰分、亦曰知、又曰明)

四城記十二
四韋陀
- 一(奇)又曰昏又曰力(養生)
- 二(祠)梵曰夜殊(享祭祈禱)
- 三(平)又曰等梵曰婆(禮儀占卜兵法軍陣)
- 四(祅)梵曰阿逸婆拏(咒術)

瑜伽論十三
五明
- 一內明 佛法
- 二因明 論議法
- 三聲明 聲字法
- 四醫明 療養法
- 五工巧明 農工商等法

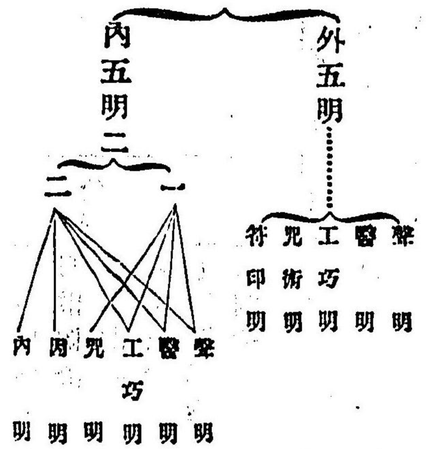
百論疏上下七十八大論
四韋陀論
- 一式叉論 如前
- 二毘伽羅論 (釋六十四能法)
- 三柯梨波論 (釋諸音聲)
- 四竪底沙論 (釋天仙上古已來名字)
- 五闍陀論 (釋天文地理筭數法)
- 六尼鹿論 (釋作偈法)
- 一屑亡論 (釋立名因緣)
- 二那邪毘薩多論 (明諸道理)
- 三伊底呵婆論 (明傳記宿世事)
- 四僧伽論 (解廿五諦)
- 五課伽論 (明攝心法)
- 六陀苑論 (釋兵杖法)
- 七揵闍婆論 (釋音樂法)
- 八阿輸 (釋醫法)

八論

問、四韋五明十八大論之名粗聞之、此餘群藉之目有之乎、 答、廉蹬伽經(奘笠律炎與支謙譯)曰、初梵天造一韋陀、次白淨變一爲四韋陀(今所傳四韋陀是也)各有三十二萬偈(凡一萬言一千)合爲一千七百卷、次有弗沙者、有二十五人弟子、分各別四韋陀、作廿五韋陀、次有鸚鵡者、變一韋陀爲十八韋陀、乃至造一千二百六種韋陀云云 ○問、群藉之稱爲五明群藉、將別局聲明一科乎、 答、經文多含不可一概、今誠按之、總通五明群藉、別指聲明一科、亦非无義、所以者何、按本行經、因果經、普曜經等之說、太子七歲(或八歲異說)就毘沙婆蜜多羅(此曰遍友)始學文字時、太子示六十四種文字云云 廣說、凡五時六藝必須有前後、則有七歲十歲射御之文等是也、今就初則在聲明文字記論中而可論之與 ○問、群藉之語別在聲明部中解之、願梵土聲明之盛聞其本末、 答、慈恩寺三藏傳三十九曰、成劫之始梵天造百万頌、住劫之始帝釋略爲十万頌、尋伽單設羅仙又略一万二千頌、次北印土健陀羅國有波膩尼、又略爲八千頌、

又造字躰根裁聲名論（三百頌）聞擇迦論（一千五百頌）八界論（八百頌）已上、數論名古聲名論、又滅後一千一百年、南天竺閣羅國王之皇子護法菩薩造雜寶聲明論（三万五千頌、凡六十九万六千言）瑜伽論記五上（五十一）曰、贊之曰、此論西方以爲聲明究竟、極論、盛行于世、唐三藏聲明所學、所關係者歟、南海寄歸傳西方學法一章、安然和尚悉曇藏等可併見也、夫如梵音、緻密精巧、於万國所不及者、所謂支那四聲七例三十六母之法、及皇國五十字音連聲等之則、全從涅槃經文字品、大日經字輪品、及聲明毘伽論說中來者、可知也、蓋學聲明悉曇法者、不可容易也

已上　○問、五明有内外云、願聞其說、　答、止觀補註十四丁



五明有内外之名、始見補註、此說據何未詳之、學者可檢、瑜珈論第十三以下說内明、頗精細廣博、其中外道有内明之名、及内明有異說、云云事未見說之、畧纂、倫記亦未示之、誠嘆、

按、五明之名其原出瑜珈、世間學者非取之爲梵土通學、待善知者質之　○問、貫練群籍一句、得契當文字般若否、　答、文字即般若、說色即是空、般若即文字、說空即是色、維摩經說文字性離、然則十八大論亦不思議說解之法門也、是故第五難勝地菩薩爲所學處、亦爲童子地示現所、亦是行外道、通達佛道之謂也云々　○欽惟、古佛示現八相、貫練群籍、示現中之示現也、古佛說法悉是法界等流、眞詮也、勿以外道法視之、古曰、九十六種所說皆竊古佛遺教也、自執爲四韋陀、蓋見之不視聞之不聽也（當則說話云）

溪聲即是廣長舌　　山色豈非清淨身（東坡句出文集）

吉野河のもとすゑ

丁酉のとし(天保八年)秋の末、よしのにまうでたる歸り路、此川のほとりなるわやしの家にやどり侍りき、さてつり棹などとりちらしつるから、漁父の宅なめりとおもはる、夜ふけて、しはかれたる聲して祝詞まうす眞鈴の音までもふりさえていと殊勝なるに、しはしありて鑿打なして念佛するは、まなり両部など云へる人にやとれもふ折、唐かみ引あけて、法師はまだ寢玉はずや、秋の長夜は老てはねがてなるを、しはしものかたらはんといふ、旅のつれといとゞうれしうて、翁は幾つかに成り玉へるといへば、我は九十はかりにもや成りつらん、としもみなわすれ、かたりわすれぬものは、神の御めくみ、佛けの御慈悲なるはとゝいふに、神も本地のほとけの慈悲まねひ給ふからと申ければ、法師はまた佛くさうれはすゞ、佛には神の垂跡なるを、いつかに心れとろかれて、今宵の布施に、其ゆゑよしきかせ、玉へと申ければ、翁すこしくゑみて、法師はまたわかうれはすなるを、後の學にもまかせ玉へかし、佛の經せきの中に四句分別となんいへる事は、初まなびのよき枝折なれは、夫につくりて、本跡のさま〳〵なる事申さんをとて、いへるはしめに

神々本跡　こは、神と神との上に、本跡をたてしなり、

本而非跡　天地のはじめ、獨化の神は、餘を生じ給はさるなり、

跡而非本　金山彦の神、埴安の神なとは、後にこれより生する神なりきなり、

或本或跡　大日孁貴尊は、二神の跡として、又餘神の本となり玉へるが如し、

非本非跡　虛空の如し、

神物本跡　こは、神と一切の萬物とにつきて、本跡をいへるなり、

神本物跡　二神、淡路州をはしめ、山川萬物をうめるが如し、

物本神跡　枝桃なとの三神となり、冠衣なとの十神と化し玉へるか如し、

神物交互　神代卷、神物こも〳〵本末と成り玉へる事、數々あり、

俱非本跡　虛空の如し、

神人本跡　ふさあへずの尊、神武の人皇をうみ玉へるが如し、

神本人跡　人木神跡　鹽神帝は八幡の神靈を現し、管公天神の威靈をあらはす如し、

人木神跡　上代には、天人性來碍りなければ、互に本跡となる、めつらしからす、

神人交互　末代には、上下傷絶して、本跡の道たえたれば、神人永くへだ〳〵りぬ、其右さまにみはたるは、おほくは僞の物まじれり、

神人俱非

神佛本跡

神本佛跡　一神一切の佛の本地たるが如し、
佛本神跡　一佛一切の神の本地たるが如し
俱本俱跡　たがひに本跡たるが如し、
非本非跡　互に本跡の名を沒す、惟一神道のごとし、

佛々本跡

本而非跡　蓮上の盧舍那の如し、報身をさす、
跡而非本　葉上葉中の千百億のさうの如し、應身をさす、
本跡俱是　報應利益ひとし、
本跡俱非　法身無相をさす、

佛菩薩本跡

佛本菩薩跡　觀音の本地、正法明如來といへるが如し、
菩薩本佛跡　觀音佛身を示現するが如し、
本跡俱是　俱体俱用本來ともにし、利益ひとし、
本跡俱非　法身俱无相なり、本跡の名を沒す、

迷悟本跡

悟本迷跡　法性本淨の如し、
迷本悟跡　不覺より、始覺を生ずるが如し、
迷悟俱是　當體即是の如し、
迷悟俱非　畢竟皆空の如し、

三世本迹

本而非跡　過去の如し、
跡而非本　現在未來の如し、
或本或跡　三世互に本跡となるが如し、
非本非跡　虛空の如し、

治亂本迹

治本亂跡　治にして亂をわすれさるが如し、
亂本治跡　亂極つて治生ずるが如し、
或治或亂　古今興廢存亡を見るが如し、
非亂非治　大古神聖の代には、治亂の名をしらざるが如し、

水波本跡

水本波跡　靜なる時は、水の本相に住す、
波本水跡　動く時は、水すべて波の相となる、
互爲本跡　動靜一味にして、乾濕これなし、
俱非本跡　餘物虛空等の如し、

已上十種の本跡、れよそかくのとし、この餘、日月の推遷ある、晝夜の交替ある、陰陽の

昇降ある、暑寒の來往ある、吉凶禍福の來去倚伏ある、山川草木の向背本末ある、すべて本跡の理に乖くことなし、されば國をれさむる者は、政治の寛猛に達して、利害損益の本跡をしるべし、家をとゝのへ身を修むる者も、公私の際に在て、出處行藏の本跡を察すべし、そも〳〵本跡はみづからみる處をもとゝして、見渡されたる處を迹とす、されば こゝにあつては、かしこを迹とし、こゝをもとゝす、かしこにあつては、かしこを本とし、こゝを迹とす、本跡の名は佛家に出たれは、法師は佛を本地とし、神を垂跡と申さんに論なしされと佛は尊とし神はいやしと、れもへるは本跡の理にうむけり、晉の僧肇の語に、本跡は異なりと雖とも不思議は一なりといへり、之は本跡は、水波のへたてなきの道理をしめしたる也、神道にしていはゝ、神は本地にして、一切のほとけは、神の垂跡よと申さんに、何條とかゝあらん、强て本跡の名をいみ、たばかるはせまきまなびなり、其名こそ神書に見へねとも、神代のむかしはやく、本跡のけしきは、數多みへたり、もろこしにも韓退之といひし人の佛骨表といへる文は佛を廢してけるかたきに、此み國にも物部氏のむかし佛は蕃神なり、拜すべからずなといへりしは、人臣にありてはさもあるべき論なれども、み國なとてはもと質朴の風をもて國法となせるを、さま〳〵のあけつらひは、むかしふりには、たかひたるなり、

廣島問答

庚午閏十月七日、明宣教使到藝州廣島、出問目十二條、以問諸各宗、且令曰、若不能答之、則當以復飾寺以屬古迹、雖未詳實否乎、然亦是僧家所關係也、乃忘固陋、物舞管城、大方君子爲幷正之、

（仁法の語解し難し、且く似たるに就て解を作る）

仁法仁教

二法とは佛法王法か、儒教佛法か、使の銘する所なれば古來佛法王法なと雙へいふことはいかゝと云へる難なるべし、二教を雙稱することは古史の宣旨にも數々見ることにて、佛家これを衒ひ稱するには非るなり、王法とは國初より數千万年神孫統御し上は神祇に齋戒し敬事し、下は治を施州郡、衆庶を撫恤す、正直質朴齋政一致殆と上古の風あり、是れ古の王法なり、應神帝の朝、漢籍渡來、堯舜文武の道始めて我れに入る、孝悌忠信仁義禮智もて、修身齋家治世安民の法稍則とるに足ることを知り、學發を修め文武を講す、今に式を定むるが如し、其教殊りと雖、亦以て我國法となる、欽明帝の朝、百濟佛教を渡す、是但佛弟子七衆のみこれを禀受して、敢て世間白俗の關かり知るものに非す、然して善惡因果の理は三世に泛りて差ふことなく、迷悟斷証の道は十界を罄して遺すことなし、佛天擁護し神鬼感動す、史傳の載する所皆實効を紀す、苟も虛飾あることなし、合德の厚き此を潛するの久しきことわたはす、

餘光遂に國家に輝く、國家喜び用て以て王法を潤色す、士庶之を用て修齊の德に充つ、今にして一千數百年黄口の雛兒も南無佛と唱ふることを知る、蓋し其所敎殊なりと雖も、治敎を規する一なるときは佛法も亦、我王法と稱するに足る、況や王法佛法並へ稱するに於てをや、或人問、このころ洋人の言ふ所を聞くに、萬國の際にあるや夫れ敎は一敎たるべく、治は一治たるべしと、果して然らば、三敎を廢して耶蘇に屬し、一統を彈じて合衆とするか、予曰、是世間の鎖事、佛子のあづかる所に非ず、知らんと欲せば知るものに問へ、

神佛本迹

頃ころ本迹妄說の命令を出さる、今日にして此が非是を論ずるは賓主互に舊曆を算計推步するなり、當不何の用をかなす、且つ夫れ抗說云々すれば頗る大不敬に屬す、愼むべきなり恐るべきなり、諸宗の碩學口を扯て言はざるゆえんなり、此題下對問の闕略するもの亦此が爲めなり、

須彌有無

印度の古外道は神通ありてまのあたりこれを見るなれば信じたるなり、其後は列國の人何れも佛說を奉ずるものはこれを信ず、佛說を非するものはこれを信せざ

るなり、皇國の古き世のことは今僅に古事紀のみなれば、此事ありやなしや絶て知れぬことなり、佛敎の渡りて後は、人多く儒者の不信に黨してそれらが口ヤヲしつるが多きより、絶て之を信ずるもの少れなるなり、されば神代卷なども、唐しさまに解するものもあり、或はれのがさま〳〵に取なすものもあり、それ皆學問さへすれば、智力才力にて何んとでもこじつければすむ者の樣に心得るものとのみ世にひろこりてけるより、動もすれば神代の卷までを疑て、彼の書の中にては二三條のみぞ取所なる、其餘は信せられぬなどゝ云ふ者さへ出來しとそ、輕浮の學者とものの所爲は、淡もやまとも同しことなり、れのか國のことさへ信しられぬものを、如何にして外の國の又其よその國のことなどを知らるべき、平心にしてこれを思ひ、直眼にしてこれを見よ、天竺の國初も漢土の國初も西洋のものともの云へる國初のことなども、髣髴として我皇國の神代に似たると云へることの知るなり、これか知れたる所ならては、此の須彌の有無は何れそと云こと知れぬことゝ思ふへし、佛者は俱舍婆娑の世界建立の下、及大小乘經論を引かれたる法苑珠林などを見るべし、凡そ千聞一見に加かすとて、己れか見ぬことは誰しも疑はるゝものなり、疑と云こと は、凡夫の一種の煩惱なれば、疑の起るは尤のことなり、深くとかむましきことなり

信する時にあらねは信せられぬものと知るべし、莊子に曰、五色あれども聾者はこれを見ず、五音あれども聾者はこれを聞かずと、其智昧く其識惑ふもの豈遠大深廣を測量することを得んや、儒者天の字を信することあたはず、天とは理なりと解す、巫祝高間ヶ原を信することあたはずして、大和の國なりといへる人もありとそ、其不信の人に對して强てこれを信せしめんとするものは痴人面前に夢を悟るなり、能說所說皆無用に屬す、之を問ども答ふまじきなり、佛經に此を捨置答と名く、此西洋人の言ふ所を聞くに地球彈丸の如し、航海一周以て地を盡すに未だ一須彌を見ず、日月反覆し、人物倒顚す、佛說て四海平坦日月横行すと云へるは、斷然として佛說の虛誕なり、實檢測量をもて此を照すときは明鏡掩ふこと能はすと云々、神儒の徒幸にこの說に黨していよ〳〵須彌虛說の辯を張る、而して予をもて此を考るに洋說の主張未だ必ず然るに非るなり、蓋世界鷄卵地球旋動の說は印度古外道の舊傳にして佛說當時にありて既に此を破し玉へり、今の洋人の盲ふ所、凡そ印度古外道の說を襲ふものにして、其元佛說を斥ふものは、自ら舊習の熏する所なり、然るに佛說天眼の視る所の違はさるに至て一二これを言はゝ、經に閻浮提に八万四千の國ありと云へり、西洋むかし未だこれを知らず、中古やゝ航海術に巧なる遂に洋中に在

て所々の國渚あるを知る、又羅漢水虫の蠢々たる漉水の及はさる所を思ふ、佛曰、天眼を以て視るとなかれと、近時洋人顯微鏡を作る、初て知る虫水呑むに堪えさることを、此の機巧、一分天眼を摸す、人智も亦妙なる哉、昔し佛の龍窟に影を寫してこれをのこし、以て龍の瞋毒を制伏し玉ふことあり、殆と洋人の藥を製して寫眞鏡を作ると其事違はさるなり、彫は世間色法にして障碍有對に屬す、寫してとゝむへき法なり、佛は天然の神通此理あつて此事あらはる、洋人は機巧推求理を究めてもて其事に及ぶ、學の力を用る尤もこれを稱するに堪たり、而して人力の窮むる所必す度あり量あり、猶人の壽命の百年にすくることあたはさるか如し、測量の法も大凡其智力の見聞する所に就て以て其校計を定む、所謂日月の運轉、星宿の進退、推步してこれを算し航海してこれを測る、自ら謂らく地球一匝して其海際を盡し、天地左右實見もて証すと、遂に人倒懸し水火順逆の理を失するに至る、人疑なきことあたはさるをもて始めて引力吸氣の說を作る、測量の實見を證せんが爲なり、若し夫れこれを佛說に証するときは所謂洋人の實見と云へるものは併せて暗索妄評に屬するのみ、何そや其窮りある人智をもてかきりなき涯際を測れはなり、決して知る、其測量の實あるものは其航海見聞の及ふ所のみにして、未だ其及はさるに至ては、必

す測量の遠算、天度の變化、今日洋說の如くならさるものなきことあたはさるなり、曾て聞く、洋人昔日、天度を計り、地理を究むるものあり、十說にして十違す、其人と時とにあつては天度地理つくせりとす、而して今の洋說に比するに其違へること寡しとせすと云ふ、所謂其智力各もて窮まる所あるを視るに足れり、蓋し後にして今を視るに今の後人の說に及はさることあることを知るべからす、而して今の洋人も又言ふ地球一匝もて海際を盡す、測量もて實證を得たりと、古今時を異にすれとも、人智これ同じ、但寬狹長短あるのみ、古人の狹短にして今の寬長なるか如く、今の狹短にして後の寬長ある又知るべからさるなり、予竊に謂らく、洋人の機智日を追て精密、微より微に入り、遠より遠きに及はん、而して始めて知らん、今の五大洲の外に亦五大洲あつて、今の世界の外又一の世界あることを、又言ふ、今日の地球は猶鷄卵の小なりとし、今日の天度測量は一盤水中一月量なりしことを笑ふことあらん而して始めて知らん、地動は必す理に違ひ、海面平坦もて倒懸にあらすと云ことを洋人巧智其學術の倍々怠らすんば、百年を待たすして斷然として佛說の虛設に非さることを知らん、予不敏なりと雖も、竊に此を懸記す、此こと恐くは一言差誤すへからす、須彌有無の辨をはる、

此三題其事大凡同じ合してこれを對へん、夫れ一家仁あれは一國仁を興すと云へり、佛法はもと至善至德の敎なり、戒定慧をもて所行とし、法身般若解脫をもて所得とす、其中戒に八万三千の細行あり、入道の人之を行せんとすれは唯善惟勤むれば一毫惡の犯すことなし、一人これを行すれは國に一善人出づ、千万人これを行すれは國に千万の善出づ、天下これを行すれば天下善人となる、其國に於ける刑永く舍て、これを須ることなきに至らん、是を以て我　列祖　列宗の　皇帝いつれも以て佛敎を崇信するものこれか爲なり、皇國一千餘年佛敎の行はるゝ萬國の及はさる所なり、ひそかに惟るに、天下の刑罰これが爲にすこしく遏あらんこと、亦もてこれを知るべきのみ、柳子かいはゆる陰資王法といへる者誣ゆへからす、儒者曾ていへらく、僧侶億万織らすして衣し、耕さすして食ふ、國益にあらすと、伽藍千百田圃の地を費やす、國益にあらすと、予これを聞ことに額に汗して、もて慚懼に堪ねす、佛も曾てこれを誡めて曰く、盧受信施結無間獄之業と、僧にして尸位素餐ならさるもの甚たまれなり、これ國益にあらすとして僧を廢し寺を毀つ、我豈これを怨みんや、欽て王家に白す、此を愛するも其あしきを知り、これを惡むも其よきを知て而して僧

をして虚受信施墮獄の報を免れしめ玉はば、是亦莫大の　朝恩ならんのみ、苟も其佛法の規律制度、國益にあらずと言はんには我伏することあたはず、鎮護國家は天台眞言多くこれを司り餘宗は其餘波なるのみ、昔し最澄空海等の諸大德嘗て　朝家と盟約してこれを國朝に行はれしこと、　詔書　勅宣二三ならず、各其家に傳ふるところなり、代々の國史も多くこれを紀錄す、或曰、鎮國の名文武もて足れりとす、豈餘道の國家にあつかるものあるべからず、且我　皇國神道の存せるものあり、神助もて足れり佛護は其自賣らんことを求むるのみと、曰く、文武は顯明の鎮護なり、神助は幽明の加護なり、而に幸に佛法のあるあり、經中又冥護の說多し、古賢これを隱すことあたはず、もてこれを　奏達す又是献芹の志ならくのみ、　詔勅あつて其法を修せしむ、いはゆる善は積むことを厭はされはなり、一善一惡を退け、一福一禍を避く、神助に加ふるに佛力をもてす、薪に油を加ふるが如し、こゝをもて古今の驗證ある史紀僧傳枚擧するに遑あらす、故に鎮護國家の名ある私の命するに非す、詔勅もて稱すれはなり、陋巷の小屋尙其家に善法あり、其奴婢に善人あらんことを願ふ、天下を家とするもの小善と雖も豈これを斥すへけんや、夫猶大海の涓滴を辭せす、泰山の土壤を容るゝか如し、況や佛法の大善にして大益あるをや、神明歸佛の

一科我れをもて彼れに伏す、愧つへきやうに思へるより神人は忌むことになりたり、そは百濟より始めて佛法わたりし始め物部氏これを斥して曰、佛は藩神我に在て拜すへからずと、此れは人臣の職務尤なる言葉なり、韓退子か佛骨の表を上るとき事大凡同し意なり、其温古舊慣の道はもとも右やうならてはならぬものなり、而して佛法もと正道にして衆の邪曲を容れす、これを行ふもの皆至善なるときは人にあつては善人にして、神に在ては善神なり、夫れ善は善に與みす、惡に黨せす、釋迦彌陀豈に惡人ならんや、觀音地藏豈邪曲をもて心とせんや、皇國上下の神祇苟も神靈あらは豈此聖善の人に歸崇もて喜ひ玉はさることを得す、若し夫れ佛菩薩を邪とし正法を非する神祇ならは、獨り惡神邪神なるへし、邪正、善惡相匹敵す、其にこれを同することを得されはなり、佛菩薩に歸仰し玉へるをもて、始めて知る上下神祇は正神にして邪神に非ることを、或人の曰、佛は一種黠黠の人、妖術をもて神通と稱し、異說を巧說して佛法と號す、且つ醜爲濫行視るに足らす、僧侶まゝこれに傚て奇を衒ひ妙を現じて其名利の賣れんことを求るものに非すやと、曰く、昔しは天孫降臨の際に當て、猶早蠅なす神ありて遮り奉るものあり、人の世にあつても菅公の左遷、大塔の宮の窟辱豈二三ならんや、其己れが黨に非るものを斥する寧乃皇國のみな

らんや、これも亦さばひなす神、さばひなす人、其嚇する聲の大なるは、己れが愚陋の名を高く訴ふるのみ、疑ふに足らず、怪むに足らず、

生死業感　三世因果

神代紀には諸冊二尊の死後のことを紀されたれは、其昔にあつては死後果報あることを知ろしめしたるなるへけれは、現未の二世の說はみえたり、過去のことは見えねは其說ありやなしや知るへからす、儒家先聖先師の說多くは現在のことを敎る故、過去と未來のことはもと云はさるそ其道の正しきと云へし、西洋の人には耶蘇の徒の說けるには、過去は天主の造作に係るなれは過去世と云へるものなし、未來は善惡の報を受るなれは地獄天堂ありと說く、又其、現在と未來とを說くこと皇國と多く違はす、特に佛說に至て分明に三世を說く、其まのあたり過去世あり未來世ある驗証百千あり、史說僧傳これをみてしるべし、蓋しこれを喩を取て曉めんとす、曰く年月時日これなり、去年は今年の過去にて、今年は去年の現在なり、明年は今年の未來なり、今日は現在にして昨日は過去明日は未來なり、三世は堅をもて論す其一刹那と雖も三世の理なきとあたはす、人みな短き三世を信じて特に長き三世を信するとあたはざるのみ、其見るの短して長からされはなり、因果とは禾を種て

禾を得、粟を種て粟を得るなり、此因あつて此果を得、善惡其種穫を殊にするとあたはざるなり、易曰、積善之家有餘慶、積不善之家有餘殃とこれの謂なり、これ疑ふに足らず、生死業感の問題、此三世因果に攝して別に論ずるに及ばず、或曰、人一たび死して再生なし、佛家何ぞ生々死々を論ずるや、曰く人夢中にして夢の有無を論ず、たまたま論じ得たりとも實にあらず、何ぞ醒覺の人の言ふ所をまたざるや、佛經に曰、生死如大夢、言々皆囈語なるのみ、

洋敎新古

洋人の曰慶元の洋敎は邪人これを說く故に顓顧の賊なり、今の洋說はみな眞正なり、古をもて今に擬するなかれと、もて人をして耶蘇を信せしめんとするの張本とす、予をもて之を見れば、すべてこれ非中の是非のみ、邪敎今古是同說これを斥せんには佛說に非れば決しあたはす、其名利に奔走し貪瞋を帶ぶるの敎道なるをもてなり、試みに彼れが聖敎鑑略を見よ、代々の敎徒みな盈虛を窺て戰爭を緣とす、貪瞋に非らすして何そや、名利にあらすして何ぞや、其敎法の正しからざるに基する所以なり、其本亂れて末治るもの未たこれあらざるなり、或問、神ひとをして耶蘇を信せしめばこれを如何、予が曰、神代の說髣髴として邪敎と相似たり、山野の巫祝これ

と爭はゝ彼れにして七分の勝利あらんのみ、故に前に邪を防ぐ決して佛敎に非んばあらずと、予揮輪を造て彼れが新舊約書を斥せんとす、未だ閑を得ず

二法一雙（題意詳かならず）

葬式益否　法事吊勤

此題このころ佛家にて流俗に從ひて行ふ所の法事、とむらひと稱する軌式に就て其益无益を問なるべし、佛家にて葬式の儀を敎るとは僧者の上にのみ在て在家の儀は古くはこれなきとなり、其こと行事抄の送終篇を見るべし、若夫在家の葬儀に至ては淨飯大王の葬儀或は寒林茶毘のとなどとり合するまてのことにて、たしかに今のやうにをしなへて葬儀をとり行ふと申すとは昔時曾てなきとなり、されは印土の昔は在家もれのかさま〳〵なるべし、漢土にては昔は禮記などによりたるなるにや、近頃は文公家禮など出てゝ儒者たちはみな夫らに從ひけらし、僧に託して勤めたるもあるべし、夫將たたしかなる儀式はなし、此國にてもむかしは定りたるとなし、四條帝の御時あたりにや泉涌寺にて御葬送のとありしより、たのつから其規式の傳はりて今も重き　御作法とはなりにたるなり、慶元のあたり耶蘇の覆轍にこりさせおはして、葬儀は僧家にて取行ふべしと厚き命命出てよりこのかた、皇

國の士庶れしなへて佛葬祭になりし也、これは人として一死を免るゝものなし、故に其死に當りて耶蘇のしらへすへきとになりたるはめつらしき點檢のしかたにて、上には巧なる御令なりけり、此令一たび出てより民に在ては縲絏の辱しめを免れ、廳に在ては糺斷の煩ひを省ふく、まことに一舉兩得の御巧制なり、これをもて生者死者みなもて益ありとす、決して、无益にはあらざるなり、而して僧家にあつては佛意佛制の實には契はさるとしるべし、これをもて佛法とせんは誤れりとす、今の世これをもて活計とするものはまゝ〳〵たかへりとす、梵網經に棺材版木の制戒あり、僧者の忌むへきとにして深く漸愧すべきとなり、但此の因緣をもて亡者得脫の路を得れは果して大益ありとす、決して无益の儀にあらず、僧者眞實心をもて懇ろに引導し追善すべし、其の驗證枚擧にいとまあらず、法事とは又是流俗の中陰年回などを云にや、此れ中陰は地藏本願經などに出て其餘にもみゆ、今世中陰を吊するは此れの所以なり、大祥小祥は儒禮に從ふ、七回巳後の追修も例文ありといへとも慥しかならず、唯舊儀に從ふまでにてよし、後白河法皇十三年の御佛事を修せられしと、圓光大師勅修傳に見ゆ、本朝文粹の中には四十九日幷年回の願文ありしやうにれはゆ披て見つへし、もと佛經には見えぬとなり、此又土俗に從ふべし、改め

で行ふべからず、死せる人も三七の法事はすへきことにれはえてけるより、冥中よりもこれを待てるなるべし、おはれむべきとなり、益无益の論に至りては、俗に就ては民みなこれを勤めて心を安す、亡者もこれを得て心を安し福をうべし、死生に益ありて存亡に害なし、豈これを廢すへけんや、讃經施齋のと經論に多くみゆ、ひとり葬式法事のためのみならす、法苑珠林其等のと多く載せられたり、律の文には白衣の家に請せられて咒願說法式あり私のことにあらず、此の式は今もすこしく存す、但し今の世檀方ども寺にあつまりて、僧を驅り使ひ、めしくひ、酒のむなとは全く古儀を失す、僧俗の恥つべきとなり。

已上葬祭益否の大ていを述ふ、今や世くたり人薄して葬祭いたつらに式の存するを追ふのみ、其の實に至ては僧俗ともにこれを失す、其亡人の益无益に至ては、設へば秦人の楚人の肥瘠を視るか如きのみ、祭神神如在の語にれける、これを高閣に束かぬ、予ひそかにれもふ、佛葬祭をやめて神儒の葬祭たらしむるも、此弊れそらくは除くとあたはす、以て益〻今より甚しからんのみ。

右十二題一々佛經を以てこれを証すべし、而して今しからさるものは、外人これを信せさるが故にたゞ問目の一理貫通をもて專とするのみ、淺學膚見、用否は見ん者の意に任す

（三四六）

上人が明治四年頃回向院に住持せらるゝ折、輿地史略を閲し玉ひて、其中教法の一節を批判せられしものにて、僧侶が懶惰の睡眠を醒まして、活潑の門に入るべき問接の功あるべしと云ふも强ち妄漫の言にあらすと信す

（三四七）

教法私批

輿地誌畧に曰く、教法とは各國皆各種に尊崇する所ありて、政治人情風俗に關係する所輕からす、其尤も開化に遠き蠻夷と雖も必ず尊崇する神を祭らざる者なし、蓋し人事の知覺未だ開けざる愚愚の野蠻と雖も、其觸るゝ所は感じて人力の及はざる所の神のあるとを想像し、日月雷電及び山林水火等を祭り、或は偶像を作りて之を祈る、故に各國皆教法の由て來ると甚た遠く、其初めは皆單一なりと雖も、其傳來の久しきより種々の法式をなして、其中大有力の聖賢出る時は書を著し、說を立て、之を文飾し、終に一種の教法を開き、或は從前の法を看破して別に一派を分ち、遂に其種類の夥しきに至れり、今之を大別する時は二種あり、其一は多種の神を祭る者、其二は一種の神を祭る者とす、其一種の神を祭る者は猶太教なり、耶蘇教なり、回教なり、希臘教なり

猶太教は最も古代の宗門にして耶蘇教に先ちたること遠し、往時猶太國に行はれ、

國亡びて後ち其人民歐羅巴亞米利加に散在して今に此教を奉信す、

耶蘇教は歐羅巴全洲大畧此宗徒にして、又其他諸洲に蔓延す、蓋し數百年間各黨をなすの勢ひを生じ、八百余年を經て東部西部の二派に分れ、三百五十余年前に西部又二派に別る、乃ち舊教の二派なり(耶蘇舊教を天主教と名く、歐羅巴の南部に盛にして、中央は錯雜す、又亞米利加洲の人民過半此門派に屬す、此宗徒の中更に社を結び教師を諸洲に出し誘導を務む、往時日本へ來れる者亦是なり、洋教中最も弊害多き門派なり、耶蘇新教は英國及日耳曼に最も盛なり、和蘭瑞西等の人民も大略此門派に屬す、又北亞米利加洲に盛なり)

希臘教は盛に魯西亞に行はれ、又土耳其及び希臘人民此宗派に屬する者多し、回教は土耳其亞拉比亞比耳西亞等に一般に行れて(支那及び印度巴西の國を回教の國と稱す)亞細亞の西部より內地に蔓延して印度諸島に行はれ、又亞非利加洲の東北埃及、努皮亞等に行はる

多種の神を祭る者は其說更に奇怪にして、人情に背き淺陋なる者多し、印度地方より支那西比利亞等に盛に行はれ、亞非利加の內地、澳太利亞、新西蘭土等の諸島の野蠻一般に之を尊信して、各地各種の教ありて其區別尤も多く、或は偶像を祭り、或は

日月、山川、樹木、禽獸、骸骨、金石、器械等を崇め、人事の禍福吉凶等に至る迄悉く之を神佛の意に出るとして之を祈り、或は幸福を求め、或は死後の冥福を希ふ者あり、大概淺陋にして其法式單一なりと雖も、其中尤も盛にして深遠高妙なる空理を談ずる者は婆羅門教及び釋迦教にして、婆羅門教は釋迦教より其來る甚だ古く、盛に前印度に行はれ、釋教は印度の錫蘭島及び後印度、支那、蒙古、滿州、西比利亞、日本等に蔓延す、謂ゆる其將來を前言し、妖魔靈鬼を役使することを信し、或は日蝕を懼れ、或は靈驗を信ずる等、蠢愚固陋の人民ありて其種類甚だ多し、

又儒教ありて專ら人民倫理の道を講ず、支那に行はれ、稍隣邦に波及す、(批して曰く洋人儒教を說くと僅かに少分なり、未だ其人倫を教る獨り儒教に存するの委しからさるに出づ、故に其言ふ所省畧斯の如し、各國の教法と云へる者は、其始め人事の未だ開けざるに當て、凶暴の風俗を改め、善を勸め惡を懲して、皆世に大益あり、然りと雖も其教の盛に行はるゝに及んで、其弊却て人智を昧し陋習に陷るもの皆其常なり、故に歐羅巴洲も中世耶蘇教の盛なる、僧侶の權を恣にし、宗門異同の爲に無辜の人民を殺せる其數を知らず、終に古を宗び今を卑しめ、人間實用の學を講せず、文化次第に却歩し、固陋凶暴の風俗をなせしこと更に東洋諸國に異ならず、之を云て

暗黑時代と名く、近世其權の衰ふるに及びて、人知の開化始めて進歩すと云ふ、誠偶誌略を讀むて此一章に至り窃かに批議することあり、試に之を記して曰く、夫れ各國の教法悉く其始元を委することと能はずと雖も、衆人の邪を却けて正に赴かしむるの開導を示すに非ざる者なし、然れば則ち此教法を布き施せし祖たる者は、凡そ皆多少聖賢の域を蹈む者に非されは能はざるなり、支那の國に在て謂ゆる堯舜禹湯文武周公孔子など云へる其例明なり、印度の傳ふる所釋迦佛の出世に先んする數千万年の昔し、轉輪聖王と云へる聖人有て十善戒を以て世に教るよし佛經處々に之を說けり、此又其例と謂つべし、此に由て是を思ふに各國の教法と稱する者凡そ之と相似同すべし、佛教に就て之を云はゝ、各國の教法は、皆古昔轉輪聖王の十善の餘波及て勸懲の道を示す者なり、(猶禹湯文武の聖に居して國を創む、其安撫の道の正しき者衆庶仰望せざる者なきが如し、然り而して其聖政是れ正しと雖も、而れども其久しきに及ぶや、必ず弊なきこと能はず、其由何ぞや、此政を乘る者皆聖賢の人なること能はず、稍私曲懦慢遂に以て祖先の聖政を汚損するに至る、桀紂の國を亡し、周末の戰國に及ぶが如し、其守ること能はざるに至ては聖政祖法皆一大禍害とならざる者なし、古人の云へる聖人の法久ふして弊と爲ると云は此謂なり、各

國の教法又此と同じ、其始祖は皆聖賢の人なるべし、傳へて千百年の久しきに及ぶ、之を弘むる者皆聖賢の人なること能はず、私曲懦慢遂に以て祖法を汚損し、其教法却て禍害の基本となるに至る、遺憾之より甚き者なし、豈に悲しからずや、印度に途灰裸形等の九十六種の外道あり、牛狗鼠羊等の種々の禁戒あり皆禁戒取見と名けて悉く後出の邪流なり、祖法恐らくは然るには非ざるべし、(因明家の謂へらく、九十六種の異道は皆古佛の法の久ふして變せるなりと云云)支那に廣巾(漢末道流の變じて亂を生したる者と)白蓮(明末佛教の邪人異說を唱へて衆を惑はせし者)の邪流あり、悉く其後盟の私曲にして、祖法必ず以て然るに非さる者なるべし、

皇國に南都北嶺の鬪爭を好み、門徒日蓮者流の兵革を弄せる、悉く惡僧の弊習にして、遂に過亂其祖跡を毀損するに至る、(南都北嶺の諍鬪、保元平治の際尤も甚し、平家物語等に出づ、一向日蓮の徒の荒暴は、天正二年二月、一向門徒討泉州堺、逐細川晴元、門徒入堺、三月征伊丹木澤長政、長政帥日蓮徒與門徒戰、四月晴元伐門徒于大阪城、門徒伏、八月門徒背大阪、五年山徒伐日蓮徒于洛、門徒蜂起戰于處々、元龜元年九月門徒與三好謀發兵、以來至天正八年十一年間門徒弄兵云々、一向日蓮鬪爭のこと、君美の讀更餘論に出たり)祖法豈に必す然る者ならんや、末徒皆聖賢の跡を踏むこと能はず

して、固より教導の職を失するの致す所なり、豈にいたましからずや、之を以て是を見るに、天主耶蘇の宗徒同異の爲めに連年鬪爭を綽とするより、無辜の民命をも損するに至る(此こと彼か聖教鑑畧に記するを見て知るべし)如き、悉くこれ末徒庸凡の流類の惡行にして、亦是祖先の意にはあらざるべし、以上各國の教法古今の際に在て是非變化あることを議す、

次に誌畧者の言ふ所を議せんとするに二あり、初めに其言ふ所を擧げ、二に其言ふ所を議す、初めに其言ふ所を擧くるとは、誌畧者の曰く、多種の神を祭る教法は其說實に奇怪、人情に背き、淺陋なる者多し、乃至或は偶像、或は日月、山川、樹木、骸骨、金石、器械等を崇む等云云す、

議して曰く、洋教の中天主教を舊教と名け、耶蘇を新教と名くる由前に見へたり、其新教は偶像を立てず、日月水火草木等の神靈はなきことゝ定めて、唯一の造物主の天主を仰信するを宗とし、其舊教は偶像を立て其餘多種の神靈を祭ることに定めたる由なり、此宗門の異同を爭ふ者なり、今の誌畧に之を指して人情に背き淺陋なる者と云へるは、謂ゆる新教家流の舊教を斥する語にして、舊教家にては然か云はざることなり、其實は新舊二家共に非中の是非にして、何れか眞に人情の向背を得

て教の淺深を定むべき、猶是堅石白馬の論なるのみ、而して印度地方の古代も、支那皇國の人情も、凡そ此多種の神靈を祭る者に似同す(批して曰く、周禮春官上に大宗伯に曰く、大宗伯之職掌建邦之天神人鬼地祇之禮、乃至以禋祀祀昊天上帝、以實柴祀日月星辰、以槱燎祀司中司命風師、以血祭祭社稷五祀五嶽、以埋沈祭山川林澤、以疈辜祭四方百物、云々大平御覽五百二十四引證)別して皇國は神國と稱す、上下の神祇を祭るを以て國政の最とす、故に祭政一致の古令あり、甘棠の古詩を見れば、民の昌伯を愛する歲月を經て猶忘るゝこと能はざるを誦す、夫れ君父の遺澤に於ける千歲餘光を存す、以て仰くべし以て祭るべし、是人情の信然誠に然るべき者なり、豈山川樹木、器械を祭る特に蠢愚の爲す所と云ふべけんや、之を如在の禮と云ふ、是こと其印度支那と雖も皇國と殊なることあることとなし、其感應靈驗の明然たることも古來大概相似同す、其上古の人朴質正直一毫の私曲なき者、天人感通して以て靈驗もあることゝ見ゆ、

支那も後世理學を唱ふるに至て、頗る昔人の言ふ所に違ふことある者は、上古質朴の道を失ふ者に似たり、但し後世邪巫俗僧ありて、夫の靈驗を賣て衆を惑す者あるは實に惜むべきの至り也、其巢をあばき其窟を毀つも可なりと云ふべし、昔は唐の

狄仁傑江南の巡撫使となり、吳楚淫祠多し、仁傑命して一千七百所を毀て、只夏の禹と、吳の大伯と、魯の季札と、吳の俉員との四祠を留む、抔云へるも、巡撫の意必ず民をして手足を置くに處なき樣にはせざるなるべし、古へ果して是にして今の果して非なるとも云はれまじ、今の果して是にして古への果して非なるとも定め難し、其政に豫る者は篤と鑑定すべきことなり、僅かに耳目の學問にては數々誤失することあるべし、飲むべきことなり、誌略者又言く、或は死後の冥福を希ふ者あり、概ね淺陋なり云云、

識して曰く、死後の冥福のことは大凡佛家の說く所に屬す、洋敎の中死後天堂の說あれども、冥福のことは說かず、佛敎は固と六道輪廻を說くより、自ら其冥福を追資することを示さすんはあるべからず、隨願往生經、地藏本願經、藥師經、寶篋印陀羅尼經、隨求、尊勝等の經中に在て之を說く、亦是慈悲救厄の一端を示すなり、佛道の正義之にありと云ふにはあらず、人苟も惻隱の心なくんばあるべからず、苟くも六趣の沈淪を見る者拔苦の方便なきことを得ざる所以なり、概して淺陋を以て論ずる者果して是なりや、否や、

誌略者又曰く、深遠高妙なる空理を談ずる者は婆羅門なり、其敎は釋敎より其來る

こと甚だ古くして、盛に前印度に行はれ、釋迦は後印度、錫蘭島、支那、蒙古、滿州、西比利亞、日本等に蔓延す、其將來を前言し、妖魔靈鬼を役使することを信じ、或は日蝕を懼れ、或は靈驗を信ずる等、蠢愚固陋なる風習の人民あり、云々、

識して曰く、婆羅門敎と稱する者は、古に謂ゆる九十六種と名くる外道法にして、乃ち四空定を修するなど、尋常の世俗の及はさる所行あるを高遠深妙と云へるなるべし、是は釋迦佛出世以前數千百年に流布す、佛說之を破して正理に歸せしむ、其こと瑜伽論、唯識論、及提婆菩薩の百論、並びに嘉祥寺の吉藏法師の百論疏等に就て之を研尋すべし、空理を談ずると云へる語は、婆羅門は四空定などをも云ふべし、又は佛說の滅諦涅槃の理などをも指すべし、去れども其空理なると云は何の義理ぞと云はん迄には誌略者は言ひ及ばざるなり、尤も俗士庸學の徒の覩ひ知るべきに非ざればなり、偶〳〵佛學の僧侶と雖も眞の佛法を說くに至ては躊躇して躓づく者あり、克く知るべきこと也、其將來を前言すとは、佛說の三世を說き、耶蘇敎天主敎などの未來天堂を說くなど此に當る、或は現在に在て未然を察するなどをも云ふべし、又龜卜の法は印度支那皇國古代より之あり、亦未然を察するの規矩ども的然其實に稱ふものあり、言て固陋の風習と斥すべからざる者なり、妖魔靈鬼を使役すと

は佛教の天仙隨逐するを指す者、有德の人にして之あること凡下の知らざること
なり、異術在て下劣の鬼神を驅役する者あるべし、餘人の知り及はざることなり、事
幽冥に涉る者は、其見聞すること能はざるを以て此を斥する者は當否定かならず、
況や皇國は神明在て扶護力を垂る、幽顯に涉り不測の驗なきこと能はず、特に蠢愚
固陋を以て之を斥するは如何あるべき、考ふべきことなり、

誌略者又曰く、各國の教法は其始め人事の未だ開けざるに當て、凶暴の風俗を改め、
善を勸め惡を懲すに於て皆世に大益あり、然れども其盛なるに及で其弊却て人智
を昏まし陋習に陷るもの皆其常なり、乃至古を貴び今を賤み人間實用の學を講せ
ず、文化次第に却歩し固陋凶暴の風俗をなせしこと更に東洋諸國に異ならず、此を
暗世と名く、近世其權の衰ふるに及て人智の開化始めて進歩すと云云

今又之を議して曰く、列國各、其教法と稱する者をは、特に勸懲の一節にて、其言ふ處
百千區別ありと雖も是一節を離れて此を說くこと能はず、是を以て蠢愚蔽蒙を辨
すること能はざる民庶も聞て之を領し、見て之を知り、以て暴逆の甚しきに至るな
きに及ぶ、其方便尤も稱すべし、列國の民苟くも右の古代の教法なりしは今日にし
て暴逆貪狠に勝るべし、孔子の大聖尙ほ言へることあり、管仲なかりせは吾夫れ衽

を左りにせん、管仲は霸者の人にして聖意の趣く所に非すと雖、夫猶治安の術に委
細なるを以て聖者も之を稱嘆せられたり、今に在て古の教法あることを稱せすし
て、斥して之を毀訾する者は、有德の人の語に似合しからざるなり、考ふべし、此教法
の原始、勸懲の一節ある處、乃ち不易の法則、万古改め易ふべからさるの意を述るな
り、夫れ印度轉輪王の十善と云へるも、周公孔子の孝悌忠信と云へるも、佛說の戒定
惠と示すも、其實は皆勸懲の一節を出でず、其教法即ち國法にして、齊しく之を離れ
て民を安んじ衆を撫するの道あるとなし、故に言ふ、道は須臾も離るべからすと、又
言ふ、造次顚沛にも斯に於てすと、苟も此道先聖後聖其揆一なるときは、此を万古易
ふべからざるの道と云へるも、誣るには非さるべし、

又問ふ、若新法を作ること是ならずんば、唯舊法を廢するのみにして、王政の一を以
て其法となさば天下淳然正民とならん、之を如何、答て云く、今在て廢法を命せば何
人か之に背くべき、謂ゆる挾書の令之に同じ、而して不日に又舊法に影響せる凶法
在て出てゝ民庶を煽動せん者必せり、猶ほ禾を穫るの後田間ひつじ穗の多く生す
るが如し、謂ゆる妖孽之なり、正法既に亡びて邪法の出る果して妖孽にあらずや、妖
孽は之を伐り、禾は之を養ふべし、孰の人なれは、禾を廢して孽を養ふ者あるや、今や

明時天鑑くもることなし、夫れ猶民間種々の異教を唱ふる者あり、愚民を狐惑して錢財を射る、偶にして此を驅れば隱れて復たあらはる、惡むべきなり況んや正教を廢するに至ては、所謂白蓮彌勒佛の徒嘸々黨をなさん者足を翹てゝまつべし、執柄の人の深く恐るべくして厚く欽しむべきなり、

又問ふ、佛教は唯無我を証するを詮とすと聞く、今八宗九宗門戸を並べ互に相是非し、互に相抑揚す、果して人我を以て其己れに黨する者を悅ぶ、昔南都北嶺の僧兵ある、門徒日蓮の兵權を弄するもの、彼天主耶蘇の連年鬪爭を綽すとする者に同じ、果して佛法の妖孽にあらすや、此中何れの所に勸懲の實あるや、答て曰く、佛法に宗旨を分つは佛說の對機說法に由て起る處なり、人我を脫ふて此門戸を張るは其理あらざるなり、其事佛祖統紀、傳通緣起、八宗綱要を讀で知るべし、故に其祖師各々戒定の淸規を設けて之を門弟子に授く、弟子之を傳へて之を向後に遺るなり、其宗名を立るは其尊崇する法門に名くる迄なり、此猶朝に八省の區別あるが如し、後世に至て人薄く法衰へて人我を競ひ、門戸を爭ひ、甚しきは兵戈を弄するに至る者は、悉く佛家の罪人なり、驅て之を擯すべし、佛家に在て數ふべからざる者なり、亦是天下の犯人なり、王法の以て赦すべからざる者なり、此中豈勸懲の實ある者ならんや、眞に

法中の妖孽なり、之を治罰せんこと、有司此に存す、誰か之に辭を作て逭るゝことを得んや、

又問ふ、子が辨する處頗る是非を知り、邪正を辨する者に似たり、試みに當時の習弊を洗て各其正法に飯せんことを知るか、答て曰く、己れ誠久しく弊中に焉染して蒼蠅の嗅を逐へるの徒なり、豈に苟も一旦にして纓を洗ふ人となることを得んや、然れとも其視る處を以て之を云はゝ、諸宗各々弊なき者あることなし、(宗弊多端一朝にして辨し盡すべからす、各宗有志の人在て宗弊辨一冊を作り、各々其宗主及び衆と議して之を革むべし、此中人我を以て隱顯抑揚し、私を交ふべからず、己れ竊かに宗弊辨の述あり、今之を省く)畢竟は三學の道の廢する處人我を伏することを能はず、遂に宗弊法門を掩ふに至る、猶浮雲の明月を覆ふか如く、塵埃の明鏡を翳せしむるが如し、欽で請ふ諸宗の龍象、先つ宗々の戒定を再興し、以て破戒散動の惡業を廢すべし、名利貪瞋の俗腸を一洗して、以て我なく我々處なきの眞門を務むべし、其則經論に在て平常に訓釋す、旦暮之を誦するが如し、古に曰く柯を伐り柯を伐る其則遠からすと、其頭髮は何の爲めに之を剃るや、其衣は何の爲めに之を染るや、苟も父母の家を出て、妻子の繫縛を免る、園林財物何の用をかなす、出家の大幸に王家の驅役

を免かる、四念處を除て何の務る處がある、欽て佛祖の垂誡に依因して、以て宗法を護らば法水再び清に皈し、明鏡忽ち翳を消せん、法の正眞に復する此外復何をか言はん、誠竊かに按ず、澆季の僧徒一毫斷惑の人なく、一道証悟の人稀れなり、各惑業あり て在俗と異なるとなし、此れ元と末法の弟子、濁世の常相、惟しむに足らずと雖も然ども、幸に宿善の感する處共に三寶海に游泳す、各々毘盧の法水に浴し、彼岸の解脱を望む者なら、其志す處厚薄ありと雖も、一分の慚愧を具せずんばあるべからず、自ら省みるに此身既に僧數に攝す、世俗と同じく名利の酒に醉ふべきに非ず、凡愚と同じく我執の淵に沈溺する者に非ず、一旦豁然として貫通せば少しく佛子の正路を踏む人とならん、已れ不肖なりと雖も今の僧中の弊原を按するに、凡そ三弊を出でず、一に曰く我執、二に曰く名聞、三に曰く利養なり、我執は內心の俱生なれば無學の聖者に非ざれば、之を斷ずること能はずと雖も、其分別して少分を伏して此を微渺にするの義に至ては、或は聖教量を以て修學の窓に意を用る者、聊か其少効なくんばあるべからず、佛成道の最初、凡夫小乘を度するの方便唯此一事にあり、今夫大乘の眞沙門にして小乘無我の法門にすら暗しと云はゝ、豈に愧かしからずや、古人云へらく、毘曇有門は佛法の根基と、誠に由あることなり、人々先づ我見を薄からしむべし、宗法之より光を生せん、其次は名聞なり、今の世王政出でゝ侯伯を廢し、位階を縮む、今にして僧綱何の爲めにかせん、名位何の望む所かあらん、幸ひにして僧者の名聞を棄んは此秋なり、人誰か之を望まん、人誰か之を希はん、第三利養なり、今の世門地を廢し寺領を沒す、僅かに食糧を存すと云ふ、其僧をして貪著を止めんが爲なり、幸ひにして蓄積の念を忘して衣鉢を存すべし、遺教經に曰く、以氣自活すと、今方に此時也、山林田園に固執するの念を離るゝことを得んこと、予を以て此を云へば眞にこれ朝恩なり、聊かも遺憾の念を生すべからず、既に攝政、關白、幕府、及大小の侯伯數百年の國邑を棄てゝ皆王家に歸す、公法固より然るべしと雖も、然れども其一毫と雖も各々此を惜むものなきを見れば、俗人と雖も殆んと檀度の大士なり、僧者にして鉢底の餘粒を惜しむ其理にあらざるべし、利養此に於て永く捨念に歸す、豈に喜ふべきの至りに非ずや、白俗の士も少しく氣慨を具する者は、必ず利名を卑しむこと、猶履を棄るが如し、釋迦法中の佛子にして豈粟散邊土の名利を固執する者あるべけんや、夫無我は內心を治すべし、名利を棄るは外誘を治すべし、以て始て佛法の門を開くべし、毗盧の壇に登るべし、苟も此三關(我執、名聞、利養)を出ずんば唯是尋常の素俗にして、家を出ざるの人と同じ、解脱何れの日そ、涅槃何れの時そ、古

歌に曰く

何故にそりにし身そと折〳〵は　袈に耻ちよ墨染の袖

東京江東　沙門行誠識

辛未七月

右此ごろ高野山明王院增隆阿闍梨職を解きて山に歸らせ玉へるよし承り、先の日借り申したる輿地誌略三冊を返へし奉るに就て、其中教法の一節を批判したるが筆にまかせてかきたれば、思ひの外に紙の數多くなり侍りぬ、されど思ふこと云はぬも腹ふくだみたる業なるに、阿闍梨は年ごろ諸宗の主をさへに請ひ申して、何くれ心ねきなく打語ひ參らしたるなる、何をかかくし、何をかはぶくべきと、つぶ〳〵としるし申すなり、願くは此中あしとをはすことあらば速に筆加へて給へかし、其御山は皇國の鎭護佛家の基礎なれば、いかにも〳〵堅固なる上にも猶岩垣のかたく、三鈷の松の万代は云ふも愚かなり、龍華三會の曉きまでもと祈り奉るなれば、猶今法久住利樂有情の計圖あらまほしう庶幾ひ奉るなり、山の龍衆にもとり〳〵評じ給はんことともあらば後日見せ給へかし、

此頃の風に夢やさめつらん

其曉の鐘ならねども

旅衣たちわかれても思ひ出よ

やどりなれたる武藏野の月

外道處置法

第一　不惜身命の意地に住し、公憤慷慨の心志を發して外教を毀斥せざる可からず

邪教を毀斥せんと欲せは先つ所破の旨趣に通曉せさるへからす、故に先つ初めに彼我を比較して內外の異同を知り而る後ち金鍮を辨すべし

外教者崇奉する處の經典に舊約全書あり、新約全書あり、是れ彼の徒の金科玉章にして萬代不改の寶典たり、其他和漢兩邦近來の著作其數少なからすと雖も、皆な此両約經典を本として風に順ひ俗に應し、演繹し潤色したるものに外ならす、就中彼の天道溯源の一書の如きは其宗旨を略辨したるものにして、聖教鑑略の一書は彼徒が今古異教者と戰爭せし經歷を記する者なり、たゞに和漢兩土に數多の著作あるのみにあらす、彼徒殉教愛宗の至誠熱情溢れて其國の文と鑒とを問はず、其地の

明と暗とを論せず、王公貴人の庭にも、獵師漁夫の門にも均しく傳通流布せられさるなく、あらゆる言語あらゆる文字を以て其教旨を叙述せさるなし、賦に盛なりと云はさる可からず、正教を奉する者少しく其所爲を稽考して思さる可からず、今彼我の說相を對觀せんに

一佛昇天を說く　彼も亦た之を云ふ
一佛は諸惡莫作衆善奉行を說く　彼も亦た勸懲を言ふ
一佛は聾盲喑啞の療治を說く　彼も亦た百病の治を言ふ
一佛は不惜身命を誡む　彼も亦た之を言ふ
一佛は自ら三界獨尊と云ふ　彼も亦た天主獨尊を論す
一佛は代理受苦を說く　彼も亦た諸衆の罪に代ると言ふ
一佛に懸記說あり　彼に豫言あり
一佛は入涅槃の後迦葉摩耶の爲めに形を現す　彼も亦た磔死の後蘇生す
一佛二十增減成劫の說あり　彼も亦た六日創世の說を爲す
一佛神通を言ふ　彼も亦た奇跡を言ふ

斯くの如く彼我の所談を比較するに、其跡往々邪正相似たるものありて、初學の徒

（二百五十八）

（二百五十九）

稍金鍮を辨せさる所あり、依りて今方さに毀斥の一端を示さん、古說の中種々の外道あり（佛陀出世以前數千万年の古に於て六種外道あり、其教祖各五通を具ふ、人の信仰するもの故あるなり、之れを大自在天計と云ひ、又は梵天計と云ふ、佛の出世の時に及びては分派して既に九十六種の多きに至る、維摩經に六種外道を說き、涅槃經に十種、瑜伽論に十六邪見を出す、其余中論百論及唯識論等廣說云云）或は神我冥初を以て法源を說き、或は梵天自在天を以て法源を說く、今時の天主耶蘇教の如きは正しく此梵天計の末派なり、其說古竺の所說に比すれは稍淺薄なれとも、新古とともに均しく外道邪說なれば、之を破すること猶ほ古外道說を破するに齊しく異ることなし

夫れ佛說は本來無我の法を證して一切の境に對するを以て、見聞覺知ともに一の顚倒錯亂なし（羅漢既に三界見思の惑を斷して無我を證し永く人空の理を知る、十地法空の理を見て法無我を證す）況んや如來無漏の六通を證し天眼宿命等の通力を以て過去未來及一切の境智に於て明了なること猶ほ堂中の物を見るが如し、是に於て無量百千の成住壞空を說き、無限無際の輪轉迷苦を說くに毫厘の違失あるとなし、其の功人法二執の障碍を解脫するに依れり、外道梵天大自在天の輩、劫初に

天處に住して世界の空曠なるを見る、依正二報の生し來らんことを欲する處、やがて依正の二報一切衆生の業增上力に依りて忽然として出現するを見て、天主自ら許して萬物皆な己が所造なりと誤り思へり、是れ此天主の自謬見を生したる始めにして、爾來生したる者総へて此說を傳へたるより、數万劫を經歷したる今日に至るまで天主を以て造物之主也と誤解せるなり、凡庸の徒猥りに說をなせるにはあらず無理ならざることなり、左れと之を佛說に比するに、其梵天自在天の輩皆な齊しく同一樣の凡夫位中にある人にして、人天果報に尊卑あれとも一毫未斷の凡夫なれば、無我の至理に於けるや夢にだも之を知るものにあらされば、其自ら造物主なりと誤見を抱くも亦た理なきにあらず、外道者流凡て是れ佛種を消盡したるもの、各其說を珍敬して怪まず、未來際を盡して輪廻を免れさるものあり豈に憐まさるへけんや、是を以て彼が言ふ所實我實法を固執して五見(身、邊、邪戒、取、見取見)石の如く堅く、三毒(貪瞋癡)鎖の如牢く、實より實を結び惑より惑を重ね、生死の牢獄に繫縛して出離解脫の期を知らさる者とす、猶は彼の阿羅蘭、伽羅闍の非想處に墮して佛世に遇はさるを嘆し玉へると事相似たり、前に云へる如く佛說外道說其言ふ所稍比同すへき者あるに肖たるも、一は無我を以て世界悉檀を說く、所謂依他起性の

法門なり、說て億千に至り建立して天地に充足するも總へて如幻虛疎の法なり、又畢竟皆空無際無碍の法門なり、般若經の中に十八空を說き玉へる者之れが爲めなり(大乘義章第四卷往披)一は我執の妄見を以て世の成壞を見て法の實有に着す、見聞覺知すへて徧計所執なり、惑業苦の羈絆する所にして般若の解脫の遠さかる所由なり、均しく是れ水也魚は視て住居となし、人は見て飲料となし、天は見て瑠璃となし、鬼は見て火炎となす者喩況知る可し、又復條目を列擧して以て相對比すべし

一佛は人法二空の理を明かに了達し、彼は二執に繫着す

二佛は一切法を如幻虛疎と說き、彼は眞實不虛と執す

三佛は梵天の妄見を呵責し、彼は梵天の所見を仰信叛仰す

四佛は三千世界を說き、彼は一世界に止る

五佛は三世を說き、彼は二世に局る

六佛は六道輪廻を說き、彼は昇天墮獄を偏說す

七佛は無諍三昧を說き、彼は戰爭を事とす

八佛は所說の法に着することを誡め、彼は固執せしむ

九佛は作者使作者なしと說き、彼は自ら造物主と執す

十佛說は三世に傳通して一字を違はす、彼は多く古仙說を誤り傳ふ

以上十項凡そ正邪の分るゝ所なり、善く佛說に通曉するにあらざれば趣旨を辨し難し、摧邪興正の志を存する者は日夜勉勵して以て正邪の由て起る所を知る可し

吾黨佛者と雖も、意に我執を挾て之を讀まば外道と相距る遠からす、恐るへし恐るへし、彼れを貶する前に先つ己心中の天主耶蘇を斥す可し、彼れを破責するは第二義なるのみ、苟も彼我の見を懷き勝敗の念を有せば、既に自己の墮負處に坐すること を知る可し、之を佛敎の破邪顯正の實地に存する者と名く、愼むへし戒むへし

第二　外道の侵入も止むべからざることを知るへし

夫れ迅雷疾電は人の怖るゝ所なり、暴風烈雨は人の患む所なり、樹靜ならんとすれば風此を搖かし水清からんとすれは濤之を濁す、人に吉凶禍福あり、國に盛衰興廢あり、此を有爲の世界と云ふ、衆生共業の所感なり、何そ清泰安穩土の如くなることを得ん、金剛經曰、一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀と說玉へる實に爾り、然らざることをゑさるなり、故に裴婆を堪忍と譯す、其免れさることを堪忍して、住すれはなり、住劫の始め、世界純善なるを以て、好世の淨土と名く、轉輪王出てゝ、十善を敎ふ、人下り世衰ふるに及て、諸佛代る〳〵出てゝ、種々の敎法を說く、解脫の道

こゝに起れり、其衰頹の增上するに及て、佛說誤て外道說となる、九十六種の出る所縁なり古哲の所謂聖人之法久而爲弊と云へるもの是なり、夫れ猶電雷風雨の免れさる物の如きか、蓋一盛一衰は天地の消息なり、一正一邪は古今の常理なり、驚動すべからす、疑懼すへからざるを以て、大觀の人と名く、在世猶諸外道來て佛に抗敵す、宿善ある者は示敎利喜の功を得、而して焦種の徒は、私かに害心を懷けりと云、故に曰佛力も業力に加し難しと、をしむべくして憐むべし、此中强て意を動する者は、愚痴煩惱と名づく、問曰く然らば則ち外道の侵入も亦常理なりとして之を免じて防禦することを廢すべきや、答曰、あゝ何と云とそや、嬰兒の井に陷んとする是常理なりとて、傍觀せは、此を仁人と云はんか、衆生の邪に趣くを以て此を坐視せん、果して佛者の志に背く、百方善巧を須て、之を救はさるべからす、摧邪の一門背て逃るか如し、今の一門は學者の內觀を示すなり、夫佛法は正因緣を解し、正因果を知るを以て正智とす、八風（利害毀譽稱譏苦樂）に動せられず、六塵（色聲香味觸法）に轉せられさるを大士の內德とす、縱令劫火洞然大千燒盡するに對するも、淸風袂涼しく、霓裳羽衣喜園に充滿するを視るも、旅客枕頭夢閑かなるか如くなるへし、內觀堅固なるの士にして、而して後に始めて外防の勇壯なるとを得るなり、矢砲充實にして外敵防

くに足る者、以て比すべきなり、苟も此内觀の正道理を解せずして、徒らに外防を事とする者は、殆ど雞狗の相鬪ふ者と一般異るとあるとなしと、所謂鬪諍堅固の譏りを免れさるなり、蓋し内觀は甚柔なるに似て、外防は甚強なるに似たり、而して内觀ある者は必ずや外防の實を得るものとす、所謂柔よく強を制するの謂なるのみ、故に此一門を示す、學者深く思ひ厚く信せさるへからす

第三　大慈悲心を以て外教師の徒を開導して歸佛の心を生せしむへし

央窟波羅門は大外道教を奉じて、既に佛世尊を害せんとするに至るも、世尊の教化遂に大乘無上の法潤を得たると、央窟摩羅經に出づ須跋陀羅外道、阿難の引導を得て涅槃の席上に阿羅漢果を證す、涅槃經に出つ、固より宿習開發の然らしむる者と雖も、其實世尊の大悲薫發の感應道交と謂はざるとを得ず、夫我黨大人菩提心を發して、衆生無邊誓願度の大願をれこす者に非らずや、然らは則ち、所度の衆生に於て順逆と邪正と怨親と是非とを擇ばす、機に應し緣に隨ひ、或は呵し或は褒し、或は立し或は破し、横説竪説、其道理の直にして且正しきに由り、我教法の言論にたける淺深高下尊卑曲直の彼の宗と天然均等ならざることを聽取せしむべし、彼の宗の徒、曾つて己れが道の爲めに万里を航行し、身命を抛て其教を布かんことを勤む、其厚

志深心の至切なる尤も稱すべくして讃すべし、是正大豪傑の士に非ざれば能はざるなり、智識卓拔の人にあらざれば能はざるなり、佛世の央窟須跋陀羅と雖も多く讓らざるべし、既に此勝機宏才の器を以て螺盃海を汲み、管見天を度るの作爲あるは固より其宗計を以て无上无過となすの偏見に出て、我佛説の五見の深泥に沒溺するの範圍を脱すること能ざるに由ればなり、惜むへくして亦憐む可きなり、夫五戒の善因偶人界の果を得たり、六識清明にして智光徹通す、彼宗已に人に靈魂有りて、以て禽獸の軀魂と遊ふ事を知る、苟も正道正理に就て進取伸張せば、殆ど二無我（人法）の理に達し、三德（法身般若解脱）の波羅密に臨んこと足を翹て、待つべきなり、何ぞ自ら屈し、自ら黜して地獄天堂の一隅に滯むことをなすや、果して宿善の足らざる者歟、抑も業增上力の感する所、貪瞋三毒の障弊をなす者歟、説て此に至る殆んど感泣袂を沾はす

絶筆偶曰

般若之門、無所得。　塵々法々入融和　強存彼我邪正念　内道亦同外道過

辛巳（明治十四年）八月十日書于三緣山上草舍　七十六僧沙門晋阿

譜脈私案

古今和漢とも、其家系譜脈の卷物と稱するもの、祖先の人此を製するとなし、すべて三五代已後にしてなれるなるへし、吾宗(淨土宗)の譜脈も類例するに爾らさるとわたはさるものに似たり、古來震旦所傳の列祖の說、並に大師俊乘坊に命する五祖の說われとも本宗の家系悉く此を用るとを肯んせす、後年問師十八通、頌義等の選述の日に當て、漸く其列を定むるものなるへし、後に八祖傳あり、鎭西已下酉師まてを選して八祖と稱し、以て傳法血脈の祖位と定む、爾來四百余年、大凡本宗の通法とするか如し、東照宮施政已來、花頂に法親王を設き增上寺を香花院とせるより、全國寺院及大衆倍增す、宗制なくんはあるへからす、此に由りて請て三十五條の規約成れり、兩脈等の法式も此あたりより定まり、譜脈も之に準して作爲せさるへからす、當時創業質朴の際、各所の譜脈同異混濫せさることを得す、此より後世之を分て兩譜の名を設く、曰く世代に關する者を伽藍譜と名け、傳法相承に係はる者を傳法譜脈と號す、而して伽藍譜とは其寺の世代を系す、其一寺に局るなり、法脈譜は宗門の傳法に系す、全國に通するなり、寬狹自ら別に、通局もとより異なり、此に解しにくきこ

とあり、而して先年御述作の正統系譜畧の中には、知恩院に於て二樣の血脈あり、初め法親王家御傳授の譜脈には辨阿を第二とし、源智を第三とし、然阿を第四とす、大谷寺代々の譜脈には源智を第二とし、道宗を第三として、鎭西記主を省けり、是眞誠の伽藍譜なり、吾れを以て此を見れは、正しく此譜脈にて宮家御相承の系統として也少しもさしつかへはなき筈なり、御傳に源智上人を傳して首尾十八ヶ年、常隨給仕、淨土の法門を敎示し、圓頓戒此人を以て附屬とし玉ふよし見えたれは也、傳法傳戒鎭西記主を用るに及はんや、爾るに宮の御附法の譜脈に局て、伽藍譜の中へこと さらに二祖師を加ふるは、竊かに思ふに、其頃は早く關東の傳法譜脈すへて二祖三祖を列するか爲めに、伽藍譜中此二位を加へられたる者とみゆ、此譜脈の仕かた甚 鶻味たる列次なり、今試に之を難せんに、知恩院の第二世は源智上人なると日光をみるが如し、御傳にこれによりて道具本尊房舍聖敎殘る所なく此を相承せられき(漢語灯亦爾り)と載せたり、何の故あれは此師を第三位に列して鎭西を第二位とするや、夫源智上人は建久六年十三歲の入室なり、鎭西は建久八年三十六の入室なり、而して源智上人は十八年の常隨なり、鎭西は前後八年の通聽、外房の人なり、源智は鎭西の下位たるへからす、鎭西は源智の上坐すへからす、鎭西に選擇傳授の速なる

を以て云へるか、源智上人一枚起請の傳法あり、其附法に於ける實に難弟難兄と云へし、何ぞ列次の前後を設くるや、況や源智上人は元祖の直授なり、鎮西の稟承に豫らさるをや、蓋此の師をして鎮西の次位に列するは此師を辱かしむるなり、古人何ぞ此を思はさるや、(是一)且其第四位に至て記主を列す是れ甚だ解し難き所なり、抑記主は鎮西に稟承す、源智上人と其時を異にす、誰か此を法脈相承の列次とすと謂はん、況や記主は關東の知識なり、知恩院にをひて厘毛の關係ある人に非す、且つ夫記主を以て本宗の第三祖と稱すると六百年來全國の通稱なり、今日にして一系祖の由を以て第四祖と稱せしめんと、恐くは宗徒の肯するとあたはさるへし、(是二)爾らは則ち源智上人は知恩院第二世と稱して第三世と云へからす、記主は宗門第三祖と稱して知恩院第四世と稱すへからす、古人此辨別なくして、法脈と世代とを混淆して一系譜を作る、窃かに想ふに識者の取らさる所なり、是を以て此を觀るに、關東の法脈、三百年來今の譜脈にして全國其式を違へす、今日華頂に加行するもの獨り舊脈に異なる者ある、初學疑なきとあたはす、(是一)法親王家に授與する違はざるを得すと云難に至ては、吾れ此を會せん、古人といへとも誤りなきとあたはす、故に云勿誤憚改と、今日にして宮門跡在さは之れを上聞して其誤を告け上りて其正に

從はすんはあるへからす、況や今此事なし、何ぞ瑕を懷て其璧を磨せさるや、十年來これを用ゆ、今にして改むるとあたはすと云はんは其瑕を掩ふなり、改むへくして此を改めさるは其非をかさるなり、願くは衆和の歸する所に就て一譜脈たらんは尤も後來の異議を防くの一方便なるへし、己れは私かに思ふ、數百年來加行傳法の權は獨關東にあり、今日にして華頂に其職をわかつ、其初此論なかるへからす、此なかりしは有司の計畫を遺すれたるなり、今にして之を論するは舊過を責むるなり、爾りと雖とも議論一たひ起る言はさるとをえす、蓋し東方衰へたりと雖とも猶檀林の名義を存す、本山の爲めには柱礎藩屏と云へし、柱礎の壞るゝ大厦の存するものあらす、上下相和し師衆和睦、願くは理長の衆きを以て再考三思を賜はらんとを庶幾す、由來僻鄙しく理拙きも兼日愚老がひそかに思慮する所を述ふ、貫首に對して議論を搆するに非す、如是云云述ふる所至當の道理を差す、偏計所執の出す所と見玉はゝ今一應御教諭を乞請す、愚老頑陋を懷て死するとを希はす、明教に就て必す志を轉改するとあるへし、右の條々他に向て此れを言はす、獨　閣下の考按に備へんと欲す、いはゆる我汝に隱すとなきの謂なり、欽て啓す恐惶に堪ゑす、

明治十八酉年八月七日夜病眼を摩して記す　　行　誠

釋教正謬再破批

第一經典章　批曰、唐孫思邈之事、足爲龍樹類例、黄帝已下事實尋常龍引之少覺慊矣、且按引我神祖彥火々出見尊及浦島子、古事奈之何、

況是如來神變出于諸師（師字當作聖）之上乎、　批曰、十三字似雪上加霜、

第二教乘章　文義穩當、無可批者、

第三釋迦章　批曰、佛生之說、古今概從志磐所言、撮之以爲足矣、木子衡之說委曲可褒、而甚過繁冗、見者厭之、亦撮要出之可也、邪人原尤異說、以爲誹謗、端耳、而於列國之史、及紀舊事、未能必無異議也、苟以有異說、議是非者、君子不爲焉、反詰如是足矣、會異云云非割鷄須牛刀邪、

第四輪廻章　批曰、按彼之所言、岐泒爲五、一曰人畜不同、二曰醫者天心、三曰孔子再生、四曰上帝分賦、追善无益、五信代贖、不信余功德是也、初破及再破、大凡粗通、而窃覺鈴針未徹骨者、若敵對相稱、以一一指其過失、則快然无遺憾矣、五見之說、彼未肯明委說似无益、仁王經一節、說无常、彼固許無常之理、欲示反復、却資彼倒見者非邪、

（百十一）

第五三寶章

第六沙門章　批曰、廟堂二字作十方常王二字作人天民人二字作鬼畜、則似切要務、言名、聞廟堂等之語、在沙門所不足稱也、○外制已下、至尤得理矣、一段削之可也、彼原責僧之濫行散心、非難識法、是非、且至罪性本空之論、大乘祕說、聲聞尚不解之、況於外道、容易言之、不如不言之勝矣、○以道場爲神道之權、權字雖義可解、非佛家熟語、見者怪之、蓋檀越送食十二頭陀、隨一也、是佛制也、苟以爲制利之場、則過在其人也、制律非所關也、蓋外道之徒、適見僧行不律、以責曰、佛制差誤、若夫然、適見傑紂之暴、果言成湯差誤乎、按清朝僧侶、今而非法濫行、殆與　皇朝沙門、事多不逆者、有之、澆風所扇、豈非慨嘆之至耶、

第七十惡章　批曰、佛說十惡說字作制也、義或穩當、按彼所言、責吾十戒中不加孝者、曰、出家修行、不顧父母之養、正爲大謬、初破中云云爲說、再破又引何尙之對說、於佛之勸孝與十善之必可修之義、已聞命焉、於戒中不加孝之難、未聞判然通解、潤筆之際、恐屬遺忘邪、誠今試議曰、無人而不有父母、夫有父母、未有不順從奉事者也、苟否之者、獸心也、不齒人也、然則、孝也者人之天性也、非學而習之受而行之者也、是故、雖頑民愚婦

（百十二）

不通一事者、而有至孝感動於人者、事出于天、出于性之不能止也、故曰、非學而習之、受而持之者也、夫於我佛教、收修行之法、其規有二、一曰化教、二曰制教、化教者、化育益物爲義、此中收世間及出世間一切善法、名此於作善、孝也者攝于此中也、制教者、制止禁歇之義、此中收大小戒律、名此於止善、夫孝者出于性德、天然可行焉、戒成于修德、授受可習焉、止作殊途、體用別品、所以十戒中不列乎孝也、又有指孝名乎戒、經說攝善法戒、亦說孝名爲戒者是也、此以化教合併制教、孝全受戒名也、受戒名、則不得不須授受之規、陳智者大師、註梵網經中、舉六種戒儀、加後世教之家々出戒儀、亦爲之也、蓋欲令性德之孝、策進修習也、可謂盡矣、夫孝與戒、猶兩輪雙翼、若以左右論之、則止作勸懲、指爲異體、若以運行論之、則翔高致遠、言爲同用、雖同異分岐、而其於論孝之至要、則不差也、外人卒然、纔見十戒中无孝目、以責僧之不孝也、迦文差謬也者、狹矣、暗矣、誣之甚也、嘗聞彼之說、孝、曰信天主、而後行孝者、善人也、當來生天、不信天主、而行孝者、非善也、惡也、當來墮于地獄、筋按、彼之孝者、斑駁也、非純孝也、又有名无實也、何乎、曰、彼之孝名、在順從于天、非順從父母、而行之也、故一者則是、一則非也、故曰斑駁、不純孝也、且夫孝唯在天、不係父母、則是奉天可名焉、不可名孝也、而强以孝名之、其實去而遠矣、故曰汝之孝者、有名无實也、以己之虛名、毀他之實孝、非愚抑狂歟、

論殺生中、彼曰、無故而殺、是爲罪也、有故而殺、是非罪也、按此語且從說支那王禮、而言之耳、恐非彼之本色也、彼曰、六畜之覺魂、與人之靈覺異也、是令牛豕鷄狗略與草木同之也、固爲欲濫殺殘害無度也、○又曰、佛戒以无意壞小虫爲大惡、此說律中无文、○破中万物、不可一躰、云云、彼之說中、有万物爲一体之說、邪、否、

第八功德章　邪說大略分爲四節、一曰、衆事屬无功、非己之功、二曰、以耶蘇之功、讓于門徒、三曰、以遠摩語、証无功德、四斥空寂及无爲不起　批曰、初破僅係于禁殺與布施、再破、亦出禁殺與布施、廣略雖殊、義趣是一、彼之讀此、投卷併廢而已、蓋彼之旌鼓甚有律焉、所謂四節張陣、設略於其中也、禁殺布施、若如所責、既隳于彼之陷穽、蓋先火其巢窟、擒其將、卒然求勝、危哉矣、

第九偶像章　批曰、印土曠世、有梵天韋紐天等之名、人多尊信、悉遠多太子、爲嬰兒時、從臣褓抱臨之、天像不勝于坐、頓倒覆爾云者、乃彼之天主是也、今之拜像家舊儀也、耶蘇曰、不拜者、按恐是後世所傳云云、爲說只辨而已、予有別說、今略、再破文中、出明概論、所言而按彼既宗无像、我當以有像難之、若假像非眞之語、自似資彼說矣、不引爲是、蓋邪徒已下無難、

第十淨土章　批曰、雲棲持論高矣、深矣、於其知之信之者、明著无疑、其不然者、有无屬

茫洋、不如、舉斷然有淨土之文、以斥彼之斷无、

第十一觀音章　批曰、蘇軾語、藥山語、非會理之人、則不能領之、彼而讀之、謂佛者作辨耳、所謂對牛羊皷琴惡也、不皷爲優、凡說菩薩、有二種、一曰娑婆出現、二曰淨土出現也、娑婆出現者、如文殊彌勒是也、本姓種族、在經而存焉、其淨土出現者、觀音勢至是也、以不係此土、不說本貫、適有說本緣、僅是一二耳、既以自在爲名、則其現男女身沙門波羅門身相者自在也、或現佛身菩薩身、聲聞緣覺身相者自在也、或現鬼畜地獄身相者自在也、或現梵天帝釋四王身相、亦自在也、或現天主造物身耶蘇代贖身相者亦自在也、非如汝所執一天主、耶蘇處不自在之地、以不自在之身、延頸張目、適見孝子忠臣、拜佛像、服儒教、瞋怒嫉妬、不知愛其善、欲令此墮于地獄之殘暴也、欲知當讀普門品、

第十二世界章　批曰、六群比丘、糟粕未詳事實、爲示之、按近來洋學盛大、就中於天文地理、實驗測量、尤究精細、佛說屬諸世界悉檀、所以不須微密也、近頃有曆象篇、純主張佛曆、僧家所謂、大半準繩于此、予之知友、肥後僧某、善于天學、謂予曰、普寂創草佛曆、盛功可稱、而於其究理、疎陋多端、未足當外敵也、予固暗于曆術、苟下、直致摸象之譏、故於此一章、且止所言、

第十三諸天章　批曰、曾聞正謬所謂、曰、印土諸天之說、早既出于佛前、佛後出世、只前

說教之耳、前後合併、屬架虛憑空之說、而再破之中、先出阿羅伽閻二仙生天之事、後引菩提心論、以彼見此、先後揮屬于烏有、未足言而伏彼也、因名所謂、非有爲證不定之失、彼既設機巧、不可我不遽變策革符也、

第十四地獄章　無比

第十五瑜伽章、第十六持咒章　批曰、瑜伽持咒者、即身成佛之法也、應驗利益者、其末技而已、按如西來三藏有神驗、是瑜伽持咒兼併之人也、如元僧事實及遥羅國所爲者、僅是咒家耳、非瑜伽者也、耶蘇適見咒印爲卑劣、採般若爲悟理者、當時支那僧將印咒瑜伽之法、以爲釣利名之謀、其事與吾皇國今日沙門相似者、殆多矣、於此乎、外道侮慢、門徒厭惡、閻浮佛法蠹敗追日、甚矣悲夫、

第十七宗門章　批曰、彼學破鏡之譬、破明鏡臺之說、以主張天力明復之義、初破、配劑不當、再破、砭針亦難、通徹病入膏肓、執匕勿輕、二祖斷臂之說、纔出于傳燈錄、是誤傳繞記所錄也、雲接崇行錄所言理必然、事固不然、邪徒抗言、吠聲也、後世逃之者、逐嗅也、學者可知、

第十八止觀章　批曰、止觀者、佛家大路、不可一日離者、在經論而可觀焉、天台有止觀之作、依之也、外人未詳止觀有本末、直以天台証止觀者、三止三觀義全惑標目也、欲令彼

知之、則當先就小法、敎舍靡多毘婆沙那、蓋對彼詔之、求卵於時夜、投隋珠於暗也、非管無益、遂培其失、按心要已下至大綱削而可也、

第十九涅槃章　批曰、証涅槃之理、在經論、稻麻竹葦、輙然須末師之語、甚覺其慊、華嚴經文是應証菩提之義、疎於証涅槃之義、外人以涅槃爲不了義、以淨土爲誘引假設之義、固非混同言之也、而破文中以淨土即涅槃之理、對之者、立献不當、事理混濫、令彼讀之、霧遊觀海、倍失方途、初破中切有可議者、今省之、

第二十無常章　批曰、破題以未分未生之无躰、証四倒之無、若謂此譬說、尙可也、若爲此推究之實、則不可也、凡佛敎之中、說無常或无躰无性等之法、悉就有以訓无、求有就無訓無之說也、俱舍說无常、皆就有三科之法、而說之也、唯識說依他圓成、就有偏計所執而說之也、天台說即是就有十界依正而說之也、賢者說無盡、就有塵々法界、窮按、未分未生、語似屬斷无、古人不多言之者、恐有濫也、縱令拈出、任手事涉泛濫者、豫防須用意也、曆上稱明通堅確、予不與之、外人本義、固許无常、不許無体、初破并再破共多以常之說証之、詰之、反似扶彼之談柄、因明所謂相符極成、相近矣、庶幾具說吾之無常、且无躰之理、令彼天主永離斷常之邪見、破文雖非無理乎、竊覺痛快、未徹于骨、故喃々作贅言、

右再破二十章、實謎法金湯也、而金湯益可堅焉、雖蟻穴、乎不可不防也、予濫作剛堦之說、偏在于鄭外侮而已、所言有苟差、敢請勿惜詰責、慚赧稽首、

壬申正月望　　橋東沙門　行誠拜白

上人自畫賛（二）

かはばりの
それにはあらて
何事も
さかさまにみる
人のわはかる

已巳四月望、花頂福田寺主來東行、寺主來予門人也來示同德會之盟書一卷、予驟節曰、有之矣哉、我黨君子、未有失志者、夫如是耶、乃揮筆瞞十論、以贈諸福田上人、東京沙門行誡識

同德論

護法公論　第一

三里之城、七里之廓、環而攻れども拔とあたはざるは、金湯の固め防禦の備はればなり、我法城は三學をもて城とし、五停七覺支もて廓となす、縱令四百億の魔あつてこれを攻るも拔とあたはざるゆゑんなり、印土に大小を拆ち漢土に權實三一を判し、本朝に教禪顯密を區別すれども、いはゆる壘營いよ〳〵張て城廓ますます〳〵かたきなり、古に曰く、護法淸辨相破相成といへるこれなり、天魔猶不能碍、人厄何かあらん、印土の惡王菩提樹を伐る、一夕にして生ず、佛足を削る、隨て彰る、西域記にみゆ、漢地の三武の暴跡、愈撲てば愈盛なり、我の守屋の厄、伸んと欲して暫く屈するなり、法運の通塞は時あり機あり、佛化の隱顯因あり緣あり、其有るの必是にして無の必ず非なるに非ず、末法万年一毫殘すとあたはず、其無き必ず是にして有る必ず非なるに

非ず、九十六種の間に於て悉多太子出現し玉ふ、其見るべき人あれば滅後猶佛世をみる、常在靈山と說けり、其見るべからざる人あれば佛世猶不見不聞なり、舍衛の三億あるに非ずや、是佛外に求むべからず、是心是佛と說けり、是法何をか指す、不可以言宣と說けり、これを不二法門と說き、これを般若波羅密と說く、もと所護の法なし何れの處にか能護の人あらん、苟も無護をもて無法を護らば、邪魔、百千劫石を磨すとも一毛之を損するとあたはず、護法の公論この外に言ふべきとなし、或曰、子の談たゝ理是れ示す今日の護法は現前の事相に關す、今一新の制に乘じて外道佛家の舊式を壞り、白毫全福今方に廢せんとす、果してしからば宗々可護、堂塔可護、僧官可護、食祿可護、一もこれを論せずと、答て曰く、宗旨伽藍は人の作る所なり、僧官爵祿は人の與ふる所なり、金剛經に云はずや一切有爲法如夢幻泡影と、强てこれを防護して失はさらんとするは、所謂偏見にして亦貪欲なり、苟も貪見を守るは唯凡夫世俗のみ、我佛法にあらず、今國窮し家困す、其有る所を見てこれを貪る、猶蜂の花を吸が如く、鷹の雀をうつか如し、護法の辨深くこれをみてこれを惑れみ、其有るものを施し其欲する所を與ふべし、經に曰、无衣與衣、无食與食、无舍與舍、无國與國云云、頭目髓腦猶これをあたふ、國城男女豈これをれしまんや、尸毘太施のあと欽てこれを追ふ

べきなり、古曰、有道者視爵位如湯鑊、見印綬如纓絏、視金玉如土糞、視華堂如牢獄、世間之士猶この操節あり、今夫出世の學人にして、瑣々の爵祿何を養はんとする、數頃の堂舍何を掩はんとする、吾黨もとより、居すべきは樹下石上、衣食は三衣瓶鉢、夫猶樹下に三宿を禁ず、苟も宿食の餘りあるを誡む、何ぞこれを惜んで防護捨てざるとを論ずるや、これもし護と云はゝ貪護にして法の護に非ず、衣食を執して眞の法を惜むにあらず、維摩の爲めに呵せられんもの知ぬべし、恐くはこれ破法にして護法に非るものか、或か又曰く、精舍は白法の住持する所なり、僧徒は弘通の正器にあたる、古に云はずや、法獨り弘まらずこれを弘る人にありと、今子の所論は上位先賢の勝跡のみ、今に在ては去年の舊暦なり、今也古佛の遺法は名山靈地に在て存す、傳灯弘通は衣食を籍て方便とす、これを奪はれたらんには果して佛法何れの處にか存せん、深く防護を論ずるは是れか爲なり、諺にいはずや、佛法もはら念佛と、飢而念佛せん我はあたはずと、予笑て言て曰く、方今寺を焚かれ食を奪はれたらん我まさに无邊無際の財をもてこれを汝に與へん、欽てこれを聞け、法花曰、法空爲座、慈悲爲室、忍辱爲衣、又曰、醍醐、上膳、甘露、法味と、汝未來際を盡すとも受用はつくすとあたはずと、或問の人眉をひそめて去る、護法公論畢る、

王道とは忠孝の道をもて國を治むるなり、仁義の道をもて民を安するなり、忠孝仁義なきを不善の國と名く、國善を務めざれば民安からず、古に曰く、唯善以爲寶と、欽まさるべけんや、佛法は斷惑證理を法とし、善惡因果を教とし、戒定慧を道とす、もと純善無漏の法門たり、これ善道にして不善の道に非す、經曰、諸惡莫作衆善奉行と、佛道もと不忠不孝を誡む、王道忠孝と相合するなり、六度の中檀戒あり、王道の仁義とれなし、其行ふ所遠近大小あるのみ、善躰これ一なり、並ひ行はさらんと欲するもあたはさるなり、是を以て印土支那の國王佛法をもて必ず資治の一端に備ふ、我にありては桓武の朝、傳教大師奏して曰く、王法盛ならば我山も盛なり、我山盛ならば王法も盛ならんと、私かに惟れば王政漸衰へたるに從て叡徒兵器を弄す、自衰滅を享るものあり、もて知る、其道の衰るに當て並へ行ふとあたはさる也、何そや、王室不善に流る、其佛法をして至善に至らしむるとあたはす、佛法自ら不善を行ふ、其王室をして善行あらしむるとあたはす、夫國善行を好まば必佛法を行すべし、道明に民の安からんもの實効あり、試に仁王經をみよ、國佛法あれば神祇これを守ると說く、摩訶般若を披け、般若のある所諸天神祇これを守ると說く、佛道を信せすんばやむ、苟

も信して弘通せしむる國は、王道佛道必並行せしむべき也、所謂道並へ行はれて相もとらすといへるこれなり、或か曰く、國を治むる唯王道の一にして足れり、何そ佛道をかからん、さらば佛道はこれなくもとのかけさるなり、況や今の僧者多くは遊民逸士のみ、織らして衣し、耕さすして食す、これを驅て農工に就かしめば却て治平の基ひを固するに非すやと、答て曰く、王道とは忠孝仁義の外なし、即神道これなり、儒道これなり、忠仁は我か三學これなり、即神儒佛は相離れさるなり、爾ば三道は即王道ならすや、何の憎む所あつて佛道を捨てんとするや、果して其形を殊にするより、其衣食を異にするよりのとか、其殊異を尤かむるは君子之を耻つ、これ僅かに跡に泥みて其實を忘れたるなり、論するに足らす、逸民遊惰の責は隨分きこえたるとにて、吾黨もすこぶる耻る所なり、但しこは別に論すべきとあり、今の條に係せされば省く、抑道は行履をもて義とす、蓋其行く均しきと能はす、海陸路を殊にするか如し、海路は渡るに舟をもてすべし、陸路は行くに牛馬步行を用ゆ、我神儒大かたは現在一世を說く、過未兩世を說かす、佛道は三世を說く、其れ廣く遠し、知らさるものはこれをあやしむ、是れ其智力の及はざる故なり、三世の論別に議すべし、夫海陸二路は並へ行べし、三世の教は並ひ行ふへし、疑にたらす、或人曰、資治の用なきものこれを

廢すべし、佛の過去未來は、現在に无用なり、僧徒口誦もて己れか衣食を資くるのみ、尸素の罪これより甚しきはなしと、答曰、眞にしかり、今の僧徒、尸素をもてこれを尤むる時は辭するに由なし、己れも亦ひさしくこれに慚つ、爾るに至治を資るに表裏あり、陽治は世人これを爲す、陰治は佛法これを爲す、猶日月晝夜其時を資くる各殊なるが如し、全く資治の用なしと云へからず、果して爾らば必すやこれを廢するの議は至說にあらざる也、尸素の罪は其各人の過なるのみ、道の失に非ず、人をもて道を廢す、君子は之を爲さず、且夫れ佛法はもと資治の爲に說きたる道にあらず、今人資治の爲にするは佛道の餘光のみ、佛道の本色にあらず、並行の語、實には佛者の耻る所なり、此事別に論すへし、今は之れを省く、並行論畢る、

三學研究論　第三

三學とは戒定慧か、夫れ佛者の必研究すべきと今に始めたるとに非す、而して世澆季に屬し、三學殆と跡を拂ふものに似たり、偶〻これを學すと云も、學の言、たゝ文字を明かにするにありて、行事証悟に於て惟之を高閣に委ぬ、甚た悲むべし、世俗尸素をもてそしるこれが爲なり、尤慚愧すべし、今の人やゝもすれば、大集經の後五百歲鬪諍堅固をもて口實として、幸にして三學の責を免れんとす、心地甚卑しとす、自ら

省みてはつべきなり、或か問ふ、後五百年鬪諍堅固もとより前佛の懸記なり、三學无分は祖師の活眼なり、澆季の凡夫むしろ爾らさるとをえんや、其相似の形貌あるも徒らに猴冠狼衣のみ、虛飾却て實行を害す、無きの有るにまさるにいつれ、答曰、夫佛法とは覺者所覺の法則に名つく、覺とは覺悟覺了即ち能覺なり、何をか能く覺す、戒なり定なり慧なり、戒は以て身を束し、定はもて心を收め、慧はもて其究竟して所得の知見なり、所謂五分法身と名くるに至るものこれなり、從凡至聖この外に佛法あるとなし、苟もこれを除けば佛法と名つくへきものなし、佛祖の勸贊する所唯これにあり、他あるとなし、隋唐已後時末代に屬し、すこしく三學の衰弊をみる、爾れども華天密禪之諸祖これを省きて說かさるとあたはす、我淨土家專稱の一行を弘む、爾れとも唐の善導傳云、護持戒品、纖毫不犯、我元祖は自ら三學无分と稱すれとも、大乘戒に於る露地七代の正統を繼き玉へり、其定學に於るも二祖ともに兩三昧を証得し玉へり、戒定の正因既に如是、解脫知見も亦從てこれあらん、言をまたすして可知也、末法三學无分の法語を珍襲して、專らこれをも宗軌とするか如くいへるものは二祖の意に非るなり、亦三世の佛法に背けるなり、亦无慚愧の弘法なり、不可不學也、相傳の圓戒益々擧揚すべし、念佛三昧の法門愈行用すべし、其事鎭西宗要

にみゆ、戒定兩道再興すれば解脱知見其中より涌出せん、強て三學无分とするものは自ら黷れるなり、古曰、經律論は則戒定慧なりと、苟三藏を學するもの豈三學を傍觀するとをゝんや、三學研究論を畧述す、

正變二道論　第四

正變は權實の異名なり、又眞俗二諦と名つく、儒者はこれを經權と云、即ち常と非常とに處するの名なり、正とは常なり、万古不易の名なり、變とは權なり、隨時不定の目なり、若小乘に就て云はゝ四諦十二因緣を正教とし、人天戒禪等を變教と云、若大乘に就て云はゝ、諸家各正變權實を殊にす、其所宗の經論を採て正とし、實とし、所餘の教釋を權とし變とす、天台、賢首、慈恩、幷に密禪等皆同し、畢竟してこれを論すれは一音異解の法門、一字多含の妙道にして、皆是般若皆空の言說、決定して是正是變、是權是實を論了するとをえさるなり、蓋し法門は不可得也、人に在て強てこれを名くるのみ、今正變を論するも且く亦内外の人機に當てゝこれを示すべし、夫正とは佛法の正道、戒定慧、六度、四諦等、宗々弘通するものこれなり、唯此一事實なり、餘は說くべきに非す、示すべきに非るをもて佛家の清操とす、何となれば若此外にあつて餘說すれば皆戲論にして眞論に非すと佛も誡玉へり、然るに今方に變道の目を票して

もて論柄に備へんに一言試みに云はすんばあるべからず、變とは變化無謀時に隨て定るとなし、水の器に從て方圓を異にし、權衡の物に循て輕重を均ふせさるか如し、夫水は正なり、もとより方圓のあつかるとなし、方圓は器の變するものなり、權衡はもと輕重にあつからす、輕重は物の生する所なり、正道は无言絶相なり、機宜自ら種々の道となる、古に曰く、九十六種は皆古佛の法門の變する所なりと、又曰、聖人之法久而爲弊と、是變より變を生し、變々綺互して遂に百千無量の變道を生するに至る、尤おやしむべし、尤もつゝしむべし、今方に變を示すに三種を建立す、一に勝變、一に劣變、三に邪變、

變三〈勝變 劣變 邪變〉

其勝變とは神通變化もて解脱の法門を示す、所謂三十三身普門示現の如きもの是也、これ正に徹して變を示す、即本に契て跡を現するなり、故に本跡雖異不思議一也（上云）これ地上の菩薩、不二法門を了達して作爲する所にして、遊戲三昧と名るものこれなり、凡下にして苟もこれをならはゝ、所謂西施の顰を倣ふものにして益〻其醜を

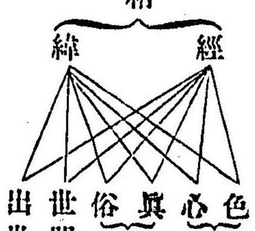
加ふるのみ、又烏の鵜を學て水に溺るゝ禍を釀す恐るべきなり、愼むべきなり、これを勝變と名つく、二に劣變とは佛の滅後三寶に於て住持の名を得るものこれを三寶の變と名く、律中に說く、末法に入て袈裟白に變ずとこれを袈裟の變と名く、近世宗々袈裟の色體量各異なる、果して、佛說の懸記し玉ふが如し、今時宗々寺門を殊にして其人に非るものを住せしめず、恰も在家俗舍の居室とことなるとなし、これを住處の變と名つく、阿闍若所の制に背けばなり、今時宗々大半非時食す、齋食を守る者甚少なし、これを食堂の變と云はんのみ、此變に基して宗々各變を專にす、變々相競て遂に變せざるものを笑ふに至る、方に變じて其究竟するとをしらず、古に曰く、正極て變を爲すと、實に爾り、窃に以みれば、正實の極る所權變こゝに現はる、これに、反するに、權變の極る所必ず正實に歸すべし、法花を攝末歸本法輪と說くゆゑんなり、菩薩の變現法みなこゝに在て存す、變の勝たるこれによるなり、凡下の變はやゝもすれば變亂に入る、其往て歸るとを知らされはなり、變を劣と名くるこれが爲なり、第三邪變とは、九十六種これなり云云、夫變は隨宜の法門なり、百方定むべからず、唯正を離れず、正に歸するを意とす、九十六種の外道たる他なし、唯これを忘るゝによれはなり、若夫勝變は菩薩の遊戲三昧なり、今大力量有て此變道を行ふものは我

除を容るゝこと能はず、劣變は業現なり、邪變は邪敎なり、其止むとをえずしてこれを行ふものに於る我はくみせず、正變二道論畢、

經緯論　第五

經は織の縱絲、猶徑路の通せざる所なきものゝ如し、緯は織の橫絲、龍文鳳文鳳章あやをなすもの則ちこれなり、經緯相緣て一段の錦繡を織成するゆゑん也、古より經緯を別注して物に比す、今も亦これに依て我言ふ所を說かんとす、一に色心に就て說き、二に眞俗二諦に就て說き、三に世間出世間に就て說く、尙多くあるべし、今且く三說を作る、

經緯綺互三相



一に色心の經緯を說かん、心は衆法の根にして一切の色これに依らざるとなし、故に曰く、一切唯心造と、又曰、三界唯心造と、唯識宗專らこれを說く、夫心は十界に變し

て其性を改めず、色は十界に渉て其相を異にして、經緯判然として見るべし、註釋を待たず、二に二諦に就てこれを說かば、此に二種の別あり、所証の理に約せば、眞諦を經とし、俗諦を緯とす、所見の事に約せば、俗諦を經とし眞諦を緯とす、慈恩の眞俗八諦の釋文妙にこれを論說す、みつべし、三に世間出世間に就てこれを論せば、これ亦綺互一ならず、或は出世間を以て經とし世間をもて緯とす、般若を說くが如き、般若波羅蜜あるが故に人天五戒十善ありと、是れ世間は出世間より成就し來る所なり、法門甚深凡下の思量をはなる或は世間をもて經とし出世間をもて緯とす、涅槃經に舊醫客醫を別つが如し、舊醫は世間の十善輪王の治する所なり、客醫とは四諦、十二因緣、六度、則ち佛の說く所なり、輪王治世に乘して法王深法を說き、以て解脫の文章を彰す、世敎は出世敎の爲めの大經にして、出世敎は世敎の爲めに錦綺眼を耀かすなり、五戒これが爲めに色を增し、十善これが爲めに光りを倍するに至る、則ち出世の敎法、世間に流布せずんはあるへからざるなり、こゝに人あり、天品の聰明なり、師あり善く導て百家の學を修めしむ、美質學に由て倍々すゝむ、遂に宰輔の職に登り、天下を經緯し、治を千歲に致し、敎を萬年に傳ふ、孔孟聖賢の類是なり、但聰明にして學はさるときはこれを用るに、躬ら面墻のそしりあり、所謂不學之過なきとあたはさるなり、輪王の十善は天品の如し、至善尤も稱すべし、これを修すれば人天の果報得つべきなり、若夫解脫の道に至ては四諦六度に非れは及はさるなり、爾れば則ち此佛道あつて後ます〳〵十善の光りをみるものもて知るべし、出世間の世間を資くるこれが爲なり、夫唯經の一道もて匹をなすとあたはず、必ずや緯をまつて五采の錦繡をなす、世間の十善其相淡薄、其敎粗略なり、久して磨滅せざるとあたはず、經中劫末を說くに於る、唯貪瞋の相を說て十善の相を說かざるを以て知るべし、法滅百歲、尙佛法のあるを說く時は、劫末の善道は唯我に在て存す、世間に在ては存せざるなり、存せざるに非ず、其善微薄、隱れてあらはれざるなり、然れば則ち善道にして世間に行はんとせば方に佛道を培養すべし、佛道盛大なれば諸善これより生す、人誰れかこれをあやしまん、我皇國にれける、方さに今其經緯を論せば、王道をもて經とし、儒佛二道を以て緯とすべし、王道はもとなり、儒佛二道は末なり、後來りて顯はるればなり、而して經ひとり存せず、必ず緯に由て匹をなす、我佛道及ひ儒道にれける、隱仁欽明の朝より今に至り、數百千年を以て資治の道となる、夫の儒と相並んて相耻さるもの佛道これなり、我邦もと質直无爲、太古の風を存す、もとより美質なり、儒は堯舜孔子の聖法にして人を治するの至要なり、もて用ひずんはあるへから

す、佛道は三世了達して善惡應報をあきらむ、近して勸懲を敎ふへく、遠くして解脫を得せしむべし、是の兩道は天經地緯の大規則也、學ひすんは止なん、苟も學に志すもの、此兩道を捨てゝ何にか由らん、出る戸に由らさるものなし、學ふこれに由らすんは人夫れ道なからんか、无道の國は治るとあたはす、國朝の美質をもて此道を學す、治平眞に万年を期すと云ふべき也、爾れば則我の兩道は國の大規則にして、龍文鳳章と稱すべし、唯經にして緯文なき錦繡いつくんか存せん、試みに儒佛兩道を除ひて而後　我皇國何の文章かある、心を平かにしてこれをみるべし、これを思ふべし近頃國學と稱するものありて、儒佛を祛けて、ひとり皇國の古學を唱ふ、我を愛するの志誠に愛すべし、賞すへし、國に彼我を隔つるより人に是非を定む、漢土の聖賢と稱せらるゝ人を躾舌蠻夷の小類とし、其の非を搜鑒し其是を掩閉して啄を皇國に容れしめさるの地をなす、佛敎にれけるも亦しかり、これ皇國にあつて異敎の擴充を壓する方便にして、且異敎の弊を矯むる謀なる可けれとも、これによつて人聖敎を蹂躪するに至ては、却て皇國質直の古風にそむく者にして、聖賢の大道を蔑視するの我見に非すや、其非は質すべし、其是は擧くべし、何そ獨り非々の論に黨して是々の議を辨せさるや、試みに思へ、國朝二千年來の王臣庶人みな恐にして、今日の

（二万九千三）

人獨賢なりや、古人賢恐相交はれり、今人獨賢のみに非るなり、昔者秦始皇焚書坑儒、自ら謂らく、古聖と稱する者視るに足らす、今命を鄙しめ古書を崇ふは道に非すと、我より始めて道を作るなりと、自ら始皇と號す、挾書の命を出し古聖を毀廢す、古今を壓倒して天下を獨判す、當時にありては英傑此に類するものなしと云はん、二世を終らすして其國を失す、是自ら大經を爲して其緯の織成を失するなり、匹反夫れ何にか在る、蓋し皇國は質勝、文の國風なり、支那印度は文勝、質の國風なり、今也　皇國に儒佛ある恐くは文質彬々たるの國と稱んか、宜なるかな昔人此國を君子國と名くるや、今の人やゝもすれば佛敎は云云、儒敎は云云、我皇國別に神敎あり云云と、唯神を宗ひの情は尤も貴むべし、其理義を說くに至て儒佛と違ふと云はゝ眞の神敎に非るなり、神は直道を示す、儒佛亦不曲の道なり、直而不曲の三道何の違ふ所かある、互に其弊を非するは君子はとらす、苟も其弊は改むべし、其非は正すべし、過て改むるに憚らすと云へり、予別に神道の辨論あり、今の用に非ればこれを省く、經緯の論こゝに至て止む、あゝ言論錯亂、文不爲章、義理織成不及布葛、機杼之拙甚耻、非其

（二万九千四）

華夷を論するに二種あり、一に蠻夷各國の形勢、二に皇國都鄙の形勢是也、予未た各國の形勢にくらし、故に今これを言ふことあたはす、こは知るものこれを論すへし、皇國都鄙の形勢を論すべし、形勢は國風なり、古へは詩をもてこれを知り、歌をもてこれを知る、釋迦佛の出世し玉ふや、十方世界の佛其國の菩薩を遣はして問はせ玉ふ言はに、世事易忍否、衆生易度否との玉へる如き、又娑婆世界の衆生頑冥難化なとの玉ふ、皆是堪忍世界の形勢を示し玉ふなり、皇國の古事は暫く措く、近頃に至て治平の餘澤、文化大に開らけ、野人女子と雖も文字をよまざるものなく、三道の學者、千古に耻さるもの輩出す、實に一大文明と稱するに足れり、これに加ふるに近ころ各國輻湊して通信互市の法を定む、爾しよりこの方人新奇を好むの情態あり、やゝ馴れ親むより、衣服言語器械什具みなこれに習ひて、風俗殆と華夷を辨せさるに至る、其意攻伐爭鬪を危みて、早く彼れか情を知らんが爲なれども、彼れが狡黠機知の工、遁に我れに勝りたるものあるに眩惑せられて、我れ必す彼れに及はさるものと定むるものあり、一人これを首唱して万人節を擊て之に和し、布て國人に及はゝ萬方彼れか指麾に任せんとすべし、いはゆる習性となる所以なり、各國互市のとは、印度のむかしに在ては、例あるけに經中處々に說き玉へり、爾れとも後の世にありては

夫も絶たり、而して近來西人洋海の通路をひて、今は各國これあらでは叶はぬとになりしより、互に其國風をも學ふことになれるなん、學は博くなりたるとも云へし、而して專ら格物究理の工なることを庶幾するより、己れに反て之を求るの心を失するとあるべし、是勢ひに左右せらるゝの極、おのつから內省のいとまなきに至るの勢あり、而して彼れか說く處を聞くに、孔門聖敎と雖唯人の作る所として、これを天主に比すれば議するに足らずと云、釋迦法は天主敎をぬすめる者にて、輪廻の說は貴むに足らすと云ふ、儒佛跡を拂て獨り天主を尊崇せしむるに至る、此敎もし皇國に入らは、皇國の神祇と雖とも、之を蹂躪蔑視輕淺するに至らんと掌を指して視るか如し、而して是も亦新に馴れ奇を好むの人情、彼の敎をもて儒佛に代んの意生ずべし、これ孟子にいはゆる其妻をわするゝものにして、遂に其身をわするゝの類に非すや、これを外馳のいろかはしきに勞して內省を忘るゝに喩ふ、國家の禍胎、こゝにさすとを知らさるものゝ所爲大凡これを不出、人それつゝしまさるべけんや、佛經に說く欲界は散動の地なりと、眞に然り、人は唯外馳を好みて耳目を貴ふの僻あり、己れに反し內に省るとをわするゝのやすきものなり、聖賢の人は專ら之れを敎ゆ、孔子の三省廼己、佛說の諸禪波羅蜜、すべて其內を實にするとを敎玉へり、今の俗、

すべて內省を意とせす唯外馳是務むるを以て天下の形勢とす、其故何ぞや、內に和同せさらさるの患あり、外に各國交通の煩あり、宜なる哉、外馳にいそかはしくして內省に遑あらさるとを、此の忽々の際に當て、或は耶蘇、或は天主、百邪定めて混入せん、不可知也、門に關なく家に鎖なき盜賊覬はさるとをにさるが如し、廟堂の達士こゝに意なくんば、顎覦の賊國家の間隙を伺はさるとなきことを得んや、豈曾儒佛神を劫奪せらるゝのみに非す、隨て神器を搖さんとするの勢に至るべし、恐れすんばあるべからす、備へすんばあるべからす、天下を經倫するものは尤も此の形勢を察すへし、三道に關係するもの亦以て此形勢をしらすんばあるべからす、因循苟且悠々日を渉らは禍蕭牆の內より起らん、古曰涓々不塞將爲江河、熒々不救炎々奈何と、今也四方の形勢涓々熒々のみならす、苟も時を失せば江河炎々救ふとあたはさるに至らん、守禦を務むるもの等閑の看をなすと勿れ、華夷の形勢大概かくの如きのみ、其都鄙中隅の細故に至ては、臨機應變もて所置を定むべきをや、形勢論をはる、

舊弊一新論　第七

弊とは塵埃の如し、新とは拂拭の如し、夫明鏡不磨れば久しく曇をなす、物の塵埃に汚る免かるゝとあたはす、是をもて時に拂拭を用ひすんばあるべからさるもの、理

自ら爾るへきなり、本師如來の法門は明鏡の如し、百年にして大天の五事を生す、部執これより派して各々所誦を宗とす、佛教の曇翳始めてあらはるゝ也、爾れとも微雲明を損せす解脫彩を彰はす、而來大小半滿わかれ顯密教禪岐々、彼の金杖を折り布帛を斷するものにて、皆是一水の異派と稱すべし、猶涇渭名を殊にすれとも潤澤さす大川は草芥を止めす、其激勢の敵するとあたはさればなり、末派小溝に至ては滯芥流れて塞き混濁足を汚す、時に通決して清めすんば、汚物溢れて地を漂はすに至ん、これ拘泥停滯、水力勢を失すればなり、蓋し惟みれば正法の教道は溟海の如し、苟も惑業の死尸を宿さす、戒定明かにして解脫滯るとなし、經に解脫堅固と說き玉ふゆえんなり、像法の教道は大川の如し、苟も我と法との草芥を停めす、正見明かにして定慧並行はる、經に三昧多聞堅固と說き玉へり、末法の教法に至ては、喩へば細流小溝の如し、細流は崖狹し小溝は底淺し、設ひ大力の人ありとも海濤川流もて容るゝとあたはす、世澆末に屬し人浮薄に流れ、愛見塞滯して業道岳を積む、法水混濁して海潮音閼す、此中に在て躍るものは蝦蟆游くものは水蛭、飛ふものは蚊虻、安んして歌ふものは蚯蚓なり、我黨醜態蝦蟆の如し、飲餐を貪ると蚊蛭の吸噬他かさる

如し、安然恥ぢず笑談日を終ふ殆と蚯蚓の安處して善く歌ふものと相似たり、安處して歌ふものは尚可なり、螻蟻は千丈の堤を壞り、土龍は十尺の虚を坎す、細流小溝これが爲めに破壞するに至るとあり、經に曰く、後の五百年は鬪諍堅固なりと、眞に今日にあつて懸記面り視るか如きなり、末法の敎法今にして凡一千餘年、往は諫むべからず來者は逐ふべし、通決一洗せすんば堤崖方に壞れんとす、弊豈舊のみならんや、今より後も新弊倍々多々ならん、一新の期會に乘して一洗の功を務めんと方さに今日にあり、本題の科目尤急務たり、此中何れをか後にせん、急緩處を失せば功寡損益あり、急緩取捨論の中に在て論せんとす、舊弊一新論概畧如此、

急緩取捨論　第八

古に曰く、事先後あり業終始ありと、眞に以みれば、急緩所を以取捨位を差せされば、行として躓となく居として安んせさるとなし、苟もこれに反すれば安危位を失し差躓立ところに起る、愼ますんばあるべからず、夫れ何をか急に取り何をか急に捨つ可き、曰く、急に捨るものは舊弊なり、急に取るものは一新なり、一新とは何そや、曰く、復古これなり、いはゆる溫故知新の謂なり、或か曰く、一新とは革命革命の謂なり、復古の謂には非るなり、古未た必す賢ならす今人必す愚ならす、孟子曰、五百年にして聖人出つと、又曰、後世畏るべしと、其古によらんより我より古ならんと欲するはいかん、答曰へらく、始皇は天下古今の豪傑なり、古聖をものゝかすとせすして狹書の令を出し、民をして昔しをわすれしめんとす、自ら始皇と號して我より古をなす、而して二世にして國を喪す、古聖を蔑視するは君子之を爲さす、既に覆轍の跡をみる、前車の誡めを思ふべし、今や世澆季薄德、其道と稱するも多く虚飾に流る、實用は晨星の數ふべきなり、希くは天下の諸宗其虚々を除て其實々に還るべし、虚を除くは弊を矯むなり、實に還るを一新と名く、何をか舊弊虚飾と名つく、曰く、戒定の名ありて戒定の實なく、解脫の名ありて解脫の實なく、袈裟の名ありて袈裟の實なく、伽藍の名ありて伽藍の實なし、界内の宗々概此弊風をなす、大廈の倒るゝ一木支へかたく、洪河の決する隻手防き難きか如し、是れ何の故そや、内眞實なきより外虚飾にわたるなり、唐の善導散善義の文に、外現賢善精進之相、内懷虚假いへるこれなり、内懷は尚可なり、外虚假を現するに至りては慚愧豈に耐へんや、今方さに外現の虚飾を除かば内實自ら彰るべし、夫宗々の舊弊其事二三曾ならず、我か外見知り及ぶ所に非す、各々其宗徒の賢なるものありてこれを選擇し、これを疏せよ、忽せにすること勿れ、因循苟且、日を延べ月を渉らば、外寇覬ふとあらん、古に曰く、先則征人、と急遽こ

れを行ふべし、禍蕭檣の内に起らばこれを防くに方なからん、我れは吾宗内の弊たるべきことを議す、其方凡そ大件七條細科廿四項となる、七條毎條一冊、合して七冊の書を綴してこれを評論せんとす、既に筆を起す、未た稿を脱せず、緩急取捨みな其中にありて存す、急緩取捨論畢、

器識論　第九

人の器識は、古哲之を士之致遠當先器識而後才藝といへば、器識とは天品の德行をいへるなり、佛說の業報因緣の感する所にして、人爲匠工の習て彰す所に非す、而して其質をうけたる朴質忠直のものあり、寂默沈靜のものあり、風流温和のもの、豪爽不羈のもの、嚴峻剛毅のもの、才氣飈發のもの、暗弱佞媚のもの、詐術譏慝のもの、放辟邪移のもの、人々殊異、猶面の同からざるが如し、良とに以るに、其美質善性のものに非れは、教を稟て道に循ふと決してあたはざるなり、苟も性を醜惡に受るものに至ては、聖賢親ら教るもこれを奉するとあたはず、奉するとあたはざるのみに非す、却てこれに違逆す、昔は象の舜につゝしまず、提婆の世尊に背むくか如し、在世の五百の聖者、鄔魯の十哲七十子の如き、此の美質ありて此の名教をうくるなり、蓋佛教は三世諸佛の洪範、從凡至聖の大道なり、故に佛世尊に非れはこれを說くとあたはず、

禮樂伐征天子より出つるが如し、迦葉阿難に非れはこれを稟ると能たはず、斧鉞を執て四方を征するが如し、付法藏經の廿三祖傳に誤るとなき以て見つべし、夫れ瑠璃の器に非されば以て獅子の乳を盛ると能たはず、強てこれをもれば則ち壞るれば、向上の質に非ればもて佛教を傳ふると能たはず、強てこれを傳ふれば驚怖して容るゝと能たはず、苟もこれを容れば横計して邪徑に趨る、おそれざるべけんや、つゝしまざるべけんや、佛鹿苑に遊て十二年猶大乘を說かざる者このゆゑんなり、佛これを說く容易ならず、弟子豈輕忽にしてこれを聞とをえんや、蓋し其道は正明廣大なり、其教は深密精細なり、其行は嚴肅方正なり、暗弱佞媚、放蕩邪僻のものゝ敢てうけ修むる所のものに非ざるなり、沈靜忠直剛毅撓まず守操持節凜乎猛然一歩退かざるものにして始てこれを稟くべし、始てこれを行ふべし、これを瑠璃の器に喩ふ、法水を瀉ひて壞れざるをもてなり、佛者これを名けて法器と云、瀉瓶相承の名これより出つ、苟かに惟れは、佛法は僧に非されば任持するとあたはず、故に曰く、法獨不弘、弘之在人と、人とは法器これなり、此器若し欠漏せば獅子吼何にかよらん、法水注せすんば世間枯渴せん、苟くも法器を擇ふべし、傳法の原基なれば也、今方に試みに其器識を議せんとす、此に三種あり、上器なり、中器なり、下器なり、何をか上器

と云、器宇宏達海の如き是なり、夫れ蒼海渺茫浮九州三山を繞る、潮汐退けども減縮の跡なく、江河朝すれども盈溢の患なし、含魚龍鯤鱗を隠し、百寶を涌かし潤澤を司る、其大にして德あるもの海に若くはなし、器宇かくの如きものに非れば、以て佛教の廣且大を容るゝとあたはず、曾て謂らく、付法藏の祖々佛法を護持し玉ふもの其意こゝに髣髴たるか、部執を爭ひ優劣を議する如き者の企て及ぶ所に非す、其實は人と法との二無我を証するの人にして始めて此域に臻るなり、傲慢我執の者の知るべき所に非す、但し眞に護法を志し傳法を宗ふものは凡位の初學これを庶幾すべし、古に曰く、賢を見て齊からんことを思へと、まことに夫れ然らさるとをえんや、第二の中器とは何そや、其器識たる流通無塞、潤澤濶るとなきと、喩へは江河の如き是れなり、夫江河千里流注ふさかるとなし、清波丘岳を滌ひ、碧鏡星宿を照す、支派の及ぶ所四民潤澤を蒙らさるものなし、夫佛教八万、支流各殊也、皆是物を潤すの方便、濟生巧説なり、流注苟も塞からば道芽永く燋せん、大小半滿並べ弘むべし、權實顯密併せ示すべし、互に廢すべし、互に立つべし、廢立實の廢立に非ればなり、若し一法をして實に廢せしめば、如來の一德を損減するなり、若一法をして實に立せしめば、如來の一德を增進せしむるなり、其に是れ般若の戒むる所にして、不二の法門に背けはなり、宗々の祖師は本來無我に達す、故に法の無相を証す、無我の人無相の法を説く、一廢一立何の障碍する所かあらん、千歳の流通こゝにあり、万機の普益塞からざる所以なり、天台の法花を弘め、玄奘三藏の法相を示し、賢首の花嚴を説き玉ふが如きみなこの意なり、後の宗徒、祖師の意を體して、以て偏執愛見の情をわするゝに至ては、僅かに中器の末類に攝すべし、中器の正類に非るのみ、苟も佛法に於て優劣淺深の見を生せばすべて是れ戲論と名く、又邪見の部に收む深くれそるべし、何をか下器と云、喩へは細流小瀆の如し、細流は淺し竭て涉るべし、小瀆は狹し跨て越ゆべし、是亦江河の末流なりと云へとも、曲斜百廻、水勢力を失す、生するものは蒲萄游くものは蟊蛆のみ、古に曰く、弩未不能入縞、蓋しれもふに此小器もし法水をうくれば曲斜宛轉、沙礫をも動かさす、泥滓混濁、瓯を汚に臻らん、江河の蕩々は夢にたもみす、況や蒼々たる溟海をや、これを江河に比すべきにもあらす、されとかゝる溝瀆も園に水そゝき、わくたの捨所なとにはいさゝかなきにはまされる方にやと覺ゆ、いはばありてもなくてもといはんはとの器識なるべし、澆末の今になりては、かゝるさまのれはくのみなりゆくけなるそ、佛家の中にはいと口惜しう悲しきとなりけり、されば今の佛法は支流溝瀆のせはく淺きにて、今の佛者は其中にすめる蚯蚓蟲蛆

の如きなれば、人ありてこれを塞き平けんとするに力を用ゆるの一日に足らしなどれも亦にも、あはれ我佛家今暫しにて廢滅の禍を蒙らん日あるべきにやとれはゆる、これなん蟹は甲はとの穴を穿つと云へるか如く、己れいやしければ佛法もいやしく、己れ細小なれば佛法も細小なるなり、さてこそ佛法は器識を撰ふべきそ大事なれ、抑上器はかたかるへくんばせめては中器を希ふべし、下器は眞の佛者の類に非すとしるべし、何そや、下器のものは虛文浮華を好み詐術鄙行を專にする故なり、器はもと喩の語なり、かの瑠璃は玉壺なり、廊廟に連る上器と稱すべし、銅鐵は堅固を義とす、中器と稱すべし、陶瓦は鄙陋摧けやすし、されはこれを下器と名くべし、只僅かになきにまされるものと云はんのみ、識は知識、其性習をいふ、あはれ器識は高して尊く、廣して狹まからず、深して淺からざるべし、或か問ふ、其器識は陶冶してなるへきにや、將天質の稟る所に局るか、答、孔子の玉はすや、性相近し習相遠しと、其善に就き不善に遠さかる、獨これを學習するにあり、何をか學ひ誰にか習はん、師友論に至てまさにこれを辨せんとす、器識論畢。

師友論　第十

師はこれを教るものにして、友はこれを成すものなり、論語述而篇に曰「三人行必得我師焉、擇其善者從之と、夫れ師は擇ぶべし、邪師邪教恐るべしと云へり、入法界品に五十三の善知識あり、提婆品に奉師薪水の勢を說けり、欽てこれを鑑むべし、韓退之の師說みつべし、孔子周に入て老子に禮を習ふこと史記に見ゆ、歷朝の聖賢師によらさるものなし、故に孔子も曰はすや、我非生而知之、好古敏而求之者也、聖者既に爾り、師に就て學習する誰の人かこれを等閑にすべき、四分律に五種の師を說き、五分律に十二種の德を擧ぐ、みな師家の關係する所なり、師道崇むべし、一日もなくんばあるべからず、諸經の列衆聲聞衆を先にするは、弟子にして師に離れざるの跡を示すなり、弟子たるもの知らずんはあるべからず、友とは朋友、其志の同じきものを云ふ、古に曰く、君子相友となれば道德以て成すと、切磋琢磨の相規誡するものは特に友に由るべし、而して損友は交ることなかれ、故に曰く無友不如己者と云へり、益友はともに親愛すべし、此の友ありて吾道を輔く、故に曰、以友輔仁と、又曰く、君子謹其所與處焉、又曰く、欲知其人視其友、所謂益友者三友、尤もこれを庶幾すべし、觀無量壽經に提婆を惡友と名け、之に親近すれば害あるを誡む、觀音勢至を勝友と名く、親愛守護影響相離れざるの謂なり、蓋し道を傳へ業を受くる師に由らざることなく、講習規策唯友是交はる、涅槃經の中、阿難、世尊に問ふ、善知識は得道の半因緣か、世尊應と

て曰く、善知識は得道の全因緣なりと、善知識とは師友併せ言へるの語なり、摩訶止觀二十五方便を示す中、善知識に三種あることを說く、師友の義盡せりと云べし、夫人の道の爲めに器識を規さんとせんには、必ず此の師友の力を借らずんばあらざるなり、孔子の生知だも猶好古求之との玉へり、蓋し聞く性相近しと、是策進修成も て其不善の習を遠ざくべし、惡習遠ざかり、善性の成る、誰か中器をなさゞることなけん、唯上智と下愚とは我れこれを奈何んと云ふことをしらず、略して師友の說を示す。

あまりにも　しける夏艸　かりてまし
　　ありともみゑず　のりのふる道、

戸鎖にこたれる家には盜の伺ふなん例のさまなり、我島國の佛の御門も千歲あまり五百年はかりやふりけん、けしからるもなかりけるより、守り人のやゝにこたりけなるに、さる戸さしやるひたるあたりより、例の伺ひものすめるありなどきこゆけるに、にはかにおどろきて掠校しつれば、大かたは築地やぶれ垣かたふきてけり、おのれも其の門もりのあたりにすめるものから、硯の池により筆の戈とりてけるはいかめしげなれども、山田のそほつ、くちぬはかりのすさひには何なかはにおどろかすべきと、我ながらいとおかしふなん、行誡

松浦龜鑑

一　人は萬物の靈と古聖の曰へるは、孝悌忠信仁義五常を心に忘れず身に行ふか故なり、今古時を隔るも上下業を殊にするも、都て此德を以て人類の基本とす此を人の盛德と稱す、犬馬牛羊の類は愛憎の心もあり見聞の用も備はれども、此盛德に於ける一種もあることなければ、此を異類と稱す、苟くも人にして萬一此德を失すれば、豺狼と同しく牛馬と殊なることなしと知るべし、蓋し人は其得る處の德に止るなり、其止る處に止まらざれは禽獸にだも如かずと誡められたり、子々孫々恒に此趣きを克く辨ふべし、

一　修身齊家は人々一世の要路なり、夫れ修身とは貧富貴賤己れが身のほど〳〵を守りて、常に五倫の道を愼しみ行ふなり、貴にして憍ふることなかれ、富て奢ることなかれ、貧賤にして諂諛することなかれ、此を修身の德と云ふ、齊家とは、常に家業に懈らず、妻子從類六親眷屬の間に於て克く和睦し、苟くも殘忍麁暴の行を愼しむなり、意に稱ひたりとて濫りに貪ることなかれ、情に逆ひたりとも濫りに瞋ることと

なかれ、克く是非を辨別して公私を謬ることなかれ、質素節儉なるも慳吝鄙劣に陷らざれ、溫柔愛敬を存するも惑溺偏頗に涉らざれ、若し夫れ是の如くなれば、家に在りては家齊ひ、國に在りては國治る、此人にして祖先父母の家聲を墮さず、此人にして子孫千載の幸福を保つ、語に曰く、其人を待て而して後に行はると、希はくは以て其人となるへし、

一　皇國は古來神國と稱す、皇朝宗廟の神は固より論を待たず、其餘延喜式、神明帳に記載する所の神各々神威神靈あり、馴れ近くは不敬なり、鬼神は敬して遠ざくと云へるは是故なり、祭司拜趨唯敬の一言に止ると知るべし、此を神恩を謝すと名く、此を國恩を報すと名く、其威德の厚薄本跡の有無等の事に於ける都へて神祇の內德に關係するもの、凡庸の喙を容るへき境內に非す、偶々愚巫偏儒の輩の卒然として漫說する者あり、正民の惑ふべからざる處なり、西行法師の歌として、何事のをわしますかはしらねとも、ありかたさには涙だこぼるゝ」と讚めり、凡そ敬神の式は此一首を以て千載不易の軌則とするに足れり

一　佛敎の事は三世諸佛同道の大悟を二千八百年の昔し釋迦牟尼佛の開悟し玉へるより、一代五十年の說法ありて八十の齡にて入滅し玉へり、後ち一千年を歷て

始て支那に渡來す、則ち後漢の明帝永平年間なり、爾來四百年を歷て初て百濟國の昭明王、此を傳へて吾皇國に貢獻す、推古帝の御時聖德皇太子、帝に代りて萬機の政を攝す、此際天王寺を始め處々に伽藍を造立し、自ら法華經維摩經及勝鬘經を宮中に講じ玉ふ、君臣耳を傾く、(當時講說三經の疏文、今猶朝野に流行す)皇朝の佛法此に於て大に勃興す、(神道儒道を始め、凡そ百工の職事を開かれたること其數を知らす、蓋し皇國の開明を稱するに於て、太子を以て開祖となすべきなり)夫より以來和漢の諸大德踵を繼て出興し、經律論の三藏に就て各々其宗旨を弘通す、謂ゆる三論宗、法相宗、華嚴宗、倶舍宗、律宗なと問へたるは、南都の古佛敎と稱す、天台、眞言、淨土、禪宗の如きは是れ平安遷都以來の新佛法なり(眞宗、日蓮宗、時宗、大念佛等の宗旨は、總べて以上の新佛法の中より分派せる者なり)古人、日本國は大乘有緣の地なりと云はれたるは、其趣旨聞へたる辭なり、以上佛法海內に流布するの所由を述るなり

一　右流布する所の佛敎の大意を述ぶべし、之に兩說あり、一には三世因果の說なり是を俗諦の佛法と云ふ、二には般若皆空の說なり是を眞諦の佛法と云ふ、俗諦と眞諦とは差別の義にして眞諦とは平等の理なり、先つ俗諦差別の義を說くべし、夫三世とは過去(昨日去年の如し)現在(今日今年の如し)未來(明日明年の如し)と云へることは、

獨り人界の前生後生を云へるのみに非らず、天下の衆物總べて此の三世あらざるの道理なきなり、因果とは、因は因種にして由て起る處の名なり、果とは結ぶ果にして結局に在て顯るゝ者の姿を云ふ、此の因果に二種あり、一には惡の因果なり、二には善の因果なり、惡因とは十惡を云ふ(一に殺生、二に偸盜、三に邪婬、四に妄語、五に惡口、六に兩舌、七に綺語、八に貪欲、九に瞋恚、十に邪見、具に十善法語に述るが如し)惡果とは四惡趣の果報を感得するを云ふ(四惡趣とは地獄、餓鬼、畜生、修羅の四趣を云ふ具さに正法念經に出たり)此の惡因あれば此の惡果を感ず、蕃椒を植れは苣も苣も皆辛きが如し、善因とは十善を云ふ(十惡を反覆するを云ふ)善果とは或ひは人界或は天界或は此善を回向して淨土の妙果を感得するを云ふ、此の善因あれは此善果の酬報あり、砂糖を植れは苣も苣も皆甘きが如し、此甘辛苗芽を殊にするの道理を辨ずれば、三世因果の理に於ける毫も疑を容れざる者と知るべし、積善の家には必ず餘慶あり、積惡の家には必ず餘殃ありと繫辭に云はれしは尤のことなり、此法善惡の差別あり、苦樂の相を異にするを以て、概して俗諦差別の法門と名く、過去未來を疑はゝ昨日明日も疑ふべし、其見るに及ばざればなり、善惡因果を信せざるは辛甘の差別の味を知らざるなり、之を天然の常理に味しとす、都て至愚の人と名く、經

中に之を邪見の人と名く、恐るべく憐むへきの輩なり、因果經の中此を說くこと具かなり、彼の九十六種の外道中に在て、聊か善惡因果に似たる說なきに非す、然れども佛教に比するに曲直精麁同日の談に非す、長短邪正天淵を異にす、經に說て此を邪因果と斥す、此までの法門は凡夫も此を知られ度らるれは、佛說にも委細に之を論し教へられしなり、其相明かにして看易き法門なれば、欽て此を信じ此を行ひ、生生世々の進退損益を等閑に附すること勿れ、

第二般若皆空の理とは、般若とは梵語(ぼんご)、翻じて智慧と云ふ、智慧の證悟する所を指す、皆空とは、一切の法の躰性に名くるなり前に說く三世因果の姿を初として、一切万法すべて夢幻の假の相にして、一物の常相あることなし、故に之れを名くるに空の稱を以てす、あれども眞にあらざる物を幻と名け又は陽焰と名く、慥に見へたれども實物に非るを夢と稱す、昔し盧生と云ふ人あり、邯鄲と云へる處にて茅店に憩ふ、枕を把りて午睡に就く、忽ち官人ありて迎へ、王の都城に朝して大官厚祿を賜ふ、討征功あり政治正しきを得て郡國を領し、公主を尙し子孫各公卿たり、年八十にして骸骨を乞ふて領國に歸る、此に及て忽然と夢さめたり、茅店の粟未だ熟せざる間なりと云へり、攝大乘論に曰く、處夢思多年覺則須臾間、とは此謂なり、夫れ人の貧福

貴賤、賢愚長幼、各々其禍福を殊にし其苦樂同しからすと雖とも、百歲の光陰都て廬生の一夢中に屬す、實に似て實に非す、殆ど茅店一炊の歡樂を見ると少異あることなし、其百千の生々世々に當て是を夢なりと知ること能はさるは其未だ心地の覺めざるが故なり、覺めざるが故に實物と執着す、實物と執着するが故に貪瞋此に起る、貪瞋起るが故に十惡此に盛なり、十惡盛なるが故に三惡四趣此に現はる、或は沈て無間一中劫の苦を受け、或は昇て忉利一千歲の樂を受く、蓋し苦樂昇沈都て廬生が一夢中なることを知らず、自ら惑て憂喜苦樂に墮在す、經に愚夫と稱し、生盲と說けるは決して虛名に非るなり、若し其長夢を醒覺せんと欲せば、其覺道あり略して次段に示すへし

一　大覺の道に二種あり、一に發心、二に修行なり、發心に二種あり一に上求菩提と云、二に下化衆生と名く、上求菩提とは前に出せる般若皆空の佛智を大悟するの地に至ることを希求するなり、二に下化衆生とは前に出せる三世因果の大夢中に處する衆生を、我れも解脫し一切衆生をも解脫せしめんと希求するなり、凡そ人と生れて善人と稱すべき輩は、願くは此の志しを起すべし、此發心は易きに似て甚た難きものなり、勸めて起さすんばあるべからす（世間事をなすの人ありて、實に國家の

ため萬民のためと思ひ起せば、これを公心と云ふ、是一分の菩提心なり、獨り己れか名聞利養の爲にすと云ふ心を起せば、之を外道心と云ふ、則ち私心なれはなり、君子は私を忘れて公道に就くへきなり）既に菩提心を發さば方に菩提の行を修すべし、釋迦如來一代の說法、我大日本國に渡來する所の經律論を三藏と名く、凡そ七千餘卷、すべて此菩提の心を發すことと、菩提の行を修することとを說き玉へるなり、若し淨土宗の意を以て此を示さは、此の修行門の中に二種を分つ、一には聖道門と名け、二には淨土門と名く、其聖道門とは天台、眞言、禪宗等の宗旨にて、この娑婆世界に在つて、一生の間に戒定慧の三學を成滿して、即身即佛の大悟を開くなり、此は餘程の大機大根性の人にして宿善も深厚の衆生ならねばむつかしき事なり、されども佛敎は此の如き行を修するを以て本意とすることなれば、決して恐怖退屈を生せす、百千萬生を易ても此れを成滿せんと願ふ大丈夫心を勵せさる者を眞の佛子と名く、此行は僧俗を論せす男女を撰ばす、此大心をおこし此大行を修するを宿善深厚の眞の佛弟子と名く、在世、滅後、天竺、支那、及ひ皇國の昔しより、國王大臣を始め、男女幼童の輩、此機類に當る者も多くありて、毀ふるに遑あらさるなり、其修行の方法云何に至ては其經論に就て之を讀み、其宗々の知識に就て是を尋ぬべし、二に淨土

門とは子か常に信する所なるを以て、次段に至て委く示すべし、

一　淨土門とは、夫れ滅後千年の末に在て、一切衆生の機類まち〳〵なれば、我れは必らず娑婆世界に在て、大心大行を成滿すべしと企たつる機もあり、又機根劣弱の人ありてかゝる大行は修行しかぬる者もあり、又特に西方の彌陀一佛にのみ有緣の衆生もありて、決して一概には云はれぬものなり、故に釋迦佛一代の說法にも兩說ありて、此土にて斷惑入聖の悟入を得せしむると、淨土にて不退轉の位に入らしむるとの兩岐路を分ち說玉へり、今淨土往生の法門、念佛三昧の修行は、同じ一佛法の中に於て特別の軌格ありて、前に出せし聖道門とは其踏所を殊別にするなり、夫れ聖道門は釋迦佛の大智大覺に就て敎へ玉へるより、三學と云ひ六度と云ひ、聊かも繩軌を誤らざるの行法を以て、誓て三僧祇劫の大覺を期するなり、淨土門は彌陀佛の濟度利生の大悲誓願を仰き信するに基ひして、常に口稱念佛の一行を以て此れを行法となし臨終來迎聖相を拜し順次九品往生の勝果を期するなり、此の聖道と淨土との二門の差別を辯するに十義の差別あり、今試に此を列すべし、一に彼れは聖道門の大智に倣ひ、此は淨土門の大悲を信ず、二に彼れは戒定慧の三學を行ひ、此は念佛の一行を專にす、三に彼れは宿善熟練の上機に局り、此は怯弱無善の下機

に通ず、四に彼れは生々世々の三祇を期し、此は一生を盡す、五に彼れは自力を務め、此は他力を仰ぐ、六に彼れは佛敎の正修に屬し、此は佛敎の異方便に屬す、七に彼れは成佛の遠果を期し、此は往生の近果を期す、八に彼れは彌陀の別願に疎く、此は彌陀の別願に親し、九に彼れは成佛の難行道と名け、此は往生の易行道と稱す、十に彼れを躋攀步行の陸路に喩へ、此を一舉萬里の乘船に譬ふ、夫れ均しく一味の佛法なりと雖とも、正しく人々の修行門に臨では、必す上來十種の差別なきに非す、三界の出離解脫を求めん者は、宜く己れに利益あるべき便宜に就て思考を定むべし、正しく往生淨土の行法を知らんとせば、亦此を次段に示すべし

一　末代澆季の世界に在て生れ來れる衆生は、多くは薄福微善の果報を以ての故に、貪瞋煩惱日々に增上し、天傷災禍年ごとに倍增するさまなり、三學六度の善人と稱する者も大行に堪へたる者は甚た寡なし、況んや現世證入の大機に於てれや、大凡そ未來流轉の因果を免れざるの輩のみ多かるべしと覺ゆ、いたましきの涯りなり、今日にしては偏に大悲深重の彌陀に皈向し、吾黨の修し易き專稱名字の行法を行じ、往き易き西方極樂淨土に往生するを以てすべし、(是を此宗の安心起行の法門とす)、是に於てか娑婆世界の虛僞不實の幻境を深く厭ひて執着することなく(此を

厭離穢土と名く)當來淨土の法性常住の勝境界を恒に欣慕すべし(此を欣求淨土と名く)此心いつはらさるを至誠心と名く、此心狐疑迷惑せざるを深心と名く、此心餘方に向はざるを回向心と名く、此の三心已に具する者は必す往生すと觀無量壽經に說かせられたり、此より夙夕念佛を稱すること多少は機に從ふべし、或は一念十念にて往生すとも說き、或は上壽一形とて千稱万稱に及ぶとも說き、三萬遍以上の日課は上品上生人なりと唐の善導は示し玉へり、是を以て吾元祖法然上人は、つねに六万七万の日課念佛をつとめらる二祖國師三祖禪師以下皆之に倣へり、此等のことは祖師の撰擇集及遺訓の一枚起請(一紙三百餘言、臨末に述する所にして、後小松帝一枚起請の內題宸筆を賜ふ)に就て知るべきなり

一　先祖を祭ることは、神祭には神の禮あり、儒祭には儒の禮あり、佛祭には佛の禮あり、各々其規則あり、神儒の葬祭は且らく措て論せず、佛法を信し佛敎に由て其葬祭を行ふこと都て佛敎の規則に準すべし、祖先以來佛敎に由る者子孫此を傳へて佛式を以て祭祀す、此を孝と云ひ又禮に稱ふと云ふ、幕政の昔、耶蘇の國亂あり、政府此に懲誡して上下洎て香花院を定めて葬祭共に佛式に歸せしむ、此れ唯時勢の一變法なりと雖とも、當時に在て防邪の方便宜しきを得たるは古今比類なしとす、近

來開明を唱へて此紐綱を解く、亦是時勢の一變法なり、爾來異敎蔓延全國至らざる處なし、其是非に至ては吾輩決することを能はす、老子の曰く、倚伏孰れか其極りを知らんやとは此謂なるべし、蓋し子孫自から古へを陋となして、遞かに祖先以來の葬祭法を改むるか如きは、尋常庸輩に在りては、祖先を愚弄するの失を免れざる者の如し、家聲を千歲に保つ者深く知るべきなり

筆の序を以て外敎の大途を示すべし、彼にも種々の流派あるなれども當時流行する者を耶蘇敎と云ひ、希臘敎と云ひ、天主敎と云ふ、敎師を派出し敎會所を設けて其敎を弘通す、傳へ聞く彼國の國王より金財を扶助して其流布を資助すと、故に或は書冊を施し、或は醫藥を施し、或は吾國人に財物を賦與して其敎を聽かしむ、其志至大至遠尤も稱すべし、吾敎導職の尸位素餐徒らに日月を消費する者に似ざるなり、其書も數百種あり譯出して世間に流布す、其本書を舊約全書、新約全書と云ふ、其云ふ所を見れは其宗は天主を祖述しきりすとを憲章す、世界萬物は總て天主の造作する所なり、苦樂昇沈も天主の差排する所なり、此恩廣大なれは天主を以て眞の父母とす、今の一世の父母は暫く假の父母なり、父母に孝行すとも天主に孝順せざる者は地獄に墮つ、父母に不孝なるも天主に孝養すれは天堂

に生ず、日本の神明などを信ずるは愚の至なり、唯きして此を捨つべし、佛菩薩なども亦同しことなり、決して信仰すへからず、之を邪神とす、かゝる邪神に飯信すれは天主嫉妬し悲て其人に禍を與ふと云々す、彼教へにも勸懲の道あれども其說備はらず、彼れ天堂地獄を說けども渺茫委悉ならず、畢竟三千年前、天竺に行はれたる九十六種の外道中、梵天外道と云へる一種の下等の派屬なること、佛教中に在て的證あり、列國の中、若くは佛の經教及儒道などのなき所ならば、彼と雖とも聊か利益することあるへし、支那皇國の如き正教明理の邦內に在ては、誠に一贅物にして一害物たらざることを得ず、其例天正元和の先證隱すこと能はず、斯ることと其道の是非を辨別する學生に就て聞き知るべきことなり、已れ昔しよめりし歌に「はりつとふ鼠の道もみちなれぞまことの道を人のゆく道」

一　春の花は風を待ずして散り、秋の月は夜をのこしてかたふく、人の命は電のはのかに照すはとにして、夕露の草葉の上にれくれ先きだつが如し、設ひ千歲の壽をたもつもやがて煙と消へ土と腐る、況んや老少不定の理り、盛者必衰のありさま、見るに魂ひ消へ、聞くに心驚く、早く菩提心を發して旦暮多少の念佛を行すべし、生神は暫らく形を守れども、死鬼既に門に臨む、法華經に曰く三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、甚可怖畏と、あはれ枕頭暫夢の樂みに着して、永劫因果の謀りおとを忘るゝことなかれ、

（三十九）

壬午冬の頃、難波の里なる松浦寬篤翁の來りて、子孫へも傳へまはしければ、物書てよと乞はれたるに、やがて筆執りて記し侍る

（三十七）

三條愚辨

念佛行者は昔しより念佛より外の事は知らぬとなれば、行者が今七八十歲に及ひたる身の、如何なる御沙汰があれはとても、急に改め夫れをやめにして、敬神愛國のことばかりを說て一切衆生に極樂はどうでもよひはと云樣なる說教は出來ぬぞ、偖又念佛をやめにせい、往生はよしにせよと云やうなる勅命もあらねば、やはり行者は昔し通りに念佛を自らも勤め、人にも勤めさせて、各々と共に極樂へゆかねばならぬと申すより外かのことはなひぞ、夫れ故どうぞ皆のものも其心得にて、年來承り傳ふる通りの念佛を怠らずして、是非此度は決定して往生せねばならぬと云とを急度心得たがよいぞ、此事は行者も年來自らも心得、人にも勸めさとす通り、ずこし

もゆるがぬとにて、此れは彌陀如來の本願なり、釋迦如來の勸讃なり、十方如來の証試とて毛頭虛妄でなひと云ことを、誰れ〳〵も深く厚く信して毛すじほども疑がひ申すまひぞ、此外に佛法と云ものはなひぞ、此外に淨土宗と云ことはなひぞ、何に宗とても此外に後生極樂の方便はなひぞ、されば元祖大師の一枚起請にも、唯往生極樂の爲にはなむあみ陀佛と申して、疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はずと示し玉ひ、又其次にも、此外に奥ふかきことを存せば二尊の憐れみにはづれ、本願にもれ候べしと、示させ玉へるなり、いつも无常と云ものは、今日は明日を待たぬものなれば、此外のことをゆるらかに云たり、仕たりして、何つまても、千年も、万年も、居る樣に思ふは迷ひと云ものなり、善導大師の日沒无常の偈にも、人間愚々として衆務を營む、年命の日夜に去ることを覺らず、と誡め玉へり、少しでも口にひまがあらは念佛を申せ、少しでも心にひまがあらば極樂を願ふべし、此れはほとのことは釋迦牟尼如來二千八百年の昔し御說き成された趣きにて、阿彌陀經を始め一切經中に所々に散說してある、天竺より支那に傳り、支那より三韓（今の朝鮮なり）三韓より日本の三十代欽明天皇と申す御世に始めて此の御國に傳へたるを、今日まで凡そ一千四五百年弘通に尙はるとなくて、行者が今一同に傳へて聞かせるなり、國が違ふて

も代が替つても亦の後生菩提の道はかはることは少しもなきことにてもふべし、魂神不死と云つて、魂は何百年すぎても死なくならぬものと云ことにや、善惡の因果に就て惡をなせば惡い果報の處へ魂ひがゆくぞ、されは精出して善事を行ふて念佛と申せば後生の魂が西方極樂世界の九品の花の臺に現れるぞ、後の世の魂も他人のものではないぞ、ゆだんをしては八寒八熱の地獄や、飢渴の餓鬼道や、角を戴だき、鱗こを着るやうな畜生道にゆかぬ樣にし玉へや、さて近ころ　天子樣より三ヶ條の敎則と云ことを御さだが出た、此れは是れより日本の國敎と云ものにせよと云ことにやに由て、一通りはいか樣なる愚夫愚婦も耳のあるほとのものは聽かねはならぬ、口のある程のものは申さねばならぬ、故に愚かなる生れつきの行者も、いさゝかこれを示してれかふ、

三條と云とは第一に敬神愛國と云と、第二に天理人道と云と、第三に皇上奉戴朝旨遵守と云とぞ、第一敬神愛國とは敬神とは神々樣を敬ひて御そまつに心得てはならぬと云とぞ、日本の神々は天子樣の御先祖さまにて、此國も此五穀も此衣服も最初に作りかためて、こしらへて下されたと云とが、神代の記と云御記錄にかき傳はりてあり、されば此御恩をよく〳〵わきまへてみよ、今日飢もせす、凍もせす、命をつ

ないでゐるのはみな此の神々様の御恩そと云とを忘れましきとぞ、夫れ故朝廷の年中行事の中にも、神々の御祭りはけしからず御丁寧にあるとは夫れそれの御記錄に出てある通りぞ、されは諸宗の祖師方にも伊勢を始め春日、八幡、住吉なとの向き〳〵の神々へ、御拜禮なされて其時々にはさま〳〵の御靈けんを蒙らせられたるとが高僧傳なぞの中には數へたてられぬほど澤山にあるぢや、夫れを今の人が心なきものは、御鳥居の前でも御辞儀ひとつせぬや、神だなの前でも拍手一つうたぬは、不敬と云もので、不禮なとぢや、其上に神さまが佛法を御まもり下さるればこそ、今日此方か極樂參りもできるものと思へは、信心者は別して敬神の道を心ねたがよひ、愛國と云とは世の譬へにも故郷忘れ難しと云て、たれでも己れか生れた國をひいきせぬものはなひ、天の覆ふ所、地を載る所、千万の國もあれぞも、日本に生れたるものは日本を一番ありがたひと思ふとは言はひでもしれた通りぢや、されぞも此ころの様に万國か輻湊するころには、凡夫のかなしさには此國より彼國かよいかしらんと思ふまいものでもない、日本にしりを向けてあちらへ降參する様なとがありては反逆人と云ものなれば、どこまでも皇國を貴ひ、よき國とあがめて、よき國に我らは生れきて仕合せものよと思ひよろこぶべきとぢや、信心者は別して

佛法なぞは外の國にはなひ、外の國は天主教や、耶蘇教とて九十六種の中の梵天外道と申すが邪説を弘め傳へてみな輪廻六道の基となる教ばかりをよきとに思ふものぞもなるを、此御國は昔しより少しも邪教はなくて無漏純白の佛法を信向せよと、上は天子様を始め、下万民まて後生菩提の道を御信心あると云ふとはよくよくあり難ひ御國ぢやと云とを思へは、此國に生れたる御かげにて極樂へもゆかれる、悟りもひらくと云ものなれば、今生は安穩に、後生は安樂に、實に、二世安樂と云國は此の御國に局ると云とぞ、されば此國を愛せずに何れの國をか愛し申すべきや、此れは佛法信仰のものに言ひきかせるまでぢや。

第二天理人道と云事、天理とは、天然自然と云とぢや、此れも色々の説き方もあらんなれぞも、大きく天地で云てみれば天は高く地はひくき、山はそびゑ海はふかく、昼はあかるく夜はくらく、夏はあつく冬は寒く、春は花さき秋はもみぢと云がみな天理にて、是非さもあるべきとを云ふ、草木で云てみれば花はあかきもの、柳はみとりなるもの、唐からしは辛きものにて、砂糖は甘かるへきものなり、禽獸て云てみれば鳥は羽ありて空にかけるべきもの、魚はうろこありて水におよくべきもの、天然の理なり、人に就て云てみよ、君は貴きものにて、敬し奉るべきものなり、臣は卑しくし

て仕へ申すべきなり、男は強くして外をかせぎ、女は弱くして内をれさむ、天然の理と云べし、併しながら此の天理は定まりたる樣なれども、又國々の風土のさま〳〵にて一やうならざる也、山の多き國もあり、海の多き國もあり、あつき方かつよき國あり寒き方のつよき國あり、此れについては衣食住の作りさまも又一やうならず、其民の治め方も必ず同じとにはあらざる也、既に支那は代々帝王其家系を一にせず、亞米利加などは四年に一度大統領を代ると云へり、此亦其國々の風儀にて天然しかすべき理なるべし、我日本などは天照皇大神より御血統を傳へさせられてより、万世一系の御治政なり、尤も中ころ王室御微弱なりし時だも、強暴のともがらありと雖も、天位を窺ひ奉るものなし、況んや今日の御一新にれけるをや、日本の天理は實にかくあるべきものと見えたり。

人道と云ふとは、全く人間の五倫五常をたしかに知り行ふべきとを云、申さすともしれたとなれども一通り申してきかせやうなら、君には忠を思ひ、父母には孝を思ひ、兄弟夫婦には眞實なむことを思ひ、朋友親類には眞實につき合て、不實のなき樣にすべきなり、さて君は臣を愛重し、父母は子に慈敎を加へ、夫は妻を愛顧するなど、みな人道と云ものなり、すへて人と云ものは萬物の靈と云て、凡そいきといけるもの。中には、一番すくれたる果報なるもの故に、禽獸などゝれなじやうなる果しき、

ふらきれそろしき、氣味のわるひ、振舞はせぬものと云とを能々しるべきとぢや、此れも人道をわすれるとやがて主殺しの、親不孝の、追はぎの、やじりきりのと云とが始まるぞ、おそれ愼みて人道を全く行はねばならぬとと云とを、ふかく信じて行ふべきとをわするなよ。

第三皇上奉戴朝旨遵守とは佛家にては敬上慈下と云とあり、上求菩提と云とあり、いつれも己れより上たる人の敎を必ず愼むべきと云とを、ふかく心にて是を菩薩發心の始めとするなれば、出家などの上にては珍らしからぬとなれども、在家、小人、凡夫の上にては中興君臣の道かいさゝか親疎が出來りしより、上天子樣よりは、己れ〳〵か旦那かありがたひなぞゝ心にて違ひしたるものもあり相なに由て、此樣のとも心得ぬと申しだんじて、反逆人ができてはわるひと思召して此一條を御さたのあるとをみえる、天下國家を治むるには人の志し一樣ならねば御政治のゆきとゞかせがわるひ故に、御丁寧にかくまでの御さたが有るなり、一同此れをわすれずに上よりの、御さた御布告等閑に心にすに背き奉らぬ樣に氣をつけろ、昔しの人も天の時は地の利にしかず、地の利は人の和にしかずと云はれて、人の和合が天下

の一番大切のことにて、上下か和合せぬとあれば天下か乱れる、親子夫婦が和合せぬとあれば一家が乱れる、何んでも和合は大切のものぞと云ことをしらねばならぬ、此箇條は上下貴賤、長幼の和合さへあれば天下は百万年に治まり、安隱にくらさると云ふものぢや。

此の様なことは念佛行者などは今日までゐまり云たことはなけれど、此ころの御布告なれば、改めて此だけのことは、わざ〳〵申しきかせるぞ、かゝに深山幽谷に世を遁れてゐて、朝夕の食ふ蕎麥粉一匕渓水を汲て呑み、むしろを鋪ひて麻の衣一枚で大てい暑寒をすこす身分にて、世間のいらぬせわをやくと云ともいらぬせわなれども、天子様より申せと御意なさるれは、いやと云てはすまぬから、此だけのことは尤も人の爲になる結構な御教なれば、急度申しきかする、此一掬の谷の水でも、一匕のそばこでも、一枚のむしろでも、一領の麻衣でも、一尺の岩の上でも、率土の濱王土に非すと云ことなしとありて、みな日本は日本の天子さまの御領分なるぞと思へば、此方ぞもか世をのかれてこれより極樂へゆく行ひを、上でならんとも仰せられず、むりに出家沙門の形ちをあらためよとも仰せられず、むりに肉食妻帶せよとも仰せられず、生涯樹下石上の行ひを改めず、生涯三衣一鉢の境界をもやめず、生涯厭欣念佛をつ

とめて居られ、さて此のれかげにて今生此國よりすくに極樂へやつて下さるとあれば、此ほどの天子様の御恩はなひから、わつかばかり、云ことをいへ、することをせよ、と仰せらるゝ位はやすひことちやに由て、右は今日はめつらしく三章の講釋をしてきかせる、さればと云て此三章は人間が今日生きてゐる間だの行ひだそ、此れをすくに後生にまの善事こんてれくと申す御さためではなひぞ、後生のことは先こく云通り、阿彌陀様のしてうけなされて、其の御支配なれば、此れは精出して南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛とゐへやうぞ、

外國（とつくに）も及ふものかは我御國
のちの世までの道ぞありける

外教にも地獄天堂を說て、勸善懲惡の道もあれとも、みな九十六種の外道より流出したるものにて、佛說の正理てなひ、其邪正のことは別にしるした書物か澤山ある、學者はこれをよめ。

依宗開教

此教あつて、而して後、此の宗名を立つるを以て、この名目宜しかるべし、名目見聞にいはゆる依教分宗と云へるを証とすべし、後に立教の一節を記す、今は依教の方にて云

釋迦佛一代の教法、凡八十千、（倶舍論界品曰、本尼法藏數八十千）大小半滿顯密等各其所說を殊にす、いはゆる對機の說法にして、猶病に應じて藥を與ふるゆゑんなり（維摩經曰、對機說法應病與藥云云）滅後五百年間を正法と名つく、遺教純一にして行証も凡そ左世に髣髴たり、爾來一千年間を像法と名く、證悟少く遜すれども、教行玉を琢して、玭瑕損闕ある者を視ると罕なり、況んや此際馬鳴、龍樹、提婆、天親等の附法藏の諸大士、代る〳〵出現し玉へるを以て、遺法の照曜殆ん〻正法の時に匹敵するにちかゝるべし、其中小乘に二十部を分ち、大乘も亦空有の殊を立る者に至ては、稍分教開宗に氣息を通ずるに近けれども、其專らとむしろにおける、人法二無我に基して、轉迷開悟の道を修するに外なきなり、滅後一千五百餘年に及て、佛法始めて支那に東漸す、則漢明帝永平十四年（我朱行天皇の初年なり）なり、爾來唐の德宗貞元年間に至る、凡そ七百年、諸三藏東西往來して、翻譯の經論凡そ七千餘卷と云、此より後ち支那に在て、依教開宗するもの凡そ十有三宗あり、倶舍論に依る者を倶舍宗と名け、成實論に依る者を成實宗と名け、攝論宗と名け、十地論に依る者を地論宗と名け、涅槃經に依る者を涅槃宗と名け、戒律部に依る者を戒律宗と名け、三部論に依る者を三論宗と名け、法花經に依る者を法花宗と名け、華嚴經に依るものを華嚴宗と名け、大日經に由る者を眞言宗と名け、深密經に由る者を法相宗と名け、達磨の傳ふる所に依る者を禪宗と名く、我淨土宗の如きは、唐の善導一時大藏中に背面して經を探りて始めて觀無量壽經を得たり、再び道綽に謁して復觀經を授けらるゝに遇す、此に於て欽て此經の疏釋を製作し、前後四卷（玄義分也序分義也定善義也散善義也支那早く文句を失すと云ふ）を成す、其義は古今を階定して諸師の誤を匡し、其文は此を冥象に請して以て其證を得たり、世擧て證定の疏と稱する所以なり、（唐三藏記の中、晉の道安法師証定を乞ふの文あり、見合すべし）此に於て、初て觀經に依て廣く淨土の門を開く、自行化他往生淨土の一道に於ける、其盛大を究むる者、支那一洲、特に此善導の弘通に及ぶものあるとなし、傳に就て觀つへし（傳文若干、大槃別傳之を別証す）已上唐土の依教開宗を曉す、已下日本の立教開宗を演ふべし、元祖法然坊源空上人、崇德天皇の御宇、長承二年四月七日を以て美作國漆氏の家に生る、勢至丸と名く、九歲にして父に死別す、十五にして叡山に上り、翌年肥後阿闍梨皇圓に就て剃髮す、十八にして黑谷に隱居し、叡空上人に師事す、報恩藏に就て一切經を披覽すること五回、別して善導觀經の疏（天安二年智証大師請來す）を

讀むと前後八返、一心專念の文に至て、始めて善導の元意、末法の衆生、順次解脫の道にかける、獨り本願念佛の一行に局ることを證知す、源空年四十三、高倉天皇承安五年なり、此に於て永く年來所修の顯密の行法を廢止して日課念佛六万遍を誓約す、後に又二万を加へて日々七万遍を修業とす、是に於て淨土の宗名を揚て、以て世人をして廣く釋迦法中、往生淨土の一路あることを知らしむ、是れ開宗の由て起る所以なり、勅修傳第六曰、尋ね至る者あれば淨土の法を叙べ念佛の行を勸めらる、化導日に從て盛に、念佛に歸する者雲霞の如し、乃至ホマレ一朝にみち、益四海に遍し、此彌陀の一教、我國に緣ふかく、念佛の勝行末法に相應するゆゑなるべし云云、又同卷の末に云、我淨土宗を立る心は凡夫の報土に生るゝことを示さんが爲なり云云、選擇集初章私釋段の末に、宗名根據あることを出す披て見つべし、已上は日本一州淨土開宗の緣起とす、已下は元祖開宗の日、其始祖と定むる者は、獨り唐の善導大師なることを決すべし、選擇集初章の私釋段の終、本宗の血脈を議するに至りて衆說を出して票說なし、鎭西宗要第四震旦念佛祖師の題下に曰、祖師の血脈大事也、乃至安樂集は何によりて書給やらん、え知らす不審也とて、捨高僧傳によるべしと有し也と云へる口傳を出されたるは、且く一宗の系譜を票判し玉へるたけのことにて、漢語燈錄中五初丁

の傳をあくるも意此にあり、正しく開宗の祖意、特に善導の一師に由て餘師に依らざるの相傳なり、選擇集末第十六章の私釋段の末に、唯用善導一師の語の下、條々の道理を出して、之を究めて讃揚稱歎一に非るをみてもしるべし、此を以て記主東宗要第一三帋曰、依用善導有三由、一投大藏經、信手探之、得觀無量壽經、二禀承道綽、三發得三昧、今記主加云、四證定疏、五今師本地即彌陀如來、已上、今亦試みに七由を列して相傳の五由を補翼せんとす、階定古今の格言是一選擇集後十五章、本文祖書を列擧して經文に比同す是二同集末文稱嘆力を竭す、是三夢に眞葛か原中の來現を感す、是四是勅傳及び語灯中祖名を揚る幾千百なるをしらす、是五漢語灯に大師の十德を列す、是六二祖國師表善導宗之宗名、是七也、右前後十二箇の由致を以てするに至ては、懲綽、二公其德高して大なりと雖、以て吾元祖開宗の一節に於ける、以て三舍を避けさるとを得さるなり、今相傳の譜脉列行するを以て、三師を以て等閑平視する者は、相傳の理由を委知せさるなり、凡日本一州淨土を宗となす寺院に於ける、三尊の外壇に在て兩大師を安置する者、十にしては八九みな然り、爾れば則古人はよく此理由を知る者に似たり、今人舊慣に倣て之を安するのみ、其理由に昧きに似たり、故に此に驚しれくなり、全國の宗侶、審に此の理由に於て、自も信し檀越信徒にも常に說諭すべきなり、

中庸第三十章孔夫子の事を出す、曰、仲尼祖述堯舜、憲章文武、とへり、史記三皇五帝の傳あり、夏殷周の史あり、而して孔聖の簡ひ用ゆる處、二典（尚書堯典舜典）あり、と周祖に局る、其正鵠に的するなり、我空祖特に善導に由る、果して由る所に非れは由らさるなり、空祖は必す言はん、吾祖述二尊、憲章終南、誰か之を然らすとせんや

右一條、立教の教を三經の教説として、之を義立するなり、此に依て之を依教開宗と題目すべし、又一節あり、

立教の教を教相の教となして、選擇初章の私釋段の夫立教多少の語につひて、一節を叙すべし、此に由れば立教の題目を本書のまゝに用ゆ、

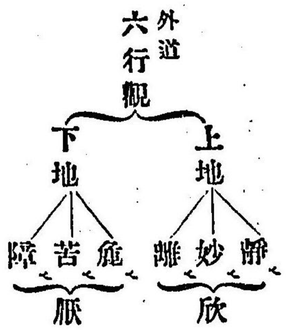
夫立教とは宗々各教相あるを指す、賢首の五教章には叙古今立教の一節あり、天台の法花玄義には名體宗用教の五重玄義を立て、第五の教玄義中に在て、宗々の立教を明す、我選擇集には略して五六家の教相を擧げ、蓋各宗の立教は各宗の開宗に基本す、夫一代の佛教は一音の演説、一味の法門なり、而して各家祖師經意を探り時機を察し、以て一宗を建立すべきか爲めなり、其中我淨土宗の教相とは、則安樂集に叙ふる聖道門淨土門の建立なり、其聖道門とは、此娑婆世界に於て、或は一生或二三生等に入聖得果する機類に對して、説く所の法教を聖道と名くるなり、いはゆる種熟

（百三十四）

脱の三獨り釋迦佛に屬する、大通結緣の諸大阿羅漢の如き者これなり、其淨土門とは、此土にして入聖得果するとあたはざる者あり、いはゆる壽命短促なる者、或智慧及ざる者、或は勝緣具せざるもの、或は怯弱下劣なる者、或は垢凡の女質韋提希の如き者、或は、解脱の因緣獨彌陀に屬する刪提嵐國の臣民の如き者、苟も淨土に往かされば必三惡に還らんと決して差はざるなり、是に於て本師了達の視る所、指して西方を示して出離の一道を教ふ、淨土の門を開く此が爲めなり、選擇集曰、凡此集中、立聖道淨土二門意爲、今捨聖道入淨土門也と云、蓋二門の教相意廢立にあり、意取捨にあり、意出向背にあり、故に初章の題額に捨聖道歸淨土と銘す、捨とは廢捨なり、歸とは歸向なり、爾れば則此初章の一段は後の十五章の張本となる知ぬべし、且夫聖道は無漏の正道なり、淨土に歸入する者永捨て取らざるなり、無漏正道猶之を捨つ、誰の人か有漏の邪道之を取る者あらんや、何をか有漏の邪道と云、曰、穢土の雜染法是なり雜染法とは惑業苦の三道なり、惑に六煩惱を根本とし、隨惑二十あり、業に十惡あり、苦は三界に亙る、法花に衆苦充滿甚可怖畏と名く、此穢土に在て凡愚の常に愛執する所なり、二河譬説に在ては此を群賊惡獸に比す、若厭離せずして親近せは、百歩の白道一歩の進趣を得す、本宗此を厭離穢土と名て總安心とす、外道の六行猶欣

（百三十五）

浄厭下の觀あり、解脱の大法豈之を寛漫に附せんや、立教の大途凡かくの如し、



開宗とは

此下、前に示せる善導觀經に由て宗を開くと云文を加ふべし

三心法話

（明治十五年五月廿三日）

至誠心

極樂往生を心かくる行者の安心に三種あり、其第一を至誠心と名くるなり、これ少もいつはりなく、此度は必らず極樂へ往生せばやと、實に思ひ定むる心をいふ、凡夫のくせとして何事もうかれて、なをざりにのみなり行くものなり、往生極樂のみが、

いかにもたしかにまことしく、是非〳〵此度は佛の本願にたがはず、上品上生の人とならんと思ひ定めて、れてたらず念佛つとめ申すべし、人のかはきたるに湯のまんと思ひ、飢たるときめしくわんとれもふにいつはりなき如く、後生極樂とおもふにいつはりなきを至誠心とは申すと祖師も傳へ玉へり、此一心あれば第二の深心も第三の回向心もれのつから備はり侍るなり南むあみ陀佛

深心

極樂往生を心かくる安心に三種あり、其の第二を深心とは申すなり、深心とは阿彌陀如來の本願は、いかなる人も念佛を唱ふるほどのもの〻往生せさることなしとふかく信じて、いさ〻かも疑はさる心を申なり、後生のことは凡夫の行きて見ぬさきのことなれば、いかゞあるべきやなどさま〴〵の疑ひのれもはるものなり、阿彌陀如來は高き深き御悟りをひらかせたまひてのち、無上の本願をたてれはしませるなるを、凡夫の迷ひの心もて疑をれこすなど申ことゆめ〳〵よにあらぬものなりと、深く信仰して常に念佛れこたらずして上品往生を欣ふへし、此深心を具すれは餘の至誠心も回向心も此中に備はり侍るなり、南無阿彌陀佛

回向心

極樂を心かくる行者の安心に三種あり、その第三を回向心と申すなり、凡夫生々世々その心娑婆世界にのみうちかたぶきて、執着のはなれさるくせある也、されはこそれの〳〵今日まで輪廻のさとにはまよへるなりけり、扨ても阿彌陀如來法藏比丘と申たてまつりしむかし、四十八の願願を發したまい、一切衆生を、西方極樂に生せしめんと申ことをきゝたらん人、こゝろを西方淨土に打ち向け、ふたゝひ迷ひのふるさとには、れもてをむけじとれもひさだめたるを、回向心とは申すなり、たとへは馬のくつわをとりて、東にむきたる面を、西に打ちむかはしむるかことしと示したまへり、この心さたまりたるところに餘の至誠心も深心も具足しはべるなり、わはれねかはくは念佛れこたらすして上品往生にこゝろさしを回向すべし、南無阿彌陀佛

法話（明治十八年八月能潤會にのぞむ）

本年の三月比よりあんばいが惡くて、漸く此頃やつと病牀を出たが、今度は餘程六ケ敷かつたが如何してか又吊ひが延引した樣だ、マアどうやらこうやら今日は久振て此へ參た、處が當寺でも、能潤會と云ふのが始まつて、雲照律師もれ出なすつて十善法語の講釋が有升と難有こつちや、どうぞ皆々も操合せて聽聞せらるゝ人は成丈け聽聞したかよい、

予も去年まで本鄉の枳殼寺へ心地觀經の講義をしに往たが、當年は未た一遍も往かない、どうも怠惰になつたのか只今まで餘り法要抔に差支た事はねへが、段々罪が深くなるのだか、當年は珍らしく百日餘り煩らうた、今十日も煩ては大變だか、今年は大きに永く煩升た、人間には生老病死と云て、生れると云ふ苦みが最初で、年を取ると云ふ苦みを老苦と云ふ、それから誰れにても有るこれを病苦といふ、それから死ぬと云ふ苦みだが此苦には出逢ねへが、死ぬるのは大分苦いそうだ、未だ死んで見ねへから能く分りませんが、併し念佛を唱へて後生を立派に樂極往生仕樣といふ志の人は死ぬる苦みは澤山ねへ樣だな、予も今まで念佛を申して臨終を受け

とう御座るといふものが有れば、何處までも往てやらうと云て往き升たが、さつぱり後生の心がなくて、石にかぢり附いてでも死んじやならぬと云た樣な塩梅に、平日心掛ける人か死ぬのは六ヶ敷いが少しでも多く平日念佛を唱へて居る樣な人は妙なものて酷く苦くないと見へる、併し身体か死ぬるといふ相談たから隨分大儀だらう、一寸風を引てさへ頭痛がする位たからなア、今死ぬといふ相談に成ては大儀には違ひない、れ經の中にもだんまつまと云ふ事が有て、死ぬる時は骨々節々を折る樣に苦むと申し升が、今まで予か見た病人の臨終には夫程のは未た見ねへ、念佛を申て居たからだろうと考へる、念佛を唱へて居るものは何んとなく臨終も樂な樣だなア、併し其人に成ちやアそんなに巨燵に煤てる樣な譯にも往くめへけれ共、傍で觀ては余程安泰の樣だ、

予が小石川に居升た時分、直き近所に江らく心易くし、歌を能く詠み、至て信心者にて、能く日課を務めた男が有升たが、不圖病症か惡くなり、格別でも無と思ていると、或日予が夜食を喰べ樣として膳を其處へ出した處へ、彼の男の宅から人をよこし、れ十念を願ひ升と云たか、直くれ十念を授けてつかわし升たら、慥かにれ十念を受けて仕舞うと家内のものを其處へ呼んで、用事は皆此御用箱の中に書いて有るか

ら、跡でこれを能く見ろ、これでもう世の中の事は云わんぞよと云て、南無阿彌陀佛々々々々と云て居る、予も其晩は九ッ頃まで傍に居て世話を仕升たが、至て安らかに往生するまで念佛の聲は止まぬ、慥なものだ、尤も年齢五十位の男たか慥かなもので御坐い升た、予も大きに感心し升た、平日餘程心掛の好い人で御座升たが、成程云ふ通り何にも用事はなかつたそうな、予も今度は年を取てマア好い加減の時で老ゐ先きもねへが、醫者が云ふには中風の輕ろいたと、成程足がぶら〳〵、それからなんだか腦に病が有ると見へ、耳が聾になりました、今談義を云ても此聲か予には聞こへねへ、妙なもんで聲が出るか出ないか分らないが、聽衆に聞いて見れは能く分ると云ふが、自分の聲が自分の耳へ聞へ無くなつた、馬鹿の話だ、これは耳が予より先へ死んたのだ、眼も少し惡るくなりかゝつて來たが、是も半分死に掛た、足もがく〳〵して居るから半分死に掛り、段々身体が予の生命より先へ往くから可笑い奇妙な者たか、予計りてはない聽衆も追々は必らずかうなる、此間或人が何にか書いて呉ろと云うから（耳根寂滅に飯す両足雙林に向ふ）と書きて遣たが、先つ耳根寂滅だ、耳涅槃に入來たのだ、足は御涅槃に入りかゝて居升、其内に身体がれ仕舞になら升、今年はもう來られまいと思ふたが、有難いことで諸君に逢ふことになつたの

は、大に是丈け結緣か殘て居た者と見へる、兼て云ふて居升たことだが、れ釋迦樣が娑婆世界に出現なされたのは衆生に成佛得道の敎へなさる思召たのう、成佛得道の中で娑婆世界にて悟りの開けぬ者ても、とうそ極樂往生して阿彌陀樣の御側へ往て悟りを開く樣に、お經でお世話なさるのか御釋迦樣御一代の御說法だ、此比は妙な世界に成て僧侶が佛法の話を俗の人に聞かせ、世間の人を善心に向ける話が大分方方にちら〳〵見へる、佛樣の思召を說て人の志を眞直になほし、人を善心に向け人を好くするのだから誠に好いことじやか、世間のことは世間の道と云ふ者かある、孝悌忠信仁義の道は世間のことだ、夫が爲めお釋迦樣も人天經を說かれたが、人間世界は一生と云ふた所が僅か五十年か百年、五十年や百年の道を說た所が大概知れた者で餘り間尺に合ない話しだから、佛樣の御本願は轉迷開悟と云ふて、世の中の迷ひの心を止めて立派な悟りを開けと御意遊はしたがれ釋迦樣の奧の手で、此ことは小乘經に出て御坐いますも未た悟りを開かねへことたから能く知らねへが、大分六ヶ敷樣子だ、其處いらにぐつ〳〵して居る中に開る樣だよ、お釋迦樣が娑婆世界へれ出ましになり、袈裟をさげた坊主を拵へ御自分でも坊主になちしやつたが、成程出家に成ると娑婆世界のことは氣樂になるから悟りも開けそ

ふなこと、迷ひも轉しそうなことで御坐ります、其ても娑婆世界で悟りが開けぬと云ふことならば、阿彌陀如來と云ふ佛さまが一切衆生常に我名を唱へれば、必す極樂へ往生させて遣はすと云ふ御本願か出來てあるか、之も往生成佛と云ふから實は餘り近ひ話ではないが、念佛を唱へる者は急度極樂往生をさしてくたさる、尤も緣なき衆生は度し難しと云ふて御緣のない人はお釋迦樣も極樂へ伴れて住くことは出來ねへ者と見へる、緣のないことには物か云へんと云ふ樣な盧梅の者で、常に我名を唱へ南無阿彌陀佛彌陀如來如何ぞ私を極樂へとこう思ひ附た者かあれば、それでよい常念我名と云ふて極樂へ往生する樣に南無阿彌陀佛と常に我名を唱へろと般舟三昧經に被仰たが、そふ云ふ樣に常々阿彌陀樣を親しく心得、他人の樣に思はず、極樂へ往くのを我家へ歸る樣に心得は、此因緣から極樂へ伴れて往くものと見へた、成程結構な極樂世界たから凡夫には行かれめへが、難有ことには御緣と云ふ者は妙な者で、僅かに念佛の御緣を結ふところから極樂往生か出來る、扨て極樂へ往て何をするそと云ふと、阿彌陀樣の傍で成佛得道の道をれ敎へくたされ、下品下生の生れでも上品上生の生れでも、何れにしても極樂の御門の中へ這入ればしめたもんだ、再び地獄へ墮ることはない、もう娑婆世界から掛取りに來る

氣つかいはない、極樂往生は仕度もんだ、娑婆世界轉迷開悟の道か出來れば之に越したことはないが、どうぞ人間世界にある間に孝悌忠信の道を行ひ、親のある者は孝行をするのが當然、且那を抱へて居る者は且那へ忠義を盡し、夫婦兄弟朋友の五倫五常の道を務るだけ精出して務る樣に心掛ける、之が人間世界に居る間の用事だ、全体三世諸佛れ釋迦樣阿彌陀樣が、世界のことを彼是話す爲に出現遊ばし、れ說きなされたことをれ寺で說法するのだから、說法を聽聞なさる人は彼轉迷開悟の道を能く聞ひて置く樣にれ心得へなさい、

娑婆世界のことは誰でも知て居り、云ふが者はねへ位だ、親に孝行しろと云ふに不孝をしてすむもんではない、又且那に不忠をしてすむもんではねへ、朋友に不義をしてすむものではない、人の物を取りてすむものはないから、娑婆世界のことを少し心掛れば澤山と惡人は出來んものですよ、而し後生の道は娑婆世界では知れんから、天照皇大神でも後生の道は敎へない、孔子でも堯舜でも後生の道を敎へる者は一人りでもないが、後生菩提の道を敎へ轉迷開悟の道を敎へたのは釋迦牟尼如來おひとりだから、此ことを能く心得て平日後生を願ふかよろしい、誰かの歌に「後の世と聽けは遠きに似たれとも知らすばけふも其日なるらん」と云はれた通りた

が、後生抔と云ふと坊主の口癖の樣たが、此後生と云ふことは今日唯今か後生たからのう、予が此前小石川に居ました時に始てれ談義を聽きに來た男が、急に鹽梅かわるくなり勝手へ參り寢て居ると云ふから、予が往て見ると六十計りの老爺で、腎きかいて寢て居りました、何んとか云たれゝ卒中と云ふ病で、腎きかく樣になりてはもうれ仕舞ひだ、それかられ十念を授けてどこの者かと云ふに、ツイ近處の者だと云てそれてれ仕舞ひよ、生れて始てれ談義へ參りてそれなりになつたのたが、誠に知らずはけふも其日なるらんと云ふ鹽梅奇妙な者た、若いが若いで當にもならず、年寄が年寄で當にはならんから、何ぞ心ある者は後生の道を忘れぬ樣にするかよろしい、又轉迷開悟の悟りが出來ん出家抔は尙ほのことた、別段に心掛けなければならんよ、去年だつたか今年たつたか、予の毎月二十三日にこちらへ來て三聚淨戒の話を仕樣と約束をしたが、もう今日は跡に能潤會のれ講釋かありますから諸君綏々と聽聞してれ出てなさい、予は是れで御免を被むる、まだどうも眼か宜くない、耳も直らんと決心たか、眼はまあ盲目にもなりそうもねへがなんだかまだ判然しません、足もふら〳〵して筋が惡くなつたか、れ釋迦樣は八十御涅槃の時分に阿難に承けたまろふ、如何に丈夫の車でも八十年使へは惡くなるだろふ、已れの身体も

八十年使つたからこはれると御涅槃のね言葉だ、予も當年八十で此二月十五日あたりには往くかと思ふたが、佛法の因緣未た寂滅の時にならんと見へて、こふやつて居る、れ釋迦樣でさへ其通り故、とふぞ皆も身体を大事にしてれ念佛を申すにも說敎するにも、今日人間の道を務るにも、壯健でなければいかんから、精出して養生して壯健になつて、今日抔は別して身体を損しない樣にして、コレラ杯にならん樣にして、皆れ務めなさい、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

（述記者其年記）

四恩の辨（明治十八年十一月能潤會にたゐて）

當月廿三日は、今年の仕舞の別時だから來よふと思ふて居たが、予か寺の加行中に騷るので來られない、然し今日は幸ひ能潤會の御講釋が有るので引上げたそふで、命がわるか何うだかわからねへから先づ今日來ました、又來年の春から湯島の明道協會で心地觀經の講釋をして呉と云ふことだから、命があつたら講ずる積りだが夫も出來るかどふだか、扨心地觀經と申すは八卷有て長ひお經だ、此初に報恩品と題して四通りの恩を報せよと云ふことを釋迦如來がお說き遊はされた、其四通りの恩とは、第一に父母の恩、第二に衆生の恩、第三に國王の恩、第四に三寶の恩と云てある

（百四十五）

扨此中の第一父母の恩と云ふこは申す迄もねへ、各々承知で有らふ、孝は百行の本と云ふ、又忠臣は孝子の門に出ると云ふ善根の本だ、是は第一に報しなければならぬ、第二に衆生の恩とは、一切衆生の恩があると云ふことを能く承知して、之を報せねばならぬとだ、今日は此衆生恩の文を說き聽かするぞ、是は互に生れ替り死に替り、生々世々恩を受て居るのだ、或時は親子となり、夫婦となり、兄弟となり、或は君臣となり、犬そうな恩を受て居るのだが、之は誰も知らねへ、佛樣ばかりよく御存じだ、今現在にて云へば世間で食する米を作る、此は農夫の恩がある、住居には家を造ると云ふ、職工の恩かある、衣服には糸を引て織物を織ると云ふ、織職の恩がある、ソウ云ふとそれは錢で買ふと云ふが、然し其錢もかねも國王から民に通用せよと云て附與して下されたからお役に立たのだ、第三國王の恩、第四に三寶の恩、此は今日は言ふまひ、彼の犬でも何か少しばかりの喰物をやると、尾を振りて喜ふ、是は恩を知て居る樣な塩梅だ、虎や狼は如何やらん、人間は萬物の長たから畜生とは違ふ、是非恩と云ことを知らなければならぬ、知たからには報しなければならぬ、先づ結緣の

（百四十六）

爲に第二に衆生恩と云ふ文を讀で聞かせう、「善男子、衆生恩者、即無始來一切衆生、輪轉五道、經百千劫、於多生中、互爲父母、以互爲父母故、一切男子即是慈父、一切女人即是悲母、昔生々中有大恩故、猶如現在父母之恩、等無差別、如是昔恩猶未能報云云」、ありがたひお經だ、夫に付予は昔し噺しをしてきかそふ、予は子供の折から艸草紙が好きで能く讀んだが、山東京傳と云ふ人の作者に甘心のことが澤山ある、此本の中に昔てあるが、昔し貧乏人の獨りものが餘程善き夜食をたべると云て、飯器を出して見たが、澤庵斗りで外に何んにもねへ、煮豆一つもなひ、そこでつまらなひことだと思ふて、茶のわく間、飯器にもたれて居眠をして居たところへ、人が一人來て扨云ふには、私の内へれ出で、御馳走仕樣、と云て連て行たが、是も何もねへ、ソコデ夫から米を作り、菜大根を作るやら、大騷ぎをして、漸く秋の末に、米も何も歟も調ふたが、水がぬへ、ソコデ井戸を掘て水は出たけれとも、釣瓶かなひ、手桶がなひ、膳も、碗も、箸もねい、釜がない、是は大變だと云て、早速行德の樣なところへ行て塩を焚て以て、來て澤庵も漬けたが、また足りねひ物かある、茶かなひ、土瓶茶碗かねい、薪かない、夫から宇治の里へ出掛て茶を摘て來て拵へた、山へ行て木を伐て來て薪も拵た、夫で漸々今度は万端調た煮焚もすむ、澤庵も漬ひた、サアお上りなされと云はれて、驚愕したので

眼か醒たところが、夢であつた、矢張自分の内で飯器に依りかゝつて居眠りして居たのだ、昔盧生と云ふ人が邯鄲と云ふところの茶店にて居眠りをして、八十年の夢を見たと云ふが、夫れに似た話しさ、ソコデ右の先生の思には、扨て斯ふ夢で考へて見ると、米も野菜も容易に出來ぬものだから、澤庵一切でも粗末にならぬと云て、大層うまく食たと云ことが書てある、昔は米を菩薩と云て大切にしたもんたそふな、成程人を助ける謂れであらふ、瑜伽論だかに法滅のことが說て有た、中に命が百年に一つ宛減て人壽十歳となると、五穀かサッパリなくなつて木の實か何か食て居る樣だ、夫も今の梨や柿の樣にうまくはあるまい、其比は生れて五六ヶ月にして最早嫁聟に行て、十歳位で死ぬると云ふ、左右云ふ時に人が馳走の最上は何かと云ふに、先祖の墓を掘て、骨を取て之を吸物にして、吾等が先祖は米を食たから、油が有て至りて好き味がすると云ふそうだ、困た談だ、さあ若し其頃に米の二粒か三粒もあれば如意寶珠か佛舍利の如く崇敬すると云ふことだ、夫に引替てみると、當今の人は眞に勿躰なひことだ、是で衆生の恩と云ふことを得心なされや、米は米屋にある、糸は糸屋にある、壁は壁屋にある、金錢は佐渡にあるなど丶云ふかしらんが、扨て金を掘出すと云は、咄しを聞ても恐しい怖ひものだ、命掛けの者だそうだ、其人足など

は、迚も長活は出來ぬと云ふ、其難義して掘た金を天子樣から下されたから、米も藏も住居も着物も買はれるのだ、天子樣の御恩は大切至極のものだ、又其金が有ても賣人が無うては矢張困る、吾店の品物も人が買て呉れぬへでは活ては居られぬ、妙なもんだ、誰も彼も自分の妻子兄弟には實情を運ぶが、向ふ三軒兩隣りはもう他人だ、況んや見ず知らずの人は猶更不實をする者がある、丸で凡夫だから一向分らぬのだ、世界中の人には外國の人でも何んでも皆同じく恩がある、孔子樣も四海の內皆兄弟と云はしやつた、一切衆生のお蔭で各々生活するのだ、之を御經には與力の增上緣と云ふ、此與力の增上とは俗に云へば世話をして呉れるのだ、增上緣に不障の增上緣と云ふがある、邪魔をせぬのぢや、邪魔をしてくれぬのが御恩じや、此樣なことは佛樣でなければ知れぬへ、先づ與力の增上緣とは米屋も味噌屋も大工左官も賣るも皆せはになる是れが與力の增上緣、不障の增上緣とは人の身中に八万個の虫が有と御經に見へるが、實に穢なひ人間のからだぢや、中に五尺も一丈も有る虫があるそうだ、表向は美しひ人の樣だが、腹の中は畜生道だ、言はゝ予は地主で腹の虫は店借だ、是が腹中で角力でも初めたり喧嘩でもしては大變の相談だ、地主でも活ては居られぬへが、幸ひ靜かにして、居るので少しもこなたの身に障らなひ、

それで不障の增上緣と云はれる、こんなことは誰れでも氣の付ぬ事よ、山に惡獸が居ても出て來て人を害する程の事はなぬ、是皆不障の增上緣だ、知るも、知らぬも、万國の人にも隣りの人にも、悉く與力と不障との恩が在ると思ふがよい、一切衆生の恩と云ふは是じや、御經に父母となると云は重恩について云までの事なり、昔の世に親となり子となりたり、互に報せずんばあるべからず、此の如き事を衆生の恩と云、此四恩は一切衆生平等に荷負すると說て有るから、誰れでも人と見たなら必ず恩ある人と見て報じなければ佛にはなられぬへ、阿彌陀樣でも釋尊でも、昔は凡夫で皆同じ事だが、此恩をよく報じ盡して佛に御成りなされたから、各々方も世間の人へ不義理をせぬよふに、又人に不實と云はれぬように、大切に心頭に掛け、後生菩提の爲には、御念佛を精出して稱へなされ、今日はこれで仕舞ます、命があつたら又來春あいましやう、是から皆へ一切衆生の爲に回向の文を授けるぞ、願以此功德、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國、南无阿彌陀佛、々々々々々々々、能潤會は幸ひ雲照和上も出席あるから、追々授戒を願うように致したひ、此間三井寺の敬德和上の所へ亞米利加人が二人來て授戒を願ふた、其名を忘れた、外國人も此位の志はある、內國人にしてどうぞ正法に結緣あるやうにねがはし云云

法話

（明治十九年一月能酒會にかゝて）

去年は久しく煩うて、三月から九月頃迄病蓐に居つたが、年も寄つて居るし多分去年はれ暇乞になるだろうと極て居たが、壽命と云ふものは妙なもので死ぬ時分が來ないと死なれなひものだな、最も私も當年は八十一と申年だから餘程生き過ぎたが、最う疾に行つても宜と心で考へたが仲々死なれないな、妙だな、今日も茲へ斯う鳥渡罷出る樣になつて皆に逢ふと云ふはまだ緣が盡きなひと見へたな、世間の者が佛樣へ向ふと息災延命家内安全の安穩を願ふと申は極まりだ、一躰慾が深いから何時迄も生て居たいと思て居るか、何時迄生ても私の樣に長く生て居ると可笑も面白もない、いや最う薩張君か代は千代に八千代の歌もあるか虚たな、皆年を寄つて千年も万年も生て堪るものではなひ、去年は不快で暫く引籠て居た故か醫者樣の云通り耳が薩張聞へなくなつて、眞實の聾になつて些つとも人と話しも出來ぬ、夫から中風の樣なる塩梅で足かふあ〳〵して歩行に人に手を曳ひて貰はなければ劔呑た、此位ひなものだ夫から年を寄ると何もかも皆然たが、記臆が悪くなる、何も彼も若い内とは變るな、物を食うにも若い内は何を食つても甘かつたが、近年は何たか餘り甘くない樣に思ふ、醤油ても悪くなつたか物か甘くないか、さう云ふ譯ではないが、何ふも昔し食つた樣に甘くない、夫は甘くない筈た、舌が聾た、聾は耳ばかりと皆は思ふか、さうではない目も悪くなるのは目か聾になるのだ、年を寄り物が甘なくなるのは舌が聾になるのた、夫から香なそ煙ても昔しは直に香の香ひかして、之は伽羅か沈香か位ひは解つたが、夫が年を寄ると薩張香ひがない、餘程鼻の傍へ押付なけれは香ひがない、これは鼻か聾になるのた、奇妙たな、其替り肥取なぞが先へ行つてもとんと香ひかないから其時は少し宜けれとも、香の香はんから面白ない、昔し香を敎へる師匠樣か私に香の指南をする、其時分初めて何の彼の と二三度香ひは、最う此れは何々と呼き分る其時分は直きに解つたが、今は香だか何たか薩張知れぬ、夫れは耳の聾になると同しく目か聾になる、舌か聾になる、身体も浮羅々々として何ふも加減か悪ひのは身体が聾になる、奇妙なものだ、さう云ふとは側のものは鳥渡も知らないが、何時迄も同し樣に思て、家内安全息災延命百年も二百年も生たいなぞゝ云ふか、何うして百年も二百年も生て見たなら、此上何んな聾になるのか知れはしない、まあ宜加減に片付くか宜と云つても、死ぬ時分が來

なければ死なれもしないで、仕方がないからして年を寄つて居るのよ、年を寄ると嘻しくも可笑くも面白も薩張なひ、何かを見ても面白くなく、れ經ても拜見して居る迄のと、世界中のとは面白くない可笑くもない年の故たな、之れは五十年なり八十年なり生る丈の株か在つて生きて居る、其生きて居る間は何ふやら斯うやらして居るが、段々末になると追々身体が悪くなり、かんがへも悪く、老耄すると云ふて何も彼も忘れたりするから詰らぬ、こんな處に百年も貳百年も置かれては隨分迷惑なものと思ふが、年寄抔は平常から、やわ此孫が十五になる迄生きて居ないと困りますとか、嫁を取る迄生きないと困りますとか、爺々婆々がそんなとを云ふが、そんな株抔はない筈た、生きて居なければならんと云つても、生られなければ何うしたもんだ、そんなとを云つて娑婆世界に何時迄もかじり付て居るとは出來ない筈だから、年を寄つた人は格別若い者でも生死は受合うとは出來ぬ、別して年を寄れは御同樣に今晩も知れぬ皆さう思つてれいでなさい、明日も知れないに來年のとを云ふと鬼か笑ふと世間の諺に云ふが、なに來年處ではない明日のとを云つても鬼が笑う、中々明日のとと僅か饒舌つて云ふ位ひのものだと心得へるが宜しい、皆後生を願へと云ふ筈た、後生は何卒願へと云ふは、三千世界に釋迦牟尼如來より外

は後生の噺しはない筈と心得へるが宜い、唐で孔子樣は聖人たが後生の願は敎へない、日本の大神宮樣は有難いけれとも後生の願は敎へなひな、後生を願ふとはれ釋迦樣に限る、のう皆なさう思ひ、後生を願ふ者と極て居る位ひのものだ、後生を願ふことは毎度話をする通り、後生と云ふとは何も佛法で云ふ計りではない、今日から見れば明日が後生だ、今年から云へば來年が後生だ、今生から云へば未來は後生だ、少し長いと短ひとだけのとで、後生と云ふものは宜加減に薬てゝ置くものではないと云ふとを能く心得ませう、在家のものは何うも死んだら死んだ時のとよと云ふが、冬のものは夏の内に拵へて置くのだ、寒くなければ寒くなつた時のとよと云つて置けば、冬に成ても未だ綿入が御座りませんと云ふと先きへ行つて困るからな、何んでも今から後生のとを心得て、ちやんと死んで行く未來の後生は今から仕度をしなければ行かん、年寄は是丈の仕事だ、と爺々婆々は別して夫れを心得てれいでなさいよ、今から何をしても最う外のとは碌々能く出來はしません、何卒南無阿彌陀佛と念佛を唱へるとを忘れないで唱ふる樣にしませう、在家の衆は別して何にも立派な修行は出來ません、見世番もしなければ成りません、飯も焚なければ成ません、忙がしいが南无阿彌陀佛は何んな忙がしひ中でも出來るぞ唱へらる

ゝぞ、仕事を仕ながらも飯を焚ながらも掃除をしながらも唱へらるゝぞ、佛法は修行が肝要だが、口でも修行が出來る、併し口で計り南無阿彌陀佛と云つても心が眞實でなければ益に立んと云ふけれども、阿彌陀樣の本願は先づ口計の修行だから心の方のことは何んと思つて居ても宜御座います、身体は何んな忙がしくても南无阿彌陀佛と聲が出て口で唱ふるのが是れが後生極樂往生の修行門と云ふものだ、能く皆覺へて居るが宜い、死ぬ時分十遍唱へて必ず極樂往生せよと阿彌陀如來の本願だ、南无阿彌陀佛と唱ふれば極樂へ向ふと云ふ其處が佛の願ひと仰つた、念佛が修行だ、且又易行易修と云て誰れにも稱へらるゝものだ、じやに依て、精出して念佛を唱ふる樣になさい、去年十一月私の處へ來て剃髪を願ふ爺が御座いました、之れは昔し云つて見れば俠客と云つた樣なるものだが、麴町の方に居た爺で、何と云ふか名は聞ましたが忘れたが、何ふしてか妻が死に後生を願と申しました、宿緣と云ふものだか何んと云ふものだか、私の方へ剃髪の式を願ひます、と斯う云ふことを信徒者の方から云つて來たから、珍らしいとだ、連れて來るが宜ひと云ふて遣はす處が七十計の達者の樣な爺々て、夫から剃髪の式を授け、髪を剃て丸くなり、珠數と日課を授け、夫から一遍禮に來ました、有り難ふ御座いますと云つて來た、夫からま

あ念佛を唱ふるが宜、今に死ぬぞと云つて遣りましが、一昨日か死去したと申て來たから、はて不思議なことだ、先々月十一月末に來たものが四十日經たない內に死ぬと云ふのも不思議なことが有つたものだ、因緣と云ふものと見へたな、其爺々が今迄は少しも佛緣のない爺々だが、何ふしたか風と出て來て剃髪の式を受け、念佛を申すことを習つて、夫から死んだが妙なものだから皆阿彌陀樣の因緣のある處だ、何うやら後生は極樂往生すると云ふは今日迄の宿緣と見へる、因緣のあるのかな妙なものたな、皆うんな譯のものだから何卒精出して念佛をして、最う長いとはないからさう思召してれいでなさい、今日は又雲照和尙と護國寺の和尙樣の因明の講釋がある、因明は六ヶ敷い、私抔は因明の話しは蒼蠅が能く皆聽くが宜い、之れは御釋迦樣が外道退破と云ふて九十六種の外道を破りなさる時分入用の道具だな、夫より和尙は十善法語と云ふ有難い本を講釋します、

私も昨日から又十善法語の本を少しつゝやる筈にしましたが、私も二三年前から讀る居る、和尙樣に鳥渡伺たが、十戒を乞ふ者は直に授ても宜と云はれたから、皆も受けられる方が宜からふ、五戒位は年を寄りた者は別しての一こと、願て受けられるなれば受けて置くがよい、

佛法は今の學問の樣になつたけれども佛法と云ふものは修行が佛法だな、文殊經にもあるが佛法の學問は修行が學問だ、今の世には書物を讀で物を覺へて之で濟むと云つた樣なる塩梅だが、實は佛法は本を讀むばかりではない、論語を讀で御覽ん、孔子でも行て餘力あるときは以て文を學ぶと云辭がある、あれを講釋して見れば宜い、行ひと云ふは孝悌忠信だ、夫れを行て暇があるなれば學問でも文章でも書くがよいと孔子樣さへ敎へた、左れば儒者抔も實は學問ではない行にあるのだ、儒者でも此位のことを云ふのだから、佛樣の道は尙更何卒後生を願ひ何も娑婆六道の因緣を知らなければならん、只念佛を申すが宜い、又戒でも受け度い者があるなれば幸ひ和尙が入つしやるから、態々遠くまで行くのではない、茲にて願へは直にも出來るから皆受けたいものは受るが宜い、御釋迦樣在世に或る羅漢樣は何にも知らぬ愚な人で有つたが、何も知らぬ愚な人で和尙に出家になりたいと云つた、さうすると和尙はなに手前抔がと不愛想を云はれて外に泣て居た處が、夫れを佛樣が聞て可哀相にと思召して、夫から佛樣の御前へ召して出家に成たいかと仰しやつた、さうすると何ふぞ出家仕りたいと申すと、直くにれ許し、なさつたから有り難く存じて出家したが、佛法のことを敎へても一つも覺へないから、和尙さんがれ釋迦樣

に申して何を敎へても一つも覺へないと申し出た、さうするとれ釋迦樣は其羅漢を召して箒と塵取をれ授けなすつて、手前何も出來んから掃除をしろ庭の掃除の役をしろ、是れは箒と云ふ者た之は塵取と云ふ者た、これて庭を掃除するのだと佛樣か敎へた、處が畏まりましたと庭へ塵取と箒を以て出たか、翌日に成て又其羅漢がれ釋迦樣に之は何と申す者てすと伺ひますと、之は箒と云ふ者だこは塵取と云ふ者だ、これは何に致すものて、これは掃くものだと斯う云ふ塩梅に幾重も仰つて、毎日箒と塵取の講釋を聞て居たのう、其内に殘らず行を得道して第一の羅漢悟を開いたが有り難いことで維漢は外のことは何も出來んが眞に佛法を談することは立派にれ出來なすつた、夫れは佛法は學問に依らず修行に依るので、毎日箒と塵取を持て之で佛法の塵を拂ふて塵取の中へ入れて捨てることは佛法の悟りが開けたのだ、そう行かなければ佛法と云ふものじやない、跡にまだ講釋もあるから私は最ふ之れて澄ふ、又來月迄生きて居たら來月も來る、殊に依ると芝を隱居すれは此方へ來て此處の食客にならふかと考へて居るのだ、さうすると話を些と能く聽せる事が出來るであらふ、夫迄生て居られるか生て居られないか知れないが、遠からずそんなことになるだらふと思て居る、又れ目に掛ませう南無阿彌陀佛々々々々々々

答客問

第一問　佛敎に久遠と云ひ、無始と云、言別意同なりや、

答、久遠の名目は、壽量品の如是我成佛已來甚大久遠壽命無量の文に出てゝ、其原近成の伽耶成道に對して、遠近相對の說より出たる言なり、無始の名目は三身の中の絕待の法身理体を註するの言にして、對待の義には關係せざる名目なり、併しながら三身相即の義もあれば、永く離れたるものにはあらされども、問者の如く言別意同と心得ては、義解泛濫の失あるべし、且つ天台大師の御釋にも、此品詮量、通明三身、若從別意、正在報身、以此推之、正意是論報身功德也、と釋し玉ひければ、壽量品の久遠の語は、報身の德稱にして、法身の上のことは且く論及せぬ方に就て解すべきにやと思はる、壽量品の文句を研尋すべし、

第二問　人身の本原を原して其極点に達すれば、眞如如來藏より迷ひ出づと云然れば忽然念起の無明の緣によりて、眞如隨緣不守自性の故に、眞如の擧体動して、萬法依正、吾人の如き迷凡となると云はゝ、吾人今日如說修行して佛果を悟るも、

（三百五十八）

亦再び忽然念起の無明の緣によりて迷ふとの期あるべし、何となれば、等覺の後心妙覺智現前して元品の無明斷盡すと云も、性相已上には無明因なくして起る（義記下卷大疏六上）と立れば、未來亦無明忽然念起不可と云へからず、此無明豈獨眞如を緣せざらんや、然而して此無明も亦眞如を障る時は迷ひの凡夫となるとなしと云ふべならず、之に依りて此をみれば、再迷の理分明にして亦疑へからざるが如し、請これを詳細に答話せらんことを切望する者なり、

答、此問難數行あれとも、其詮悟後却迷の一句に止るか如し、問者は起信論に就て偶然此疑問を生したるなるべし、凡そ諸佛の經敎數塵沙に超たるも、始中終悉く轉迷開悟の一節を出るものなし、故に楞嚴經に、十方如來同一道故、出離生死皆以直心と說けり、

乞試みに求めよ、一切經中轉迷開悟の外轉悟開迷の說ありや否や、亦試に覓しめよ、三世諸佛、十方如來、誰れか究竟覺の後に在て再び凡夫位に還來せりと云ことありや否や、若夫然らば眞如法界も、亦惑業と同しく、流轉輪廻の一玩弄物なるのみ、何の尊重珍敬する所かあらん、圓覺經、金剛菩薩品曰、一切世界乃至種々取捨皆是輪廻、未出轉廻而辨圓覺、彼圓覺性即同流轉、夫眞如緣に隨て無明に熏すと云へることは、金剛已

還の一切衆生に約して之を說くものにして、始本不二の曉に在て其出入を裁すべきものにあらす、是を以て雲駛ければ月運ひ舟行けは岸移るの喩へを以し、或翳眼空華を視るの喩を以し、或は睡夢大覺の喩を以てす、みな是因中自ら妄見するの喩說にして、一物あつて爾らしむるの喩に非るなり、苟も覺悟の後に在て果して夢あらせは、三祇劫の苦行、五十位の階級、すべて無益無用に歸す、何そ夫一戲論を演するや、蓋し覺後却迷の一論は、獨り問者の忽然念起の一無明ならくのみ、昔は唐の復禮法師、眞法性本淨の問を擧て試に天下の學者に質されたるに、當時の名德各答釋を作らる、說に長短あれとも未だ眞如再迷の議なし、學道の行履、至論の樽俎を越さるゆゑんなり、方今澆季、學道頗る頹廢に至る、然り而して問者の擧難、頗る珍奇、尋常の學人の多く言はさる所なり、此士にして年月を積なば多少廓然の時あるべし、此人何宗の人か、僧か俗か、其齡のいくばくなるを聞かまはし、此ころ能潤會衆の請に應して聊か其れもふ所を述ふ、幸に可否をめくまれよ、

明治十九丙戌四月　　三緣隱士說、門下小比丘循誘筆記

三世因果

三世因果の道理と申す事は、凡夫世界の人の絕てしらざることにて、これは三世諸佛の百千劫の修行にて、さとらせ給へる御說法の不思議に今の世に殘りて、宿善の人々には、まれ〳〵に承はることとなりかし、れよそ誰々も今生一生のとは、みな〳〵むかし〳〵の宿德にてあらはるゝものなる事は、愚老が今日までの年、今日までの果報をみてもしるべきなり、後生のことは今生にて宿善を種植せざれば、九品の花の臺なぞと申すことは叶はぬことなり、これを御經共にかねて說かせ給へるゆへに、たれ〳〵も南無阿彌陀佛と唱ふるぞ往生のたねとしらせ給へり、今年まで世にあらんとは思はざりしを、又筆染てかくなん。

けふもまたみそれふる寺寒けれは、
　圍爐りのはた火たきくらしつゝ。

宗旨之事

宗旨の宗は尊なりと註して、所謂各自に尊崇する所の趣旨なるものを指して宗旨と云ふなり、されば米屋は米を以て其宗とし、豆腐屋は豆腐を以て其宗とし、豚屋は豚を以て其宗とすと云ふても云はれぬことはなし、何でも其人の尊むところが宗旨なり、念佛を尊ぶから念佛宗、法華經を尊ふから法華宗なり、

是を以て今や佛法の全體から云ふときは、佛法は元來無宗旨のものなるべし、請ふ試に之を問はん、釋迦世尊は全體何宗の御方なるや、淨土宗なりや將た禪宗なりや、又極樂世界は全體何宗の境界なるや、天台なるか眞言なるか、又阿彌陀如來は全體何宗の御方なるや、眞宗なりや又日蓮宗なりや、恐くは此の三共に念佛宗にも非らず將た法華宗にも非らず均しく無宗旨なるべし、我れ未だ其何の宗旨たるを聞かず

されば維摩經には如來一音演說法、衆生隨類各得解と說かせられて、宗旨なるものは抑も其初には無くして其後に至て出しものなり、故に宗旨は能說者の方には無くして、聞くものゝ方で宗旨が分るゝものなりと知るべし、昔し佛在世の時には大

衆皆各々六和敬にして、曾て其相違を見ざりしが滅後一百年の時に至て、大天の五事より、大衆、上座の二部が分る此二宗か宗旨の分れ創めし根源なり

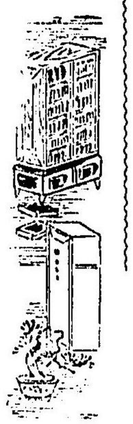
然りと雖今日の如く、既に數多の宗旨が分れ來りし上は、强ち之を咎むべきにも非す、特に又斯の如く分るゝに就ては、各々其宗々に於ても並其旨趣なきに非ざれば、佛は豫て之を如折金杖とも說かせられて、一本の金杖を幾個にも折りたる如く、設ひ宗旨は何程に別るゝも、彼の切斷されたる金杖の更に其金躰を失せざるが如くなるべきものなればなり

さりながら其我宗見は全く廢止致したきことなり、兎角に宗見に着すると自宗の見が誇りたくなるものなり、自宗の見が誇りたくなると他宗の見が惡く云ひたくなるものなり、然るときは併好と酒飲との喧嘩の如く相互に惡しく云ふて各其好む所に於て僻し其好まざる方を惡口す、其甚しきに至りては、併好な者が酒飲は醉て喧嘩をするから惡いと云へは、酒好な者がいやとよ此頃は併に醉ふて喧嘩した者かあるなぞゝ、あられもない事を云ふて諍に至る、併し何程併が好きなと云ふてもまさか婚禮が雜煮では濟されまじ、矢張婚禮は酒を用ひて元日は雜煮を用ひ、元日と婚禮とは相互に持合ねばならぬ者なり、此理を能くゝ會得せば自から我宗

見のある可きやうもなかるべし、

若し夫れ我執見のなき宗論ならば所謂君子之諍なり、論すへきは之を論し、難ずへきは之難ずべし、但し彼の勝敗を期し衣を褫ぎ袈裟を奪ふが如きに至りては斷じて許さゞる所なり、否な此の如きは此れ我見にして決して佛法には非らず、外道なり、深く省慮すべきことなり

依て今ま茲に佛法は元來無宗旨なる所以を詮示して、動もすれば世の教法家中唯た其宗見のみに執着し、其我見を指して此れが佛法ぢや、此れより外に佛法はなひなどゝ云ひ立てゝ我が佛法の全體に眼を注がず、折角廣大の佛法をはげちな佛法と爲してしまふて其宗意を誤り、且つ斯佛法の大體を失して、識らず知らず佛法に非ざる外道となり了るものゝ爲め、聊か予か婆心のほどを述るのみ、幸に佛法の全體は無宗旨なりと云ふことを先つ學佛の土臺と心得られ、各宗一致して六和敬の旨に契當し、誠に頗る廣大なる佛法を擴張せられ度希ふ者なり



諸佛通誡

諸惡莫作　衆善奉行
自淨其意　是諸佛敎

右四言四句を諸佛通誡の偈と稱し、又は七佛通誡の偈とも呼ぶ、過去の古佛(七佛中第六佛人壽二萬歲の時に出づ)迦葉佛の所說なるよし、增一阿含經第四十四(五紙)不善業品に見ゆ、大乘部中には涅槃經第十四(四紙)梵行品に出つ、釋迦佛を初め十方三世の佛多しと雖も、千百の說法すべて此四句の外に出るものなし、天台大師小止觀の開題にも、此四句を出す、蓋し十乘廿五方便の張本なるを以てなり、若し此の外に說く所あらば、皆天魔說外道說と定む、現今佛敎經卷の多き、我日本皇國に存するもの、凡そ六千餘卷あり、陳の眞諦三藏の說に依れば、我が天竺より携へ來りし者、此を悉く翻譯せば、凡そ漢地の典籍となして二萬卷にあまるべしと云へり、近來邏羅人の說を聞くに彼邦の佛敎經卷萬卷、一世を盡して讀がたしと云ふ、古三藏の傳說を聞くに、法華經の一本、凡そ一由旬の城に充つべしと云へり、其言荒凉に似たりと雖、其跡必ず爾るべし、大機大根性の人に於ては、敢て疑ふに足らず、蓋し一閻浮提五六

大洲の間に於て法門の廣き演說の富めるもの、特り釋迦牟尼佛を以て最上第一とす、四韋陀の大敎數百萬言あるも、未だ一分量を抗するに足らざるなり、夫れ是の如く經典の廣く且つ多しと雖も、其所詮は此僅少の一四句一十六言の外に出るものなし、いはゆる之を舒れば六合に彌り、之を卷けは退て密に藏るの謂なるのみ、本來大小一理にして、卷舒不二の道理に出づ、喩へは人の智慮の胸間三寸の間にあり、或は頭惱一片の中に依る、然り而して之を上に舒れは日月星辰を測量し、之を下に布ては江海山野を縮度す、春夏秋冬の四季を調理し、東西南北の萬國を來往す、瀛船の疾き電信の速なるより、百般の技藝其視る可からざるものを見、其知るべからざるものを知る文明開化實に驚くべし、孟子曰く後世畏るべしと、眞に誣ざるの言なり、今を以て後を想ふに鵬翼に駕して須彌に昇り、龍背に坐して龍宮に到るの術を考覈せんも知るべからず、若し夫れ典籍の之が考案を記錄するものあらば、此を容れんに一由旬の城にも尙餘りぬべし、然り而して如是千般萬事、之を國家安寧の一語に收む、此を眞正の道理正路公道とす、若し誤て之を利己主義を以て行はゞ、外道と名け、若し誤て之を暴惡反逆を以て行はゞ、天魔と名く、世人我佛說の廣大なる、道理の深遠なるに惑ふて、謂て荒唐の說となし、言て方便の說となし、言て信ずべからざ

るの說となす、固より智力の短にして思考の及ばざるに出つ、夫れ人は萬物の靈にして、其知識を擴充するに至ては、其窮極なき者たり、苟も今日開化域中に生れて、此明了豁達の佛說の正理大道を視て、猶疑端を懷く者は、牛羊の眼を以て、邪正を辨せざる者に喩ふべし、四句の偈を演說するの前段、此を述るものは、喩へば滋養の飲食を以て、飢渴を療せるが如し、謹て佛敎の實理を演て、眞正の知識を喚び起さんとするがためなり、

次に諸惡莫作の一句を說くべし、字書に惡の字を、不善なりと註す、又醜陋なりと註す、醜陋とは、見にくゝ、聞にくゝ、言にくき事なり、不善とは都て不都合なること、不便利なること、不自由なること、不出來なることを云ふ、手習せねば文字が不出來なり、見にくきなり、學問せねば天下の道理に通達せぬゆへ、何事にも不自由なり、不便利なり、技藝百般の道も習はざれば、不便利なり不自由なり、此を俗に下手といひ未熟と云ひ、不熟練と云ふ、皆よくなきぞ、下手をなすなと云へるは、此諸惡莫作の敎也、此こと獨り佛法にて云ふのみならんや、世間すべて此を莫作と戒しむるなり、佛法もし非ならは、世間も亦非なるべし、世間の戒しむる所即ち佛敎の戒しむる所なり、但し此諸惡の言に輕あり重あり、輕き者は一止一作、前に述るが如き物にて知るべし、

其重きものをいはゞ、父母に不孝なり、君上に不忠なり、國家に不利なり、倫理を壞るなり、人を損害するなり、物を盜むなり、反逆を企つる等の如きを重に屬す、其餘官令に出る所の違式註違の如き、其中聊か輕重ありと雖、皆これ今日人民の爲に戒しむべき、此世間教中の諸惡莫作なり、佛教中に說くは、小乘には輕重合して二百五十あり、之を二百五十戒と云ふ、大乘には輕重合して八萬威儀戒品あり、これ我が諸惡莫作にして、即ち世間の刑法律令等に變ることなし、違式註違に異なることなし、此の諸惡莫作を之を世間の牧民家に在て敎誡するを律令と云ひ、佛敎中に在て敎誡するを佛法の戒律と云ふ、官家敎家其人を殊にすれども、其敎法の趣く所に差異あることなし、誰か云佛法信ずべからずと、佛法もし信ずべからずんば、世敎も亦信ずべからざるか、萬々此理あることなし、但し佛法に在ては、此惡業の精細を說き、根種を斷絕するの道理を說くにをける、幽玄深妙實に凡夫の計り知るべきにあらざるを以て、尋常の庸輩此を解會すること能はざるを以て、卒然として疑を起すのみ、卵を見て鷄にあらずとし、寸松を見て棟梁の材を疑なり、佛敎中十惡業道の名目あり、其中一切の惡作業を收む、此を惡因と名く、世間に在ても惡因あれば必ず惡果を酬ふ、今日の人、專ら事物の結果を說く、萬人一生にして必ず結果ありと云ことを得ず、而

して結果なきこと能はず、必ず之を他生に說かざることを得ず、之を他生に說くを、三惡道と名く、是徒らに人をして恐れしめんとして此事を設るにあらず、理自から此苦相を現するなり、之を唯心所造といひ、之を因果必然と云ふ、凡夫眼力短かし、此長時を見ること能はず、疑て未來なしといふ、地獄を虛設なりと云ふ、何ぞ智力の開明にくらきや、開化文明の人は道理に暗からず、進步博遠の人は舊迷に滯ふらず、幸に正道に就て沈思を加ふべし、

諸惡莫作の一句は前に既に之を說く、今當さに衆善奉行の一句を說かん、衆とは諸と同じ、衆多の義なり、善とは說文に吉なり、玉篇には大なり、廣韻には良なり、書の湯誥には天道福善禍淫といへり、福善すとは、衆善奉行の結果を指し、禍淫すとは、諸惡莫作の結果を誡むるなり、奉行とは、奉は說文に承なり、禮記には長者與之兩手奉之といへり、行とは、爲なり成なりとも、又用るなりとも註し、又使るなりと註す、今の世に行ふとよむ、是れなり、行ふとは、つとめて之をなすことなり、人と生れたらん者は、生涯百年善きことをのみ、つとめて之を行ふ事の出來る德を以て生れたるなれば、朝に夕に善事とあらんほどのことは、身に及ぶだけのことは、勤めて行ふべし、犬猫の畜生道の身を受ては、決してよきことを行ふことはならぬなり故に孟子の告子篇

に、人性之善也猶水之就下也と示されたり、又同じ盡心章上に鷄鳴而起孳々爲善者舜之徒也とも、亦欲知舜與跖之分無他利與善之間也と示されたり、舜とは上世の大聖人なり、跖とは盜跖とて昔の大盜なり、利とは私利とて已によく、人にはあしき方にのみ思ひ入て惡行を働くなり、善とは已れにも人にもよきことにのみ心を入れてつとめ行ふなり、已れが勝手我儘の都合のよきことにのみ、心をも身をも行ふが前にいへる諸惡の方ならん、されば之を誠むるを人と云ひ人の行と云ふ、今の衆善奉行の句なり之を古の聖人は、道とも名け、仁義禮智とも名けて敎へたまへるなり、畜類も毛衣羽衣をきること人の衣を被ると同しことなら、それ〳〵に食物ありて、命をつなぐことも人と同しとなり、草木水陸の際を宿として栖むとも人と同しとなり、唯孝悌仁義の道をしらず、善を修することを知らざるを畜生と云、人として此の善道を行ふことなくして、只衣食住のことにのみ、心身を苦め、人の衣食住をも奪ふ樣なることになりては、畜類とかはることなければ、之を人面獸心と云、耻かしきことにあらずや、是れ特り我大日本のみならず、五大洲の廣き百千年の末に至るまても、此理は少しも替らねば、何れの國にても勸善懲惡の道を說かざる所あることなし、論語に百世と雖も知ぬべしとは、此理を示されたるなり、自ら善心をおこせば、人も

善心を起すなり、自ら善行をなせは、人も善行をなすなり、一家仁なれば一國仁を興すと、大學に示されたるは此理なり、善のちいさき者は、一家を治むるに足る、善の大なる者は、天下を治むるに足る、之に反して惡の少さき者は、一家も治らず、惡の大きなる者は天下も治らず、夏の桀王殷の紂王の例あきらかなり、孟子が舜跖の分ちは利と善となりと云はれしは尤のことなり、扨其修善に就て前來示したるは、大凡世善と云て人間界一世の善をいへるなり、我佛敎は三世を說きて、此善三世乃至百千萬世に及ぶなり、故に佛如來は三祇百大劫の間、この善行をつもれる人なりと說けり、されば三千世界の一切の善行は、悉く身に行はれたるの功德を圓滿して、而して佛の悟りを開きたる者なれば、一分衆生にも之を敎へ諭て、我佛果の悟りを開き、一切の迷ひを轉じ、一切の善を積ましめんが爲めに說かるゝなり、夫に就て瓔珞經には、三聚淨戒と云へることを說れたり、三聚戒とは、一に攝律儀戒とまうすは前にいへるが如く、一切の惡を斷伏して遠ざかれるなり、之を四句の文には、諸惡莫作と云、次に攝善法戒と云は、右に述る如き一切の善法を修するを云、其數八萬四千なりと說けり、是なは大數なり、實には塵沙無量の法門なり、人間一生にて成滿すへきに非ざれば、生々世々之を修せよと勸めたまへる也、自らも是の如く修し、一切衆生にも是の

如く修せしむるを、第三攝衆生戒と云なり、此自行化他の兩益を成滿して、而して釋迦佛と同じ悟りの地に至を妙覺果滿と云、之を出世間の善と云、善の名は同じけれども、世善は少くして短し功も劣りて德も薄し、出世の善根は數も多く、時も長く功も勝れ德も厚し、凡そ物みな勝劣あり長短あり麤細あり厚薄あり、今日の開明世界といへども、何事も昔よりは勝長厚細になりたるを喜ぶに非すや、其道德を修するも亦厚巧微細ならずんばあるべからず、凡そ內外の典籍を按するに、其損益を比し其巧拙を計るに至ては、釋迦佛所說の經論に及ぶものあることなし、但尋常の人情輕薄の世に在て、其道の高尙なるに過るが如きを以て、其至理を研究することを勸むるの暇なきと、且己れ〳〵が先入爲主の道を比較するの力足ざるより、佛敎に疑を懷き經論に信を措くこと能はざるは、宿善の足ざると機根の熟せざるが爲なるべし、爾に短綆は深井を汲みがたしと云へる是なり、佛敎は純善無漏を以て宗法とす、何れの世、誰の人か之を誹毀する者あらん、大學に曰ずや止至善、又曰く唯善以爲寶、衆善奉行の一句、其功天地に充塞す、豈貴からずや豈奇ならずや、

既に諸惡莫作衆善奉行の說を演ぶ、今正に自淨其意の說を演ふべし、自の言は他に對し、淨は穢に對し、其意は心識を指す、則ち五蘊の中の受想行識にして、色蘊に簡別

せるなり、大學に曰く物有本末、事有終始と、夫れ治國齊家の始本は特に正心誠意に在り、是れ天下古今の達道にして、凡そ人たる者の以て省みざるべからざるもの也、論語顏淵の篇に曰く、一日克己復禮天下歸仁焉爲仁由己而由人乎哉と、いへる辭は全く今文の自淨其意の註釋とするに足れり、自の字は自然の義もあれども、今の自は、易の語に君子以自强不息といへるの義にして、夙夜浸々として務めて解らざるを云、唐の善導日沒の偈に、自策自勵求常住と云へるを以て證すべし、又論語憲問篇に、古之學者爲己、今之學者爲人と云へるも、其自ら省みるの厚きに非ざれば、道に近からざるとを示せるなり、天台の自證妙宗に暗らければ、他を益するに由なしといへる如き、其自ら此を勸め行ふに非らざれば、利益を人に及ぼすこと能はざるものなり、已上自の字凡そ是の如し、淨其意の三字を說くに、先つ其意の意の字の義を畧說せん、外典には心意識の三言各之を解すると少異あれども吾か佛典に在りては、世親菩薩の二十唯識論の語に、心意識了名之差別と示して、或は三界唯心とか或は一切唯識とも或は十二處に在ては意處と名け、十八界に在て意界と云ふ、經論名を別にすと雖も、其旨是れ同じ、此意界を釋すること、大小乘稍異なるとなきに非ず、今暫く唯識大乘の說く所に就て云はゞ、心に王と所の二種あり、其心王と稱するもの八

種あり、謂ゆる五識と第六識(了別識と云)第七識(意識と云)第八識(阿賴耶、翻して藏識と云)心所に五十一種あり遍行に五あり不定に四あり總て六位五十一種となる、各心王に隨逐して善、惡、無記の三性に涉り、其相微細なり、今具說するとわたはす、知らんと欲せば、論藏に就て學ぶべし、此中七八二識は內轉門と名げて微細中の亦細微なるものなれば、凡夫二乘には解知の及はさるよしにて、暫く之を示したまはざる故に、唯識論に華嚴經を引て、阿陀那識甚深微細爲凡下不開演と示し玉へり、されば今の意の言は第六識已下の外轉の分に就て之を說かざるべからず、さて第六識を能緣の了別識とす、此に對する色聲香味觸法を所緣の境界とす、己上意の言を略釋すること是の如し、次に自淨の淨の言を詳にすべし、蓋し淨は穢に對する辭なり、則ち淸淨潔白の義なり、夫れ意識は三性に涉るなり、(三性とは善と惡と無記となり)、五遍行五別境の十の心所は、三性に涉り信、慚愧、等の十一の心所は善心に局り、貪瞋等の六心所及び慳、嫉等の二十の隨惑の心所は惡心に局る、淨は言は善の義にて所緣の境に對して、十一の心所に據るものを指す、謂ゆる身に孝悌忠信を行ひ、或は無貪の心を以て物を施し、或は恭心を以て戒を持ち、或は口に惡逆粗暴の言辭を吐かず、心に四諦三寶の理を信ずる等、すべて事善根功德に涉る、此を自淨其意と云、善淨み

な身口意に涉るを、今の文特に淨意と云へるは、三業の中に意業を主最とするに由ればなり、華嚴經に淨行品あり、一百四十行の偈文あり、佛道修行の人、行住坐臥進止動作すべて悉く淸淨行法たらんことを願求す、故に淨行品と名く、今の自淨其意全く此意なり、一百四十偈頌多しといへども、之を總括するに、諸惡莫作衆善奉行の兩句に外ならず尙言べきこと多しと雖ども、之を盡す能はず、

諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意の三句は前に已に辯せり今正に是諸佛敎の句義を演べて一偈を全ふせん、諸佛とは阿彌陀經には十方に恒河沙數の諸佛ありと說き、少く其名を出す、元魏の菩提流支の譯本に佛名經十二卷あり、佛菩薩及辟支佛名を其して一萬一千九十三尊あり、隋の闍崛多共笈多譯する五千五百佛名經あり、(經中四千七百零四佛を出す)開元拾遺錄に附す、中に三劫三千諸佛名經三卷あり、古へ宮中佛名會に用ひられし經なり、今も各州諸寺に於て臘八に佛名の會式あるものこれなり、此外千佛因緣經、百佛名經、及ひ三十卷の佛名經あり、傳譯の佛名凡そ此の如し、今の諸佛の語みな此中に涉ると知るべし、其中三劫三千佛を取て恒常の說とするものは、其過現未の三世、人の知りやすく、信じやすきに就て之を擧るなり、其中亦毘婆尸佛(過去莊嚴劫第九百九十八尊なり)、尸棄佛(同第九百九十九尊なり)、毘舍浮佛

(同第一千佛なり)、拘留孫佛(現在賢劫第一佛なり)、拘那含牟尼佛(同第二佛なり)、迦葉佛(同第三尊なり)、釋迦牟尼佛(同第四尊なり)、此七佛は特に其出世の遠からざるを以て、經中數々此名號を擧ぐ、法天所譯に佛說七佛經あり、七佛各壽命、父母、弟子等を出す、されば今の四句の文をも、七佛通誡の偈と稱するは之が爲なり、其佛德を讃するに至りては、諸佛同道にして少異もあることなし、其德の多少優劣を論ずることを得ず、近く釋迦佛を以て準規とすべし、佛とは具さに佛陀、此に覺と翻ず、三義あり自覺々他覺行圓滿なればなり、又佛地論には六德を出す、自在熾盛、端嚴、名稱、吉祥、尊貴、これなり、菩薩地持經、及び涅槃經等には十號を出す、如來、應供等恒に示すが如し、一切煩惱を斷盡し一切智を成就し永く人天の師位たるを以て天人士と號す、文殊、普賢、觀音、地藏、の應現自在の德あるも、猶一等を遜し三舍を避けざることを得ず、況や聲聞羅漢乘に於てをや、羅漢は三界の煩惱を斷し四諦の理を證る、而して之を佛に對するに嬰兒を以てすると涅槃經に見ゆ、況や一毫未斷の凡夫地を以て、豈に佛果究滿の人を討量することを得んや、只其像人類に混ずるを以て、其內德如何を問はず、九十六種の嫉妬を懷く者ありて、數々輕弄卑視することあり、適〳〵謁見の日に當りて、威嚴膽を消し說法驕慢を伏す、經論之を出すこと枚擧に遑あらず、支那道家儒士しば

〳〵廢斥を加ふ、遂に三武の破法あるに至る、其實嫉妬と痴慢の煩惱に出づ、畢竟一介の饅頭咬着して味を知らざるに由れるなり、皇國近代聊か破毀の言語を聞く、大凡そ儒見に仿ふ、齒牙にかくるに足らず、之を喩ふるに蟹螯の自ら、傍行して人の直行を怪しみ、蝙蝠の已れ倒懸して人の倒行を疑が如き者是なり、書者楚子非福を以て孔子を品し(史記孔子世家)、市人膀下を以て韓信を待つ(同韓信傳)、其實其人の至德を知らざるに出でゝ、高人をして卑夫に比同す、愚陋言ふに足らず、凡そ今古異學の輩、佛德の天地に彌淪するを知らず、以て事を凡夫の貪瞋痴慢の人に比同す、倒見に非ずして何ぞや、人類の中佛如來の出現する、以て慶すべく、以て賀すべきなり、已れが偏見の及ばざるに惑ふて、之を毀訾する者は暗聾の人にあらずんば果して顚狂の謂のみ、佛の一字を說く凡そ是の如し、次に敎の字を註すべし、敎とは上より下に命ずるの辭と釋す、上智の人の下愚を諭すの謂なり、蓋し佛敎多端なり、維摩經に應病與藥と說けり、凡そ支那の譯經今にして七千餘卷(梵土に在て猶數萬卷ありと云)、皇國すべて之を傳來す、各宗の諸祖之に依て宗法を建立す、謂ゆる倶舍成實、三論、法相、天台、眞言、禪、淨土なり、其敎法各異差別あるに似たれども、其轉迷開悟の道に至りては、其歸趣一毫も殊にするものなし、何をか歸一と云、諸惡莫作は轉迷の歸一な

り、衆善奉行は開悟の歸一なり、此の迷悟を知り、迷悟亡する地位に至るを自淨其意と云ふ、法門八萬四千あるも、一偈四句の餘に洩らすものなし、是を以て過去の千佛是を說き現在千佛是を說き、未來の千佛是を說く、十方淨穢二土の佛恒河沙數の如しと云へども、苟も是を說かざれば別に說くべき佛法は之なしと知るべし、古に先聖後聖其揆一也といへる者は此の謂なり、其敎を委悉せんと欲せば、其家に就て之を問べし、敎の字の註略して演ふると是の如し、

因曰維摩經佛國品曰隨其心淨即佛土淨(心土相對)○無量壽經曰清淨安穩微妙快樂(純淨土相)○涅槃曰常樂我淨(涅槃經の四德となづく)不生不滅淨(自淨其意の說と照見すべし)○義林章一總料簡章○五敎章上叙古今立敎○法華玄義十上敎玄義(敎の字註す是等の典籍に就て研究すべし)

- 諸惡
  - 煩惱障(小乘所斷)所知障(菩薩所斷)……二障
  - 見思(二乘)塵沙(三賢)無明(地上)……三惑
  - 人我(聲聞所斷)法我(菩薩所斷)……二執
- 衆善
  - 人(聲聞所証)法(菩薩所証)……二空
  - 一切智(聲聞所証)道種智(菩薩三賢所証)一切種智(地上所証)……三智
  - 攝律儀戒攝善法戒攝衆生戒……三聚戒

迷悟

徧ねく一虛空界なり、而して日出れは晝となつけ、月出れは夜となづく、等く一法界なり、悟る者は佛と名け、迷ふ者を衆生と名く、迷ひに淺深あり、地獄餓鬼畜生を以て其迷の深きものとす、天上人間を以て其の迷の淺きものとす、敎は淺き者について、あらはるゝものなり、蓋し孝悌忠臣の道たる人の爲めに說くものなり、鬼畜のために設くるものにあらず、孔門一世の格言、千歲服膺せずんばあるべからざる所以なり、迷の淺きものは悟に近き者なり、釋迦世尊人に對して佛法を說く所以なり、迷すでに淺深あり、悟また淺深なからんや、淺識の者のために、五戒十善を說き、深智の者のために、四諦十二因緣六度を說て、之を擴充して八万四千の法門にわたる、夫れ一法に迷悟あるは空界に晝夜あるがごとし、苟くも信謗毀譽を以て論する勿れ

心如工畫師畫種々五蘊

華嚴經曰、心如工畫師畫種々五蘊、心とは人の思ふ所の心をいふ、貪瞋なぞの心は惡